
Infinite Sky Knight <インフィニット・スカイ・ナイト>

RYUZEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Infinite Sky Knight インフィニット・スカイ・ナイト

カイ・ナイト

【Zコード】

N1117S

【作者名】

RYUZEN

【あらすじ】

インフィニットストラatos。通称ISが始めて大々的に表に出た白騎士事件以降、世界は戦いの矛を收めIS開発に躍起になつた。しかし全ての戦争がなくなつた訳ではなかつた。アイスランドの東西を真つ二つに割つた戦乱は『白騎士事件』以降も停戦するとはなく両軍は泥沼の戦争を続けていた。だがやがてその戦争も終結し、後には荒廃した自國の領土と、IS開発に圧倒的に遅れたという事実が残るのみであった。そんなある日、空軍の若きエースパ

イロット『レナルド・レストランクール』の自宅に巨大な二ンジンが墜ちてくる。二ンジンは言った。『いや、乗らない?』と。

FLIGHT1 人參が墜ちてきた日(前書き)

一応のプロットが定まつたので投稿します。

IS

正式名称インフィニットストラトス。稀代の天才発明家である篠ノ之束により開発された、全く新たなる概念の兵器。ISの前では従来の戦闘機や戦車など物の数ではない。正に鳥合の衆。どれ程の練度があるうと、どれほど研鑽を積もうと、どれほど技量を磨こうとISという最強兵器の前では玩具に等しい。そしてISが何故か女性にしか扱えない以上、世界が緩やかに女尊男卑になっていくのも自然な流れのように思えた。認めたくは、ないが。

東西戦争。

アイスランドを東西の真っ二つに分けて殺しあつた戦いの名だ。そのまんまではないか、と思つが分かりやすいからいいのだろう。

狭い国土で発生した泥沼の戦争は、世界がISという兵器に夢中になつてゐる間も終わる事はなく、両軍はまるで狂つたように戦いを続けていた。

やがて軍からはベテランパイロットやベテラン兵士が失われ、まだ若い少年といえる年齢の者達が、単短期間での育成コースを卒業させられ、戦場へ借り出されるのは日常茶飯事であった。

そんな戦争でも、終戦といつのは必ず訪れる。

勝利したのは西軍。これがまた面倒な勝ち方で、書くと長くなる

ので省略する。

しかし戦争が終わったからといって、全てが解決する訳でもない。漸く一つに纏まつたイスラムがすべき事は沢山ある。その一つがIS。

先も述べたがISは最強の兵器だ。

もしこれの開発や研究に遅れがあるれば、簡単に先進国と言う名から脱落する。いや、というより既にイスラムは脱落しかけていた。戦争にばかり夢中になつて、ISのことなど殆ど見向きもしていなかつたのだから。

だが、どうやら自分は祖国の底力というのを侮つていたらしい。戦後驚異的なスピードで復興していったイスラムは、軍直轄の研究機関でISを研究、製造を始めて僅か数年で、世界第四位のシューアを獲得するまでに到つていた。

なんでも、他国がISに右往左往してる間に、生の戦争をたっぷり味わつていた事が役に立つたらしい。が、それだけじゃないだろう。主観的に見ても客観的に見ても、今の軍総帥はかなりのやり手だ。東軍との戦争と同時進行で、他国からISの情報をちらりまかしていたとしても可笑しくない。

しかしその弊害はある。

ISが盛んになるといつ事は、即ち女尊男卑社会までもが浸透するといつことなのだから。

「レストランクール隊長！」

部下からの声に振り返る。

走り寄つてくる小動物のよつな少女…………に見える少年。

「どうした?」

「今日も使えないみたいですね。なんでもHISの実験だとかで……」

「またかよ」

HISが重用なのは分かる。

しかしいつも訓練が減るといつのは、流石に腹立たしさを感じずにはいられない。

もう一週間も飛んでないので、そろそろ苛々してきた。

それもこれも、よりによつてアイスランドに四機しかないHISのうち一機が配備されている基地の所属という事が悪い。

どうにかして別の基地に移動出来ればいいのだが。

「なんだか、最近ずっとですね。

こないだなんか、僕よりも小さな少女に呼び止められたと思つたら、ジユース買つてこいよ馬鹿男、ですつて。流石にカチンときちやいましたよ」

「(+)愁傷様だつたな、ロン。で、買つてやつたのか?」

「買つ訳ないですよ、レナルド先輩。無視しました、無視――」

ロンを適当にあしひりつづり、血抜くと向かつ。

久々に飛べると思つたから意氣揚々と来たといつのは、これじゅうへ口だ。

わつわと帰つて寝るとしょひ。

自宅に戻ると散らかっていた。掃除なんてしないので当然といえばそれまでだが。一応これでも大尉なので、結構な広さだ。

適当に服やらを放りつつ、なんとかベッドの前まで辿り着く。冷蔵庫からビールを取り出して飲む。本来ならまだ飲酒は出来ない年齢だが、上官曰く軍人に未成年も糞もあるか！ との事らしい。ヒヨックの頃は良く先輩にからかわれたっけ。

「はあ～～～～」

深く、溜息が零れる。

やるせない。

子供の頃から戦闘機のパイロットになりたくて勉強していたのが祟つて、まだ高校入学前だといつのにパイロットとして借り出されて一年。

戦つて、戦つて、ひたすら戦つた。生き残るために、国を守る為に。だがその自分が守つたものが今の女尊男卑社会なのかと思うと、色々と疲れる。

おまけに空軍のエースという称号も、ISというスーパー兵器の前では紙の様に吹き飛ばされてしまつ。それもこれもISの……いや、それを作つた。

その時。

軽快なリズムが鳴る。これは電話の着信音だ。一体誰からだろう。電話に出る。すると第一声は。

『おつ久し振りだねー！ れっくん！ 皆のアイドル東さんだよつ！』

切つた。

それはもう、高速で。

聞かなかつた事にしょり。わつりがこ。わつわの電話はなかつた。

だが現実は非情なもので、再び電話が鳴る。

一瞬、このまま電話を破壊したい衝動に駆られると、さつにか堪える。やがて諦め。

「もしもじ」

『もしもす益荒男ー』

「…………やよなり」

切つた。

が、再び電話が鳴る。じうじょうつか。このまま無視するのはいいが、あんまり無視を続けると最悪アイスラングに核弾頭でも落としかねないし。仕方ない。これでも一応愛国心くらいはある。

『い、れつくんが酷いよ。DHCが足りてないよおー。』

「で、何の用ですか？ 僕は今非常に機嫌が悪いので、单刀直入に言つてください。

あとDHCは足りてますから、心配なく。こんな対応をとるのは貴女にだけです」

『冷たいなあー。じゃ、じ期待に応えてバリバリ言つやけりつねー。

IIS学園に入学しどこちやつてー』

「はあー？」

何を言つ出すのだ、この人は。

天才と馬鹿は紙一重というが、遂に完全な馬鹿になつたのか。

『あつ。なんだか酷いこと考へてるでしょー』

性格破綻者の癖して妙に鋭い。

大体 I.S 学園とは通常の高等教育だけではなく、その名の通り I.S の訓練、運用法を学ぶ学校だ。そして I.S を使えるのが女性だけなので、必然そこは女子高である。

男である俺が通う事自体が意味不明だし、そもそも入学試験を突破していない。

「……失敬。話の意図が見えないんですが。

エイプリルフールならまだ先ですよ」

『冗談じゃないよお。ほらほら、いつくんが I.S を動かしたつてい
うのは聞いたでしょ！』

いつくん、この人がそう呼ぶ人間は一人しかいない。

織斑一夏。戦前、自分が日本へと留学 というより半ば追

放 されていた時に知り合つた男だ。彼とその姉である千冬、
そして篠ノ之道場の人達には良く世話になつた。色々と嫌な事もあ
つたが、今となつては良い思い出である。まあ、若干一名ほど奇天
烈な人に付き纏われるよになつたが。

その織斑一夏が如何してだか男なのに I.S を起動してしまつたと
いうニュースは、この遠く離れたアイスランドにも届いてきた。

知つた当初は驚いて日本へ電話したりもしたが、やはりどんなビ
ッグニュースにも飽きというはあるもので、一週間もすれば如何
でもいい事になつていた。

「それで、一夏がＩＳを動かした事と俺がＩＳ学園に入学する事と何の関係があるんです？」

「どこの誰かが作ったＩＳのせいで、中々飛ぶ事が出来なくなつて苛々してるんですよ」

『へえ～、凄いね。そのどこの誰かつて』

「…………」

切つた。

ついでに篠ノ之束の電話番号を着信拒否に設定しておく。だがまだ安心出来ない。念の為電源も切つておく。

「バッテリーも抜いておくか。それと……」

寝る前だというのに仕事が出来てしまつた。

この家に連絡してくる為の、ありとあらゆるルートを想定しそれを遮断する。

相手は性格がぶつとんでいるものの究極の天才技術者だ。警戒しそ過ぎるといふことはない。

結局、あれから部屋に通信が入る事はなかつた。

どうやらあの人も諦めてくれたらしい。

大体なにがＩＳ学園に入学しろ、だ。

【冗談はその頭脳だけにして欲しい。

一通りの仕事を終わらせ自宅に帰る準備をする。

今日も飛べなかつた。まったく、いつそのこと軍を除隊して民間

の航空会社にでも再就職するか。そしたらエリの実験だかで飛べなくなる事もないだろ？。

「先輩。今日もテートですか」

後輩であり部下であるロン・ファリーナがそりひいて来た。

「どうここ、今田は直帰だよ。お前も彼女の一人や一人つくれよ？」

「いえ誘いを受けた事があるんですけど…………その、どうも委縮しちゃつて。

ほり世の中つて今あれですし」

「アホ。そんな弱気じゃ一生童貞のままだぞ。お前もパイロットなら女の一人や二人囮むくらいの気合でやれ。そんな弱気だからケツの穴の青い雌餓鬼に舐められるんだ」

「しょ、精進します」

「じゃ、頑張れよ」

さて悩める後輩に的確なアドバイスをした所で帰るか。

ふと昨日の記憶が蘇るが…………無視する。あれは関わってはいけないことだ。

基地から車で数十分。

間借りしているマンションに到着した。

軍からは結構な給料を貰っているので中々に上等な造りである。

「ただいま……」と言つても誰もいないんだけどな

少し前までは黒髪のエキゾチックな女が出迎えてくれた。その前は一人の期間が少し続き、そのまた前は金髪の可憐な女が出迎えてくれた。そしてまた一人の期間が続き、そして今度はまた。そんなスパイラルがこの部屋では起こっている。自分でも随分と節操がないことだと思うが、これはたぶん血統だろう。それにパイロットなんて大抵そんなものだ。

「……なんか、疲れた」

頭が痛い。

さつさとシャワーを済まい着替える。しかし着替えるといつても上半身裸に下はGパンだ。これで彼女がいる期間だったなら全裸でベッドインするところだが、生憎と今は独り身。

電気を消す。そのまま倒れるにベッドに横になり。

瞬間、爆音が鳴り響いた。

マンションの最上階にある自室の天井が破壊されていく。

「な、なんだ!? テロリストの強襲かッ！」

慌てて締まつていおいた拳銃を手に取る。

そして突如として部屋に落下してきた物を凝視して、思わず啞然とする。

「ニンジ、ン?」

それはニンジンだった。

よくハイスクールの餓鬼が嫌うニンジン。兎と馬の好物であるニンジンだ。

しかしサイズが可笑しい。ニンジンというのは普通人の手に持てるサイズのはずだ。なのにこのニンジンはどう考へても人の背丈を越えている。

やがてニンジンに穴が空き、中から人が降りてくる。
特徴的なウサ耳。隈の出来た瞳。そして。

「IS、乗らない?」

そのニンジンの女性は。
篠ノ之束は人の自宅に突っ込んでおいて、そんな事を口にした。

FLIGHT 1 人參が墜ちてきた日（後書き）

一応、主人公は篠ノ之束と顔見知りという設定です。

「織斑一夏」がISを扱えたのは「篠ノ之束」が仕組んでいたからだつた、というのが眞実だつた場合、色々と矛盾が発生してしまいますから。

篠ノ之束。

非常に認めたくない事だが、恐らく世界一の頭脳を持つ天才である。あの超兵器I-Sを一人で開発し、しかもそのI-Sは現行兵器全てを圧倒するときている。

いや、ならば天才ではないか。人の領域を超えた才能。それは鬼才と呼ぶのだ。

頭がショートしたかと思った。

それだけに、目の前で起きた一連の出来事は脳の限界を超えていた。

何故ニンジン。そして如何して現在行方を晦ましている篠ノ之束が此処にいる。なによりI-S乗らないというのは何だ？

「…………」

「おっひさしぶりだねー！ れつくん！

直接会うのは一年ぶりくらいだねえ！」

「…………」

取り合えず警察に連絡しよう。

不法侵入に器物損害、不法入国にテロ未遂。

十分に警察に頼る段階にきてる。いや警察でこの人を止められ

るだらうか。

どうせなら軍に連絡して ILS 部隊でも突撃させたほうが……。

「ああそれと、ここいら辺の電波は遮断してるので電話は使えないよお」

「ちつ」

手の早い。腐りきつても天才か。

ならいっそ肉弾戦で叩きのめしてから……。駄目だ。この人の事だ。生身の人間一人が襲い掛かった所で無意味だろう。なにかバリアみたいなもので防いでも可笑しくない。

インフィニット・ストラトスという兵器と同じく、篠ノ之束という女性もまた規格外なのだ。

もはやこの人の事はただの人間ではなく、台風や落雷などの災害として扱つたほうがいいかもしね。いや今直ぐにでも扱うべきだ。

「それで一体全体何の用ですか?
用がないなら今直ぐ帰つてください」

「うう、れつくんが酷いよお。

あの夜、激しく肌を合わせあつたのを忘れちゃつたの?」

「何時のことですか、それは。

幾ら俺でも貴女に”だけ”は手を出しませんよ

「いけず〜」

「で、用件を聞きましょつか」

束は少しだけ頭を捻つて。

そして悪戯の成功した子供のような顔を浮かべた。

「はい、これ！」

「なんですか？」

差し出してきた書類を受け取る。

そこには、なんと……。

「IIS学園の入学許可証！？」

「そう。しっかりと入学手続きとかも済ませておいたよー。」

その書類を、レナルドは……破いた。

まるで親の仇でも引き裂くかのように、思いつきり。

「ああーー！ 折角IIS学園にハッキングして用意したのにいー

「ハッキングかっ！ 大体なんで男の俺がIIS学園に入学しなきや
ならないんだ！」

「えつ？ 面白そつだから？」

「…………やつぱり、それですか

深く、深く溜息を吐く。

もう駄目だ。この人相手に普通の対人マーケティングは使えない。

さて幸いにも二ンジンと束がいる場所は窓際。このまま全力疾走でいけば扉まで到達できる。財布はポケットにあるし服は適当に上着を掴めばいいだろ。タイミングを見計らう、そして。

「ああ！ れっくんが逃げたっ！」

抜けた。そのまま上着を掴んで外に出る。

夜の風がやや肌寒い。それでもレナルドの胸には、一つの脅威から脱した奇妙な達成感があつた。もう彼を阻むモノはなにもない。彼は風となつて夜の街を駆けて行つた。

そして五日後。

突如として軍総帥からの呼び出しを受けたレナルドは、怪訝な気持ちになりつつも首都レイキャビクにある総帥執務室へと向かつた。

「レナルド・レンテンクール参りました」

「入れ

許可が出たのと同時に入室する。

そこには、このアイスランドの実質的ナンバーワンが確かな貫禄と共に座つていた。

自分と同じ金髪碧眼。もう四十年代だというのに未だに二十代にしか見えない甘いマスク。間違いなくアイスランドの総帥だ。

「さて、レストランクール大尉。君を呼んだのは他でもない

「はつ」

「実は先日。これが私の下に届いてね」

指をパチンと鳴らす。

すると床の一部が割れそこから一つの物体が浮かび上がってくる。

「紳帥、これは……！」

「そうだ。インフィニット・ストラトスだ。

無論、我が國の物でもなければ、他国の量産型でもない。

完全なオリジナルの専用機だ」

そのISは確かに見た事が無い物だった。

アイスランドの量産型ベオウルフよりもスリムで、どこか高い敏捷性を感じさせる造形。神秘的でしながらも全体的に黒色とフレームや間接部分が赤というペイントにより悪魔的なイメージを抱きもする。そんなISが…………堪らなく、不愉快だった。

何故かは知らない。けれどこの不快感はどうしようもない。昨日もISのせいで飛行訓練が出来なかつたせいだろうか。

「さて。それとエラと一緒にこんな物まで送られてきてね」

「そ、それは……！」

間違いない。

五日前に自分が破り捨てた入学許可証だ。

といふことは、やつぱりこのISを送つてきたのも。

「余談だが、このISと入学許可証の差出人は『篠ノ之東』だそう

だ」

「やつぱり」

もつと警戒するべきだった。

あの人気がこんな簡単に諦める訳がないと、知っていた筈なのに。

「ではそのISを起動してみる…………いや、先ずは触れてみる」

「くつ？」

理解不能な命令に思わず唖然としてしまつ。

「早くしろ、これは命令だ」

「イエス、サー！」

命令といつのならば従わなければならぬ。

それが軍総帥なら尚更だ。

ISに触れる。すると

「！」

流れ込んでくる数多の情報。

分かる。これの扱い方が。これの起動方法が。

少し前までは遠い世界の理だったIS。

その基本動作、センサー制度、限界時間、アーマー残量。

まるで長年熟知した知識のよつに脳髄に直接流し込まれていく。

「こいつ……動くぞ」

手足が両足が胴体が、流石に自分の体と同等とまえはいかないが、なんとか動かせる。

何故だ。ISは女性にしか起動出来ないはずではなかつたのか。

「決まりだな。

お前はこれより日本の渡りIS学園に入学しろ。階級も一つほど上げよう」

「IS学園へ！？」

「その通りだ、レストランクール”少佐”。

麗しの篠ノ之博士から『この機体をれつくんにあ～げる』と書かれている以上、この機体は君の、引いては君が所属するアイスランド軍のもの、という事になる。

そしてISの実戦データを採る場所としてIS学園ほど相応しい場所もないだろ？

「…………！」

正論だ。

世界一多くの種類のISが集まる場所、と言つても過言ではないIS学園。

そこには実戦データを採る為に多くの国々が、選ばれた代表候補生達に”専用機”を委ね入学させている。棚から牡丹餅で彼の篠ノ之博士が作り上げた専用機を手に入れてしまった以上、アイスランドがどうしても実戦データをとりたいと思うとは当然だ。

それでも、どうにかして拒否しなければならない。

「な、なら他のモノを乗せれば！ 男とはいえISにおいては素人でしかない私よりも他の搭乗者を乗せたほうが！」

「残念だつたな。篠ノ之博士によると、この機体は『れつくん専用機』だそうだ。他のモノを乗せれば、あらゆる手段を使って奪還する、ということだ」

「くつ……！」

甘かった。

ここまで先手を打たれると、怒りを通り越して尊敬の念すら覚える。

「念のために言つて置くが、君にこの命令に対する拒否権は認められない。また現時点をもつて特殊条項第1-1条を適用。自由意志での除隊権を認めないものとする」

遂に最後の階まで落とされた。

忘れてた。強かなのは篠ノ之束だけじゃない。この総帥もまた、総帥就任僅か三ヶ月で西軍に勝利を齎せた怪物だった。

精々16・7しか生きていかない若造の考え方などお見通しという事が。

か。

「だけど、どうするんですか？」

私は十六歳ですけど……」

高校入学は十五歳の時。

既にレナルドは年齢的には高校一年生になつていてる年である。

「どうするも何も……お前は高校に入学すらしていなーいだろ？
転入ではなく入学だ」

「はあ」

「それに学校といつものはいいものだ。通つておいて損はない」

しみじみと総帥が言った。

正論故に否定できない。高校入学前に軍に入つてしまつた以上、レナルド・レストランクールは高校生になつていないので。

それに学校の大切さくらいは分かる。今でも発展途上国やアイスランド人の一部には小学校にすら通えない子供達が多くいる。ならどんな形とはいえ高校に通える、といつのは有難いことだ。

「それで出発は何時ですか？」

「今日からだ」

「え、…」

それが合図となつたのか執務室にサングラスを掛けた黒服が入室していく。

どうやら出発する準備をする時間すら満足には与えてくれないようだ。

もう一度レナルドは溜息をついて、その黒服に同行した。

FLIGHT 3 遅刻

人が集まつてくることが始まりであり、人が一緒にいることで進歩があり、人が一緒に働くことが成功をもたらす。

学校というのもそれが目的なのかもしれない。勉強するだけならば家でも出来る。けど数十人の人間が共に学び、共に遊び、共に青春を謳歌する場所は”学校”を置いて他にはないだろう。

レナルドが総帥直々に I.S 学園に入学せよ、との命令を受けてまだ 24 時間が経過していない今日。既に彼は I.S 学園の教室へと足を踏み入れていた。

余談だが、彼が一通りの準備を完了したのが五時間前。そして I.S 学園に到着したのは一時間前。そこで授業道具一式と制服を渡され、今この席に座っているということだ。幸か不幸かボストンバッグのような荷物は黒服が寮に届けてくれるらしい。

そして広い敷地の校舎に迷いつつ、つい十分前に教室に到着したのだ。だが……。

「…………」

「…………」

重い沈黙。それはそうだね。

例年ならいざ知れず、今年には異常な事に”男子”が一人もいるのだから。

I.S学園は名目上は女子高ではない。男子は入学お断りなどとは募集要項にも書かれていない。けれどI.Sを起動出来るのが”女性”だけである以上、事実上I.S学園は女子高となるのだ。

そんな女の園に紛れ込んだ男が一人。目立たない筈がない。

（はあ……。ま、予測はしていたけどな）

嘗てレナルドが短期間パイロット要請コースを受けていた時も、男に混じって女性が一人だけいた。その女性の姿もあって周囲の男達は随分と緊張したものだ。

これもそれと同じ。混じっているのが男性か女性かという違いはあれど、それでも随分と似たような状況。一つだけ幸いなのは、この教室にいる男子が一人ではなく二人ということだろう。必然周囲の田も二人の男子に一分される。

だが今現在レナルドが直面している問題は、それほど生易しいものではなかつた。

目の前には阿修羅の如き冷徹な怒りを漂わせる御仁、織斑千冬。そう認めたくない事であるが…………レナルド・レストランクールは入学早々から遅刻したのだ。しかも既に五時間目。かなり大幅にタイムオーバーしている。

「さて、言い訳を聞こうか？」

まるで死刑宣告のようにその教師は、織斑千冬は言った。
少なくとも、それは六年ぶりに再会した顔見知りに対する声色ではない。

気付けば教室中が興味ではなく恐怖で静まり返っていた。

(何か言わなければ…… さもないと殺^やられるー)

流石に一応IHS学園は高等学校。遅刻したからといつ理由で銃殺刑になるような事はないと思うが、それでも今の織斑千冬という女性にはそれを為すかもしないという凄味があった。意を決してレナルドは言つ。遅れた…… 言い訳を。

「実はこのIHS学園に入学するより国に命じられたのはつい昨日のことでした……」

「ほう。それで」

「早急に準備しIHS学園へ向かったのですが、既に時遅く！ また広大なIHS学園の敷地に迷つたこともあります…… その、遅れました」

「そうか。そういう事情があるのならば……」

「許してくれるんですかーー？」

期待に胸が高鳴る。

「反省文三枚で勘弁してやる」

残酷に罰を告げられた。

やはり人生そう上手くはいかない、か。

取り敢えずは反省文三枚、だけで済んだ。そつプラス思考に考えよう。

「……………イース、マム」

持っていた出席簿で頭を殴られた。

「一夏は軍隊ではない。返事は『はい』でいい

「はい、教官」

再び殴られた。

頭が割れる。軍隊生活で殴られ慣れてなかつたら氣絶しても可笑
しくない一撃。

「教官ではなく織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生」

「よし。では席に着け」

一つだけ空いていた席に座る。

残念ながら一夏とは離れている。それも当然か。

なにせ此処は世界中から生徒が集まるとはいえ日本の学校。入学
当初の席順は『あいうえお準』なのだ。そして一夏は織斑の『お』。
レナルドはレストランクールの『れ』だ。

どうやら自分のハイスクールライフは最初っから躓いたようだ。
今日来日してから始めての溜息をつくと、授業に集中した。

一つだけ理解出来た事がある。

それはIIS。いやIISの事が理解出来たという訳じゃない。

つまりIISの事が全く理解出来ないという事が理解出来たのだ。これぞ無知の知。一歩前進だ……。そう思いたいのは山々であるが、そうもいかない。なにより教室中の様子を伺うに、現状で授業についていくてないのは自分と、そして同じ男子生徒である一夏だけ。ここに来る前に電話帳のように分厚い教本を渡されたが、彼らなんでも一日での量を覚えるなんて人間には不可能だ。せめて一週間、いや一ヶ月は欲しい。

（頼むから指さないでくれよ……）

もしも教師が「この問題を……じゃ、レナルド君」なんて指名したらどうなるか。考えるまでもない。他の生徒にとつて出来ない筈がないような問題を間違えた生徒として『馬鹿』の烙印を押されてしまう。それだけは避けたい。唯でさえ初っ端に躊躇っているというのに。

懐に忍ばせた十字架に祈る。

物資にも味方にも現実にも自分にも、全てに見放された兵士にとって最後に頼めるもの。それこそが神。今レナルドは一心不乱に神への祈りを捧げていた。

そして……祈りは、届いた。

教師はレナルドを指す事は無く授業は終了。
休み時間へと入った。

レナルドは天を仰ぐ。

彼は勝利したのだ。この授業と言ひ合の地獄より、生還したのだ。何の犠牲も出さぬままに。

といつても指されていくのが名前準だつたため『れ』のレナルド

は必然的に後回しになり、指される前に授業が終わっただけなのであるが。

それでもこの沈黙は如何にかならないものか。

(よし、なんとかしよう)

取り合えず行動を起こす事にした。

レナルド・レストランクールという少年は決して消極的でも内向的でもない。

比較的、友人達と喋ったり騒いだりするのが好きだし、わりと積極的なほうだ。

現在このクラス内に自分と面識のある生徒は一人。

一人は言つまでもなく織斑一夏。

そしてもう一人が篠ノ之箒。あの傍迷惑な天災発明家の妹であり自分と同じ被害者だ。

覚悟は出来た。色々と。故に。

「一夏ア！」

「うおー！」

レナルドの叫びに一夏だけではなく他の生徒まで驚いて肩を震わせる。

その隙を見計らい一夏の腕を掴むと、そのまま廊下に引っ張つていった。

他の生徒達は突然の出来事に反応できず立ち竦む。計画は成功だ。

「さて、久し振りだな。元気だったか」

「一夏がポカーンと口を開く

「ああ、元気だ。レナルドも久し振り」

「一夏とレナルドは六年ぶりの再会を祝つて笑いあつ。

「それで空軍に入つたんだっけ？」

「一夏が言つ。

「何で知つてるんだ？」

質問に質問を返すのはマナー違反だが、気になった。
そのことを一夏に話した覚えは無い。というより六年前から一階
も話していないのだ。

「昨日ＴＶでやつてたんだよ。もう一人の男でＩＳを動かせる奴が
見付かつたって。

それで驚いて見てたら……」

「俺だったのか」

しかし自分がＩＳを扱えると分かったのは昨日。

そしてＴＶにそのニュースが出たのも昨日。情報が漏洩したとい
うのは考えずらいので、恐らくアイスランド側が積極的に宣伝した
のだろう。しかし一夏の様子だと詳しい経歴まで流れたらしい。プ
ライバシーの侵害、といいたいが今のアイスランドは独裁政権に近
いし……無駄だろう。

「おい

「んっ？」

振り返る。

するとセレーナは長い黒髪をポニーテールにした女生徒がいた。

「筹じやないかっ！」

「ああ、久し振りだ」

本当に懐かしい。

織斑姉弟だけじゃなくて筹もいるとは流石に予想外だった。
ちなみに彼女が束の妹だからといってレナルドに思う所はない。
寧ろ同じ被害者として同情するくらいだ。

そんな時だった。無情にも授業五分前を告げるチャイムがなった
のは。

名残惜しいが仕方ない。それにもう何時でも会えるのだ。

「やばい、授業遅れるぞーー！」

「わ、分かってるーー！」

慌てて教室に戻る。

その途中、一夏には聞こえないよう

「筹、一夏とは上手くこいつてるのか？」

「い、いや…………その……だな。私も今日再会したばかりで……」

そうか。反応で理解した。
どうせ”まだ”のようだ。

「そうか。まあ頑張れよ

一夏の鈍感さは知っている。
だからせめてホールを送った。

「ああ、すまん」

もうやつて話してみると。

「何の話してるんだ？」

「なんでもないッ！」

まあ兎に角だ。

これから学園生活。退屈せずに済みそうだ。

FLIGHT 3 遅刻（後書き）

今回は導入部なので短め。

次回は束との出会い、そしてイギリス人との……

FLIGHT 4 四人目 の 興味対象

分別と忍耐力に支えられた炎の『』とき情熱を持つ人は、一番成功者になれる資格がある。

だが資格があつたとしてつも、それは決して確定ではない。分別と忍耐力、そして情熱があつたとしても叶わぬ願いもある。けれど人が叶わぬ夢を抱き続けてきたからこそ、今の時代があるのだろう。

遡ること八年と半年ほど前。

後にIISを発表し世界を変革させた天才発明家である篠ノ之束。この時点では、まだそれ程のビッグネームではなかつた。周囲の評価としては『天才』『独創的』『変人』そこに『鬼才』といつものはない。

だけど篠ノ之束という女性にとつてそんなものは如何でも良かつた。

元より彼女は他人の評価など興味もない。他人が自分をどう思おうと関係はない。

何故なら自分が興味を抱くのは世界で”三人”だけなのだから。

その日も篠ノ之束は一人、公園でキーボートに指を走らせていた。通行人がそれを見れば『ちょっと可愛い女子学生が公園でパソコンをしている』くらいにしか思わないだろうが、実際に彼女が行つ

てているのは、名門大学の教授である「と理解出来ないほど高度な“数式”である。

IS、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スージの基礎理論。けれど束が考へていてる通りならばISとは、そんな時であった。

束が走らせているキーボードに飛行機が落下してきた。といつても本物ではない。本物に似せて作られてある模造品。ようするにラジコンだ。

「あーーーっ！」

数時間の労力が水の泡と化した事に流石の束も絶叫する。パソコンを調べてみると……完全に破壊されていた。流石にイラつきた。他人に興味がない彼女であるが、自分の今までの労力をバーにしてくれた下手人を、何もしないで許すほど束も人に無関心ではない。

さて下手人を探し出そう、としたところで。

「お、俺のラジコンがあ！」

探す手間が省けた。

どうやらラジコンの所有者であり自分の労力を破壊した下手人はこの外国人の少年のようだ。

しかしそういう事では余り酷い事をする訳にもいかない。別に彼女自身この少年のことなど全くもつて如何でもいいが、そんな事をしたら興味対象である”三人”との関係を大いに壊してしまう。だけど……

「折角俺の作った二十七機目の相棒。スーパーデビルが……」

「へえ、これ自分で作ったの?」

気付けばそんな事を質問していた。

特に思惑があつた訳ではない。けれど少年の年齢は見た目的に小学生。そして少年曰く自作のラジコンはどう考へても小学生の作るレベルを超えていた。尤もそういう束は小学生の頃にはまつと凄まじい物を作れたが。

「えっと……誰ですか?」

「私の事はどうでもいいよ。で、これ君が作ったの?」

冷たい口調で束が言った。

「そう、だけど……」

「ふうん、将来はパイロットになりたいとか、そういうことか

この年頃の子供が抱く、ごく普通の願望。

それで束の興味は少年から外れた。もう何か仕返しをするという考へもない。

考へてみればこの数時間行っていたのは対して重要なものではなかつた。また作ればいいし、無理に少年に仕返しをして興味対象である三人の気分を悪くするほうが死活問題だ。

そう。少年は篠ノ之束の興味から外れた筈だつた。だけど幸か不幸か、少年が次に放つた言葉はまたしても篠ノ之束の興味を引いた。

「違うよ。俺はソラを飛びたいんだ」

「空？ パイロットになると何処が違うの？」

「だってパイロットじゃ空は飛べてもソラは飛べないだろ」

「はあ？」

天才の頭脳をもつてしても理解不能なことを少年は呟つた。
何を言つてているのだ。空が飛べてもソラは飛べないとせ。支離滅
裂、子供の戯言。そう片付けても良かつたのだが、特にやる事もな
かつた束はもう少しだけ少年の言葉を聞くことにした。

「だつてさ。地球の外にはもつと広い『宇宙』が広がつてゐるじゃな
いか。

勿論最初はこの星の空を飛び回るものいいかもしない。けど何時
かは空と宇宙を自由自在に飛び回つてみたいんだ」

真つ直ぐで純真な瞳。

少年は情熱の籠つた視線を真上にあるソラへ向けていた。
余りにも愚かで馬鹿らしくて、けれど何よりも貴い少年のその願
い。篠ノ之束は興味を持ち、肯定する。妹とも違う。千冬とも違う。
そしてあの少年とも違う。ただ、ひたすらに一つの馬鹿みたいな願
いを抱く子供。純粹に面白こと思った。

「そつか。それじゃあね。

もし君がその願い事を、大人になつてもずうへつと持つていられた

「ら

「こりれたら？」

不思議そうな顔で少年が問う。

篠ノ之束は、満面の笑顔で答えてやつた。

「私が翼をあげる。どんなソラにでも飛んでいける翼を」

「ほ、本当ー?」

「うん　お姉さんとの約束だよ」

それは全国規模で見れば小さな出会いだったただのう。けれど篠ノ之束という女性にとつては大きな出会いだった。妹と親友と、親友の弟に続く四人目の興味対象。それが吉と出るか凶と出るかは、神のみぞ知ることである。

何事にも終わりとこゝのは訪れる。

このI.S学園においても一日の終わりは平等にやってくるのだ。そして全ての授業を消化したレナルドは始めて学園の寮に訪れていた。

「なんとこゝか、やつぱり同室だな」

どこか安心したような、どこか残念のような。そんな風にレナルドが言つた。

「そりやそつだろ。だつて他の奴と一緒にたら男女相部屋になるじゃないか」

新しい同居人。

織斑一夏がそう返答した。

「………… そうだな。なんか少し残念な気もするけど諦めよつ。それに俺と女子が相部屋になると、部屋にいるのが一人から二人になっちゃうかもしれないからな」

「………… 敢えてツツ「まないぞ」

それにしても立派な部屋だ。

自分がパイロットになった時など五人一部屋でしかもこの部屋よりも狭かつたというのに。

これが国立を通り越した国際立というわけか。

掛かっている金が他の名門私立大学とは比べ物にならない。

「そりいえばクラスの生徒が噂しているのを聞いたんだけど……お前、イギリスの代表候補生とクラス代表を決める為の決闘をする事になつたらしいな」

「そりいえばレナルドは二時間目遅刻してきたから居なかつたつける。ああ、そうだぜ。別にクラス代表っていうのは興味なかつたけど、なし崩し的に」

「そりか。随分と自信があるんだな。

やつぱり千冬さんからIS操縦の「ツツとか徹底的に教え込まれてゐるのか？」

「いや全然。千冬姉はISのことは教えてくれなかつたし、授業内容も殆ど分からなかつたからな」

「………… まさか、何も考えずに喧嘩売つたのか？」

「何が？」

ポカソと口を空ける一夏。

そんな一夏に友人としてレナルドは真実を告げてやつた。

「いいか、代表候補生といえばエリート中のエリート。その戦闘力
だって恐ろしく高いんだぞ」

「けど、あいつそんなに強そうじゃなかつたぞ。偉そうな雰囲気は
あつたけど」

「あのな。仮にも国家の代表に選ばれるのがモヤシな訳ないだろ。
ISを動かすにも体力は必要不可欠らしいし。
いいか、代表候補生じゃない筈でも剣道の全国大会で優勝する程の
戦闘力なんだぞ。

代表候補生だつたら素手で白熊を撃破しても不思議じやない

「そ、そんなに凄いのかつ！？」

「ああ。ISを起動できただけの素人なんか『戦闘力…たつたの5
か…ゴミめ』なんて言われてコテンパンにされるのがオチだぞ」

「マジか？」

「大マジだ」

すると漸く現実を知つた一夏が青い顔になつていく。

無理はない。自分が決闘しようとしているのが、生身で白熊を倒
せるモンスターだと認識してしまつて恐怖しない人間はいないだろ

う。

「レナルド。何か勝つ為の秘策でもないか?
ほら。空軍での経験を活かして」

「ふうむ。けど作戦を練ろうにも相手の情報がないと…………」

「そりゃあ。白熊を倒す戦闘力たって空手で倒すのか関節技で倒す
のかくらいは知つておきたいからな」

（白熊はジョークのつもりだったんだが…………）

一人して頭を捻らせる。
だけど情報が足らない。せめて相手の得意分野でも分かれば。

次の日。

結局、コレといった名案が思いつかなかつたレナルドは。

「あー、そこのイギリス人」

相手から直接情報を聞き出す事にした。

金髪盾ロールのいかにもお貴族といった風貌の少女。セシリア・
オルコット。

「なんですか…………って貴方は、誰かと思えばつい最近まで醜く
争っていたアイスランド人じやありませんこと」

その瞬間。

あくまで平和的に情報を引き出すというレナルドの考えは消滅した。

「どうより情報を引き出すという事 자체を忘れた。

ちなみに言うとレナルドはイギリス人が嫌いである。祖国であるアイスランドと昔いざいざがあった事やその他多くの理由でイギリスが嫌いだった。

「伝統しか取り得の無いような年寄り国家の人間が良く抱える。イギリス人というのは礼儀を知らないようだ」

レナルドが嫌味を込めて言つ。するとセシリアもまたカチンとくる。

「あら、野蛮なアイスランド人に礼儀を教えるとは思いませんでしたわ。ですがご心配なく。私は貴方のような蛮人より遙かに淑女としての嗜みを心得ておりますので」

「淑女？ あんな糞不味い狗の餌のような食事しか作れない国の人間が淑女だとは。失敬。いつから狗が淑女と呼ばれるようになつたんだ？」

「死にたいのですか、蛮人？」

「死にたいのか、俗人」

二人の間に火花が飛び交う。

もはや休み時間の平和な雰囲気は欠片もなかつた。

「それで、私に何の用ですか？」

「单刀直入に言うと、お前の戦闘方法の詳細を吐け」

「断りますわ。例えゴキブリに教えても貴方に
だけ」は教えません」

「狭い女だ。

「これだから紅茶のような濁った湯水を美味しい美味しいと賛美するイギリス人は理解出来ない」

理解できなくて当然ですね。

貴方のよこな聖人風情に紅茶の良さが分かる訳かなしてしょ」と

紅茶など雅道。——「ヒー」こそ至高の存在だ。

גַּתְּ-בָּיִת ! ?

驚きましたわ。あんな泥水を至高というような低俗な人種がいるだなんて……」

再び一人の間に飛び交う火花。

そして二人はほぼ同時に。

「「決闘だつ（ですわ）！」」

教室中が震撼した。

その気迫に、その真剣さに。昨日、一夏とセシリヤが繰り広げた物とは比べ物にならない緊張感。当然だ。これは下らない喧嘩やプライドで発生したものではない。互いの魂の尊厳を掛けて争う類の真剣勝負だ。

「俺のゴーヒーとお前の紅茶。果たしてどちらが上か……」

「決着をつけ必要がありそうですね」

それで言つ事は済んだのかセシリアとレナルドは席に戻る。ただレナルドは席に戻る前、一夏に。

「安心しろ。例えお前が倒れたとしても、お前の仇は必ず俺のゴーヒーが討つ」

そう言つて席につくレナルド。

色々と奇妙な展開に置いていかれた一夏は思わず呟いた。

「なんですか」

FLIGHT 4 四人目 の 興味対象（後書き）

はい。セシリアとレナルド相性最悪でした。

天敵ですね、天敵。

なんか色々とセシリアヒロインフラグが消滅しましたw

どんなつまらない雑草でも花でも、懐かしい日記の一片となり得るのである。

つまらない一生というのは何だろう。友達が一杯いれば面白い一生？一人孤独ならばつまらない一生？普通に生きて普通に死ねばつまらない一生？浪漫に生きれば面白い一生？

下らない。つまらないか面白いかなど、個人の主觀で決めるべき事だ。つまり当人が面白いと感じているのならばそれは面白い人生なのだろう。

さてと。お忘れかもしねが俺の名前は織斑一夏だ。

ついこの前まで世界で唯一ISが使える”男”だった。けれど今は違う。もう一人の男が見付かったからだ。そいつの名はレナルド・レストランクール。何の因果か俺の首馴染みである。

レナルドは基本的には良い奴だ。

初めて出会ったのは小学生の頃。小学生っていうのは俺も含めて大抵馬鹿だ。ちょっと自分達と違うモノを見れば直ぐに悪口を言つし、かなり下らないことで怒つたり喧嘩したりする。

レナルドもまたその金髪碧眼のせいであざめられていや逆だ。苛めようとしていたガキ大将とその子分達を逆に苛め返してしまい、それを俺が止めたのが切欠となつて知り合つたのだ。

レナルドはなんでも父親から格闘術を叩き込まれていたらしく、かなり強かつた。ちょっと体が大きくて腕つ節の強いガキ大将なんか相手にならな「くら」。

しかしそれを止めた俺も筈の実家である篠ノ之道場で剣道だけじゃなくて古武術を叩き込まれていた身。やがて止める筈が喧嘩に発展し、その戦いは確か放課後の六時まで続いた。最終的には帰りのが遅いのを心配して、学校まで迎えに来てくれた千冬姉に、二人とも拳骨を貰つたんだつけ。

今思い出すと…………いや、今思い出しても痛かった。少なくともあれは小学生に喰らわす拳骨ではない。もし俺が鍛えてなかつたら氣絶していた。

とまあそんなこんなで千冬姉がレナルドを家に呼んで、それから心配して来てくれた筈も混じつて鍋を突つついで……気付いたら友達になつてたんだよな。

そんなレナルドなのだが現在。

「駄目だ！　このコーヒーではまだ完全とは言えない。もつと至高のコーヒーをブレンンドしなければ！」

そう。あらう事が部屋に籠つてずっとコーヒーをブレンンドしているのだ。

というか、そのせいで部屋の匂いが凄い事になつてゐる。

「おお。帰つたのか、一夏」

「…………ああ、それでこれ一体なんなんだ？」

それにしても来るべきクラス代表決定戦の為に、筈との剣道で汗

を流していた俺を、出迎えるのが「コーヒーのことば」。せめて出迎えるならスポーツドリンクにしてくれ。

「なんなんだって…………」「コーヒーに決まってるじゃないか。来るべき決闘でのハルマキ女を、地べた這い蹲らせてから泣いて謝罪させないといけないからな。ふふふふふ、漸く「コーヒー」こそ至上と詮明する時が来たようだな」

地べたは這い蹲らせるつて。

しかしあのセシリアとレナルドがここまで相性が悪かったとは。俺もあの何処か他人を見下したような態度に思わない事がない訳じゃない。だけどレナルドはそんなものの関係なく敵愾心を燃やしてゐるような気がする。

「どうしてそんなに怒ってるんだ？」

気になつたので聞いてみる。

するとレナルドは決意の籠つた視線で。

「怒つてるんじゃない。これは宿命の戦いだ」

「しゅ、宿命ー!？」

何時からそんな事に。

ただのドリンクバトルじゃなかつたのか。

「俺はあのハルマキを倒し、『コーヒーの美味さを証明する。これはもはや決闘ではなく戦争と云つていい』

「戦争つて……」

「勝たなければならぬ。

多くのコーヒー党の者達の為にも」

「そうか。まあ頑張つてくれ」

俺の方もそんなに余裕がある訳じゃない。

今日だつて篝にコテンパンにやられたし。ISだつて動かせたのは入試の時だけだ。

千冬姉はなんだか専用機をくれる、みたいな事を言ってたけれど肝心の専用機もまだ届いていない。

あれから一週間。

俺は後少しのところで負けてしまった。

言い訳するわけじゃないけど、本当に後少しだったのだ。

俺の専用機である白式の単一仕様能力

ISが操縦者

と最高状態の相性になつたときに自然発生する固有の特殊能力である零落白夜が発動したのはいいが、それでも時既に遅く、俺は敗北した。零落白夜の能力。それは自身のシールドエネルギーを消費して、相手のエネルギーを消滅させる力。しかしシールドエネルギーが既に危険域だつた白式は零落白夜のせいでエネルギー残量がゼロとなり敗北した。

せめて零落白夜の能力が良く分かっていれば…………いや、それでも負けていたか。あの時点でシールドエネルギーの残量も不味かつたし、零落白夜を使わなければ負けていた。

つまりどっちも蟻地獄だ。

零落白夜を使っていても負けたし、零落白夜を使わなくてもある

ままでは成す術もなく負けていた。まあ惜敗だとしても惨敗だったとしても負けは負けだ。

ただ何故かセシリ亞が俺にクラス代表を譲ってしまった事もあって、結局は俺が代表になってしまった。まあそのセシリ亞もあれから随分と態度が柔らかくなつたし……まあいいか。

そして今日。

運命の日が訪れる。

教室に対峙するレナルドとセシリ亞。

二人は互いに自信の魂が籠つた作品を手に持ち教壇に歩み寄る。審判は千冬姉。なんでも一人に頼まれたらしい。

妥当な選択だろう。コーヒーと紅茶の味が分かりそうで尚且つ正確なジャッジが出来そうなのは千冬姉くらいしかいない。

山田先生辺りだと例え味が分かつっていても「二人とも頑張ったので引き分け」とか言つちゃいそつだからなあ。俺も人の事言えないけど。

「では先ずオルコットの紅茶からだ」

「どうぞ、織斑先生」

にこやかにセシリ亞が言う。

でもあれ、顔が笑つていても目が全然笑つてない。

千冬姉がセシリ亞の紅茶を飲む。形の良い眉がピクリと動いた。

「どう、ですの?」

「上々だな。淹れ方も温度も完璧だ」
「当然ですね。このセシリア・オルコットの淹れる紅茶に、不味い文字はありませんわ！」

「ふむ。では次はレストランクールのほうを」

「どうぞ」

レナルドのコーヒーを飲む千冬姉。

セシリアの紅茶は飲んでいないが、レナルドのコーヒーは良く実験台に飲まされたので知っている。あれは美味しい。そこのいらの缶コーヒーが不味く思えるほど美味しい。そんなコーヒーを飲んで千冬姉は。

「これも上々だな。程よい苦味が良い味を醸し出している」

「当然です」

「どちらも自信満々のレナルド。」

「どちらも自分の勝利を疑っていないようだ。」

「では勝敗を

「

「二人が同時に息を呑む。そして、

「勝者は

なし。引き分けだ」

「 「 「 「 「 なつー。」 「 「 「 」

セシリ亞とレナルドだけじゃない。
クラス中全員が驚いた。
まさかあの千冬姉が、そんな甘い裁定を下すなんて。
やつなると当然怒り出すのが。

「納得できませんわつー。」

「俺もです！
どう考へても俺のウルトラロイヤルマウンテンMK - ? が紅茶如き
に劣つてゐるはずがあつませんー。」

「どうでもいいけど、レナルド。名前長すぎないか。ついでに格好
良くないぞ。」

大体MK - ? って。ロボットやヒューマンあるまい。

「口でも言つても納得しないだろ？」

「 「 朝たり前ですー。」 「

「 なつー。」 「 ほれ、飲んでみる。」

「 「 」 「 」

千冬姉はセシリ亞にレナルドの「コーヒー」を。
そしてレナルドにセシリ亞の紅茶の渡した。
だけど二人は動かない。まるで親の敵を見るかのように手に在る
モノを睨んでいる。

「まさか恐いのか？」

自分の作ったモノより相手にモノが美味しいといつ事実を知るのが」

「「飲みます」」

「一人は同時に互いの作品を飲んだ。
そしてみるみる内に顔が強張つていく。

「これは…………認めたくないが、美味しい」

「有り得ませんわ。私の最高の紅茶と同じレベルのコーヒーなどとは……」

「理解したか。

私が引き分けと言つたのは別にお前達の努力を鑑みて勝敗を着けなかつたのではない。

生憎と私は物事をはつきりと言つ口でな。努力したから引き分けなどと言うつもりはないさ。

ただ敢えて引き分けという結果を出したのは、単純にお前達一人の作品が完全に同レベルだったからに過ぎない」

「…………」「…………」「…………」

「では私はこれで失礼する。

これでも忙しい身なのでな。

それと、美味しかつたぞ。一人とも。今後も精進しろよ」

颯爽と去つていく千冬姉。それは弟である俺ですら惚れ惚れするほど格好良かつた。

女子の何人かが「きゃー、抱いてー！」と叫んでいるが、聞かなかつた事にしよう。
ちなみに当の一人は。

「次こそ、俺の究極的コーヒーでお前の紅茶を打ち破る」

「受け立ちはずわ。私の伝説的紅茶で貴方のコーヒーを叩き潰してあげますわ」

「お前が伝説なら俺は幻のコーヒーで戦う」

「なら私は世界一の紅茶を以て受け立ちはじめよう」

「では俺は宇宙一の

「でしたら私は全宇宙一の

まあ、なんだ。

ED学園は今日も平和だ。

「あ……ありのまま今起こつた事を話すぜ！」

『俺はIISの二次創作を書いてたら、いつの間にかグルメssになつていた』。

な……何を言つているのかわからねーと思つが、
俺も何をされたのかわからなかつた……

頭がどうにかなりそうだつた……ティータイムだとかBOSSだとか、
そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ……』

成功は必ずしも約束されていないが、成長は必ず約束されている。

どのような才能でも磨かなければ、それはダイヤとして輝けない。世間一般で天才と呼ばれている篠ノ之束にしても、彼女なりに努力はしている。

実質的に世界最強の存在である織斑千冬もそう。彼女が第一回モンド・グロッソで頂点となりえたのは彼女の才能があつたのもそうだが、彼女が誰よりも努力したという純然たる事実があるのだ。

レナルド・レストランクールの朝は早い。

起きて直ぐに眠気覚ましのコーヒーを飲んでから意識を覚醒させると、直ぐに外出用の服装に着替える。向かう先は第三アリーナ。やる事は決まっていた。

「ふう」

レナルド以外に誰もいないアリーナ。

好都合だ。レナルド・レストランクールという男は、基本的に他人に努力を見られるのを嫌う。特に女性には。男としての矜持もあるのだろう。それにアイスランドなどでは部下の手前、弱気になることは出来なかつた。

それに幾ら一人だけの男に多少お祭り騒ぎになつてるとはいえ、IS学園は基本的に実力が物を言つ。珍しくとも、その人気に感けていて努力を怠れば、最後には”弱者”のレッテルを貼られて見放されるだらう。

彼とて軍人やパイロットである前に一人の人間。女だらけとはいえ学園と言つコミコニティーから除外されるのは嫌だつた。

あの一夏もあれで結構努力をしている。学校に残つて山田先生の補修を受けるのはほぼ毎日だし、筹と剣道の鍛錬もしている。

努力というだけならば、クラスで一一を争うのではないだらうか。

けれどレナルド・レストランクールは、その一夏よりも努力をしなければならなかつた。

理由は単純である。

(……………いい)

右手の薬指にある、赤と黒の装飾が施された十字架の首飾り。それがレナルドの専用機が待機状態の時の姿であった。

その指輪を強く握り締め念じる。ISを、専用機を身に纏う為に。

(……………ええい、まだか!…)

再び強く握り締め念じる。

けれど一向に反応はない。そのまま時は過ぎ五分後。

漸くヒカリの粒子が形となりレナルドのISが展開した。

全体的な”黒”に間接部分やフレーム部分を深紅に染めたその姿は、まるで墮天使のような奇妙な神秘性と悪魔性の両方を感じさせる。

「今度は五分一十一秒。前回より五秒縮まつたけど、これじゃあな」

熟練したIIS操縦者は展開まで一秒と掛からない。
担任教師である織斑千冬はそう言つていた。

だといふのに自分が展開するのに必要としたのは五分。
熟練した操縦者の321倍の長さだ。ここまでくると笑えないを
通り越して笑えてくる。

「一夏はもつと早くやつてたからなあ」

自身の古い友人でもある織斑一夏は、当初こそ展開に戸惑つてい
たが、それでもレナルドよりは遙かに早く展開していた。

空軍のエースだつた事もありIISの基礎中の基礎は僅かに知つて
いたレナルドは、知識ならば一夏に勝つていたが、こと実技におい
ては劣つていた。それというのも

「駄目だこりや」

散々やつた結果。

このIISのメイン武装であるライフル一つ出すのに三分必要とし
た。

はつきり言つて駄目駄目である。最低でも0・07秒で出すよう
にと言われているのに、レナルドが必要としたのは三分。ぶつちや
け壊滅的だ。

「これじゃあ不味いよな」

戦闘機で例えるなら発射シークエンスの段階で戸惑つてる感じだ。
そしてレナルドだつたら、そんな人間に空は絶対に飛ばせない。

見知らぬ兵器に乗つて直ぐに乗りこなすなんていうのは、漫画やアニメのヒーローだけに許された特権だ。そしてその特権をレナルド・レステンクールは持つていない。

兵器にしろ自動車にしろ操るには練習に裏打ちされた技量と知識が必要であり、現在のレナルドには前者が全く足りていなかった。

「ふうん、見かけによらず努力家なんだねえ。レナルド・レステンクールくん」

「…」

飛び退く。

一体何者だ。全く気配に気付かなかつた

「お前は……」

「おはよっ」

後ろに立つっていたのは、リボンの色と服装からしてEHS学園の一年生だった。

扇子を持ち、どこか自分の上位である総帥に似た余裕を感じさせる女性。

正体が分かつた所で一安心じよつとして直ぐに警戒し直した。

「おたく、どなたですか？」

レナルドとてアイスランド軍の押しも押されぬヒースだ。嘗て力自慢の大男が絡んできた際に、地面の冷たさを再確認させてやった事もある。

そんな自分に全く気配を悟らせずに後ろに立つ。もしかしたらＩＳの能力かと疑うが、その女生徒がＩＳを使ったような様子はない。つまりこの女生徒はただ純粹な人間としての能力だけで、このレナルド・レステンクールの後ろをとつたのだ。そんなことが、幾らＩＳ学園とはいえ普通の一般生徒に出来る筈がないだろ？

「はじめまして、ね。私は更識楯無。
この学園の生徒会長よ」

「生徒会長、ですか」

成る程、言われてみれば確かに彼女には、猛者揃いのＩＳ学園の生徒達を束ねている貫禄のようなものがある。それに何時だつたか記録かなにかで見た事があるよつた気がする。

「やうだよ。レナルド・レステンクール少佐」

「…………隨分とお詳しいようだ」

「そつでもないよ。

第一君自身は良く認識していないみたいだけど、結構君つて有名人なんだよね。

当時若干16歳でありながら、東西戦争において21機の戦闘機を撃墜した空軍のエース。

軍事関係の雑誌なんかでも紹介されてるし、ルックスもいいし、極め付には世界で一人目のＩＳが操縦できる男性っていう看板もあるし

自分のコースが世界中に流れた、というのは知っていた。

だけどその事実を認識したのは始めてである。これが自分の知ら

ない誰かが自分の事を知っているという感覚なんだろ。

嫌悪なんて抱きはしないが、不思議な感じである。

「それで生徒会長閣下が、俺のような一生徒にどうのよつた御用ですか？」

誰にも見られたくなかつた訓練を見られた事で、レナルドの口調には多少の棘があつた。

けれど生徒会長、更識楯無はまつたく氣にした様子はなく。

「んー。最初は見てるだけのつもりだつたんだけ……。そうだ。これから私が君のHHSコーチをしてあげよつか？」

「はい？」

「知つてゐる？ HHS学園生徒会長といつのは、最強の称号なんだよ。絶対に後悔させない自信はあるけど、どう？」

「いいんですか！」

正直、願つてもない申し出だつた。

確かにレナルドとてこいつは密かに訓練しているのを誰にも見られたくない。

けれど「コーチないし教官といつ存在を否定して、自らの才能を信じて暴走するほどレナルドは馬鹿でも子供でもなかつた。

同級生で教えてくれそつたセシリアと篝が、コーチに向いていなのは一夏のお陰で分かつてゐるし、同級生に教えを講つといつのは、レナルドの中にある自尊心といつものが傷つく。

「その代わりと言つては何だけど、ちょっと生徒会の仕事手伝つて

ね

「それくらいこなうば」

「うう見えて書類作業は得意だ。
パイロットの仕事とは飛行機を飛ばすだけじゃないのだ。
しかも隊長になると相応の事務仕事もある。

「それじゃあ決定ね。レナルド・レストランクールくん。
素直な子はおねーさん好きだよ」

「レナルドでいいですよ、会長閣下」

「なら私も楯無と呼んで貰おうかな。たつちゃんでも良いけど」

「では楯無先輩と呼ばせて貰りますよ」

「の出合いが吉と出るか凶と出るかは分からぬ。
けれどこの生徒会長ならば、凶が出ても実力で吉としてしまつよう
うなパワーがある気がした。

「ああそれと」

「はい？」

「もう直ぐSHR。遅刻したら大変だよ。織斑先生は厳しいこと
で有名だからね」

「んなつー。」

時間を見る。

確かに不味い。後十数分もすればSHR開始。
そして遅刻したならば……………考えたくもない。

「失礼します、樋無先輩！」

兎に角急ごう。

レナルドはエスを待機状態に戻してから走って教室へと向かつた。

前に遅刻した時は、複雑な事情もあつたので反省文三枚で許された。
けれども次、もう一度遅刻したならば。

（仮の顔は三度まだが、ブリュンヒルデの顔は一度までだ。
奇跡的に一度は最小限の被害で済んだのに、それに二度目があれば
……）

銃殺刑。

不吉な単語が脳裏を掠める。

ちなみにブリュンヒルデといつのはモンド・グロッソ総合優勝者
に与えられる最強の称号だ。

そして織斑千冬は初代ブリュンヒルデである。

故にレナルドは走った。

幸いにして彼は長い軍隊生活の恩恵で、体力は人並み以上にある。
10kmほどの距離ならば鼻歌交じりに完走するだろう。それでも
も間に合つかどうか。

見えた」

あれこそが目指したゴール。

どうやらまだ担任は来ていない。ならば。

「 その情報、古いよ」

なんだか扉の向こう側から声が聞こえたような気がするが、そんなものはどうでもいい。

今分かっている現実。それは急いで教室に入らなければ遅刻するという一点のみだ。

だからこそ、レナルドは勢いよく教室の扉を開き、中へ突撃した。そこに何があるかも知らずに。

「一組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡七ぶげりつ

」

ぶつかる。レナルドと女生徒が。

どうやら扉の背を預けるように立つていたらしい女生徒は、猛烈な勢いで入ってきたレナルドに突き飛ばされ、そのまま吹っ飛ぶ。哀れ女生徒はそのまま壁に頭をぶつけ、動かなくなつた。

「

「

「

向けられる無数の視線。

セシリアが簞が、呆然とレナルドを凝視している。

「あれ、こいつ鈴じゃないか！」

クラス中が『今直ぐに保健室に連れて行くべき』といつ事を思い出したのは、一夏のＫＹな発言のお陰であった。

今回もなんだか後半の鈴でシリアルスが破壊されたような.....
ISは殺伐としてないので書いていて気分が楽です。修羅場はあります
そうですがw

義を見て為さざるは、勇無きなり。

この世の中、自分の信じる正義を実行できる人間がどれだけいるだろうか。

街で不良に囮まれている老人がいたとして、そして自分に不良と戦う力がなかつたとして、どれだけの人間が立ち向かえるだろう。戦う力があるのならばいい。その暴力で不良を退散させるなりすればよいのだから。けれど暴力がなければ……。

だからこそ人は軍事力という名の暴力を無くす事が出来ないのだろう。

一時間目の授業が終わり、保健室にはレナルド、セシリ亞、笄、そして一夏が集まっていた。ちなみに一夏だけは付き添いで一時間目が始まる前からいる。

ベッドで眠るのは、当然ながらレナルドが激突した東洋人だ。

「それで、こいつ誰だ？」

笄とセシリ亞が口を開かなかつたので、代表してレナルドが問うた。

「誰も何も…………あ、そつか。筈とレナルドは知らなかつたのか

一人だけ合点が言つたという風に頷く一夏。
当然、筈とレナルドには理解出来ない。

「一人で納得してないで、さつさと吐け。
ええと名前が凰鈴音つて事はジャパニーズじゃなくてチャイニーズ
だろう?」

何て純粹な日本人のお前が中国人と知り合いなんだよ。
中華のナンバストリートで、女でも漁つてたのか?」

「なつ、一夏!」

「見損ないましたわよ、一夏さん!」

「ちょっと待つた! 筈もセシリ亞もそんな目で俺を見るな。
そんな馬鹿みたいな事してねえよ。レナルドも変なこと言つなよ」

「ほんのジヨークじゃないか」

レナルドが肩をすくめる。

別にレナルドも本当に一夏が女漁りをするとなんて思つてはいな
い。そんな器用な事が出来ない奴だというのは良く知つている。

ただ何処の世界でも男だけの社会で生きると、このような発言
が稀に自然と出でてしまつくなるというだけ。他意はない。

「ま、まあそんな事だらうと思いましたわ。

この私とした事が、こんな野蛮人の言葉を鵜呑みにするなんて

「黙れハルマキ。お前は言葉じゃなくて料理でも鵜呑みにしろ。」

勿論イギリス特有の便所の糞にも劣る不味い料理をな

「下品ですね、これだから野蛮人は」

「俺が野蛮人ならば、その野蛮人より不味い料理しか作れないイギリス人は一体なんなんだ？」

「狗か？ 猿か？ 雉か？ キビ団子でも貰つて尻尾振つてろ」

「「…………」」

「待て二人とも！
セシリ亞、兎も角ISを展開するのは止める！ レナルドもお願ひだからナイフを仕舞え！
もし保健室で乱闘騒ぎなんでしたら千冬姉に殺されるぞ！」

「「…………ツ！」」

それは確かにヤバイ。

アリーナなら兎も角、保健室でやり合えば良くて停学。悪くて私^リ刑^{ンチ}だ。それにレナルドは決して短絡的な男ではない。自分と恐敵^{セシリ亞}との間にはIS操縦者として純然たる差が横たわっている。勝機があるとしたら一瞬。一秒以内に意識を刈り取るしかない。恐敵と自身との距離は2m。相手が一般人なら十分であるが、セシリ亞も押しも押されぬ代表候補生。熟練した兵士五人分の力量はあると考えたほうがいい。

（いやいや、少し落ち着こう）

ついつい如何にして目の前の敵を排除しようかに、思考がずれてしまった頭を元に戻す。一夏の言う通り保健室で戦うというのは、

ベッドで横たわる中国人や保健室の先生にも迷惑が掛かるし、なにより千冬が怒る。なので仕方無にナイフをしました。

セシリアもレナルドと同じように渋々であるが待機状態のエサから手を放した。

「まったく病室で事を構えようとはどういう神経をしているのだ」

「筆にまで怒られる。

しかし言つている事が正しいので反論できない。

「話を戻そう！ で、結局ここは何処の誰で、お前とはどういった間柄なんだ？」

仕切りなおすようにレナルドが言つ。

そうなると筆とセシリアの視線が再び一夏に向いた。

「誰も何も幼馴染だよ

「「幼馴染？」

「ほら筆が引つ越したのが小四の終わりで、レナルドはそのちょっと前だろ。

この鈴が転校してきたのは小五の頭だから…………一度入れ違いなんだよ。で、中一の頃に中国へ帰ったから会つのは一年ぶりだな」

「なんだ、そうだったのか……」

「そういえばイスランドに帰国して直ぐだったか。衆愚政治にまで墜ちた民主主義を打倒する為に共産主義者達がイスランド東側で蜂起したのは。

チャイムが鳴った。

これは予鈴。だから授業はこれから五分後に始まる。

「さて、そろそろ戻るべ。

一夏も。一時間目には戻るよつと先生も言つていたぞ」

「あ、ああ」

幸い鈴は精密検査の結果、ただ氣絶しているだけとのこと。
なんでも寝不足氣味だつたらしい。

IS学園には各国の重要人物であるIS操縦者が一箇所に集う場所があるので、名前は保健室でも実際には大学病院並みに設備がある。なのでこのよつな時は非常に便利だ。

「そつだな、戻るか」

一夏の一言で取り合えず皆教室に戻る事にした。

レナルドもそれに続く。謝罪は目が覚めてからにしよう。

「さてと、こゝだつたな」

素早く昼食を終わらせたレナルドは、やや早足で生徒会室へ向かっていた。

理由は単純。三時間目休み時間のおり、当の会長の本人から昼休みに生徒会室に来るよつ言われたからである。幸い学園の地図は用意済みだ。

やがて生徒会室の前に到着する。伊を決して中に入つた。

「失礼します」

思つたより広い。

流石はHS学園。いや、学園最強の本拠地といつべきか。レナルドを出迎えたのは、眼鏡をかけた如何にも仕事が出来そうな女生徒だつた。

「ようこそ、生徒会室へ。会長から話は聞いているわ。レナルド・

レストランクールくん。

飲み物は紅茶とコーヒーの

「コーヒーで！」

即答した。

「コンマ一秒の間もなく。

「そ、そ、う。じゃあ会長が帰つてくるまで待つていてね。そこの椅子にでも座つて。

直ぐにコーヒーを用意するから」

「ありがとうございます」

お礼を言つて椅子に座る。すると田の前に見知つた人物が一人。

「おひ、確かおたくは」

「あれ〜、れすてんだ〜。おはよー」

確か名前は布仏本音、クラスメイトだ。

此処にいるといつ事は彼女も生徒会役員なのだろう。かなり意外であるが。

それとどうでもいいが、今まで「レナ」やら「ドナルド」なんて言われてきたが「れすてん」と呼ばれるのは始めてだ。

「…………今は昼だぞ」

「へえ〜、じやあこらちわー」

「はあ」

相変わらずマイペースな人だ。
けど仮にも生徒会役員。もしかしたら途方もない戦闘力が秘めら
れているのかもしね。

「どういだ」

「パーヒーが置かれる。

「感謝します…………おお、これは」

空軍一の「パーヒー狂と畏怖されたレナルドを満足させる遊びの味。
どうやら」の眼鏡の女性はかなりのやり手のようだ。

「お氣に留ましたか？」

「ええ。どうぞのハルマキとは大違いです」

イギリス人は馬鹿の一つ覚えのように紅茶ばかり。

前回は引き分けという無念な結果に終わったが、次こそは「コーヒーこそ世界一ということを証明しなくてはならない」と、レナルドが再び再戦の意志を固めていたところだ。

「皆揃つたみたいね」

麗しの生徒会長の声がした。

「おかえりなさい、会長」

眼鏡の女性が挨拶した。

「うんうん。ああ、紹介するわ。
本音のほうは分かるわよね。同じクラスだし。
こっちが布仏虚。本音ちゃんの姉

「姉、ですか……」

そう言われば何処と無く顔の造形が似通っている気がする。
性格は似ても似つかないが。

「それで如何して俺を呼んだんです、先輩」

「如何してって、手伝いだよ手伝い。生徒会の仕事を一応これでも会長だからねー。仕事はしっかりとしないといけないし。

こいつやって毎休みに仕事を片付けちゃえば放課後も時間が沢山とれるでしょ」

「…………なんだか、すみません。俺の為に」

「いいんだよ。私が好きでやつてるんだから。
それに、隠れた努力家っていうのおねーさんは嫌いじゃないしね。
あ、でもおねーさんと言つても年は私と同じか」

「ええ、一応。

俺は中学すら満足に卒業していなかつたので」

東西戦争のおり人材不足に悩んだ軍は、遂に学徒出陣に踏み切つた。

といつても流石に最低限のモラルがあつたのか、形としては徴兵ではなく募兵。レナルドはそれに応募してパイロット短期育成コースへと編入されたのである。

卒業証書を受け取つたのは、短期集中コースでの宿舎のことだ。そして戦争が終結したのが丁度去年の五月。高校に入つうと思えば除隊して入れたが、軍での生活にも慣れてしまつたし、結局高校には行かず軍に残つたのだ。だからレナルドは本来なら高校一年生でありながら高校一年生なのである。つまり会長と同い年というとだ。

「そつか。なら別にタメでもいいよ」

「いえ、年は同じだけど学年は違いますから」

「わりと真面目だねー。それじゃあ仕事をさつさと済ませちゃおつか。
タイム・イズ・マネー、時は金なり。時間は有效地に使わないとね

か。

尤もなお言葉だ。
レナルドは息を吐いて、書類作業へと取り掛かった。

怠情は、おだやかな無力から生まれるものである。

無力というのは嫌だ。反攻する事も意見することもなく、その権利は無視されるから。

だが無力は罪だらうか。異端であるところは悪足りえるだらうか。そして弱者とは本当に、弱者なのだらうか。

全ての授業を消化し、誰もいない第三アリーナへとやつて来る。そこで待つっていたのは更識樅無。HS学園の最強にして生徒会長。

「申し訳ありません。待たせてしまって」

「いいよ。けど、なんだか恋人同士の待ち合わせみたいだね、レナルドくん」

「いやあ、そうだったらしいんですけどね」

曖昧に笑う。

確かにこの生徒会長はルックスこそトップクラスなのだが、どうにも腐れ縁のウサ耳とテンションが似通つてるので苦手だ。実力もウサ耳と同じで規格外。

（HS学園は広いな……）

流石は倍率一万倍。

生徒の質だつて他の学校なんて到底及ばない。

もし仮に自分が女だとして、そしてEIS学園を目標して努力したとしても、入学出来る確率は「ぐぐくく低いだろう。

「早速始めようか。手始めに初歩の初歩。
EISを起動させる事からだけど」

「……………はい」

レナルド・レステンクールの最初にして最大の壁。
それが起動時間の長さである。

これをどうにかしない限り、どれほどEISの操縦が熟練していくともレナルドは三流のままだ。

「実を語りつと、EISという例がない訳じやないんだよね」

「そりなんですかーーー？」

「そり。特に君のよう、EISじゃなくて通常兵器に熟練した人なんかは特にね」

「俺のよう……」

「なまじ普通の兵器に慣れ親しんでしまつた分、EISという全く新しい概念の兵器に対応出来なくなる、って言えば分かり易いかな」「戦闘機から戦車に乗り換えるようなものですか？」

「ちよつと違うかな。

戦車や戦闘機つていうのは当たり前過ぎる兵器。戦闘機と同時代のね。

けどEISは違う。

EISはただトリガーを引いただけじゃ弾丸は出でこない。しっかりとイメージ出来なければ、満足に起動をせる事すら不可能。従来の兵器とは何もかもが違う

「EISは違う。

パチンっと扇子を開く。

何故か扇子に描かれた文字は『浪漫』

そういうえば先程見た時の文字は『鍛錬』であつたが、何時の間に入れ替えたのだろうか。

「成る程……」

自分の中にある疑問が氷解していくような気がする。思えば、どうもEISをイメージするといつのが苦手だ。起動も銃も、全てが。

「そうだな。それじゃあレナルドくん

「はい」

「EISを体に纏う、じゃなくてEISに乗り込むようなイメージでやつてみてくれるかな?」

「乗り込む、か」

やつてみる。

EISを纏う、ではなく搭乗する。

従来の兵器と同じように

乗り込む。

「でき、た」

「五分どこのじゅない。」

掛かった時間は、ほんの、十秒。

「ほり。コツを掴めば簡単でしょ。
それと同じようにアサルトライフルもショルダーから出すようなイメージで」

「分かりました」

軍服を着ている自分をイメージして、そして銃を取り出す。

一瞬、粒子が周囲に舞う。

手にはアサルトライフルが握られていた。掛かった時間は七秒。

「これで起動はもういいね。コツを掴んだら後は数をこなすだけだから。

後は一人でも練習できるよ」

「ありがとうございます、先輩！」

深くお礼を言った。

それにも本當に教えるのが上手い。

算なんて長島式というのに。あのハルマキに到つては意味不明な事をほざくだけで全く意味が分からぬ。ハルマキの限界というとか。

「うーん、後は操縦なんだけど…………大丈夫？」

「それなら、なんとか」

最初に「H」を動かす事すら手間取ったが、自分の体の延長線上と思えば「H」にか動かせることが出来た。といつても”地面を動かす”だけ。

「大地を這いずり回る事は出来てもソラを飛ぶことは出来ない。

「うんうん その顔分かるよ。
自分は地面じゃなくて空を飛びたいからパイロットになつたんだつて」「うめだね」

「……………何で、それを？」

「ううん。別に大した推理じゃないよ。
ただレナルドくん。君つてよくぼお~っと空を眺めている事が多いしね。

空軍のパイロットになつたのも、そこいら辺が理由かなつと思つたのよ」

まつたく最強なのは力だけじゃなくて推理力もらしく。

文武両道とはこの人の事を言つのだらう。

「まあ大まかには。

けど陸軍や海軍じゃなくて空軍のパイロットにこだわつたのは、どうせ戦争行つて死ぬなら、地べたじやなくて、昔つから憧れてた空が良かつただけですよ。

何の因果か、いつして五体満足で生きてますけどね」

「駄目だよ、そんな言い方しちゃ。

生きてるだけでも儲け物と思わなきゃね

「

「そう、ですね」

言われてみればそうだ。

彼らIRSのせいで空が飛べなくなつたのが悔しくても、死んでいれば悔しがる事すら出来なかつたのだ。生きているだけでも自分は幸運だ。

会長が笑つてゐるのが、妙に神祕的だつた。

「ふう～～～～」

やはり体を動かした後にシャワーを浴びるのは良い。

一日の疲れが流れ落ちていくようだ。

結局、会長とあれから一時間みつちりと飛行訓練をした。最初こそ駄目駄目であったが、最後のほうは形だけは何とかなつていたと思つ。

「しかし本当に凄い人だつた……」

教え方も上手いといつより巧いのだ。

一つ一つが要点を射ているといつうか、言い表せないが更識楯無の教えは、すんなりとレナルドの頭に浸透していつた。まるでスポンジが水を吸収するようだ。

シャワーを止める。

体を拭いてGパンだけ履いて出た。

一夏にシャワーが空いたことを教えなれば。

レナルドは訓練の出来が上々だつた事もあり思いつきり扉を開い

た。

「つりこー！」

変な叫び、というより呻き声。

見ればドアの前に何時かの中国人が倒れていた。

理由は分からぬが、どうやらこの部屋から猛烈な勢いで走り去

ろうとした所、自分が扉を開いたせいで激突したらしい。

「あー、大丈夫か？」

「いっこう～」

幸い前と違ひ意識はあるようだ。

顔を抑えながら中国人の少女が立ち上がる。真っ赤な鼻血が生々
しい。

「アンタ！ 今日、私を後ろから突き飛ばしたつ！」

「……その折は、すまなかつた」

「いの、馬鹿ア！」

中国人のグーが迫る。

避けようと思つたが、今日の朝の事と今の出来事が思い出され。

(田には田を、歯に歯を……)

田を瞑り、そのパンチを受けた。

そのまま吹き飛ばされる四肢。流石は中国四千年の神秘。

素晴らしい威力のパンチだ。

「ふん！」

走り去っていく中国人。
それを床に倒れながら、呆然と見送る。
やばい。どうやらあのパンチの威力は強烈だつたようだ。もう意識が……。

「なあ、大丈夫か」

一夏が心配そうに声を掛けてくる。

「いや、これは駄目だ。

それにもしても一夏。お前の幼馴染というのは誰も彼も、途方もない戦闘力、を……」

そのままレナルドは意識を手放した。
だけど一つだけ学んだ。

一夏の幼馴染の性能は化物だ。

FLIGHT-8 会長からの 訓示（後書き）

この ss の不幸大賞は……鳳鈴音に、決定ですね。

鈴ファンの皆様、申し訳ありませんでした。

えー、変なテンションで執筆していたら変な話になりました。
はつかり煙こましゅう。色々と黒茶苦茶です。

恋が狂氣でないとしたら、そもそもそれは恋ではない。正直に言えば恋に狂つたことが一度もない。

ルックスは良かつたし、空軍のエースともなれば女にモテるから、そちらに苦労した事はなかつたが、長続きした事はなかつた。何時も中途半端に、終わる。一年以上続いた事がない。それは、愛に狂つたことが、一度もなかつたからだろう。

「それで、理由を説明してくれるよな」

「お、おつ」

強烈な一撃を貰つて氣絶してから数時間。漸く覚醒したレナルドは一夏に事情を聞いたとしていた。

「あの中国人がお前の幼馴染なら、この部屋にくる理由は分かる。一年ぶりくらいの再会なら誰でも懐かしくて会いたくなる、ああ、それはいいさ。

だけど何であんなに怒つてたんだ？」

「それなんだけど……………実は酢豚が」

「酢豚？」

酢豚と言つとあれだらう。
中華料理の酢豚だらう。確かに彼女もチャイニーズだが、一体何の関係があるのか。

「ああ、酢豚を奢ってくれるつて言うのを思い出したんだよ

「は？」

意味が分からぬ。

いや、そのままの意味として受け取るのであれば、さつきの中国人が一夏に酢豚を奢るといつて、それを一夏が思い出したら、中国人は怒つたということだが。

「それが前に鈴と『料理の腕が上がつたら毎日酢豚を奢ってくれる』つて約束したんだよ。だけど何故かそれを言つたら怒られて……」

「毎日、酢豚を？」

それは随分と太つ腹だな。胸は小さいの」「

「…………お願いだから、それ絶対に本人の前で言つなよ。
かなり気にしてるから」

それにしても、酢豚か。

最後に食べたのは何時だつたか。

けれど酢豚。酢豚といえば豚。豚といえばピック。つまりは

。

「酢豚の隠し味はレッドブルだな」

「その心は」

「飛べない豚はただの豚」

「つまい！ 座布団一枚！」

そんな馬鹿を言つてゐる場合でもない。
しかし酢豚か。 酢豚といえば。

「あとルームメイトに女が一人欲しいところだな」

「その心は」

「ブタもおだてりや木に登る んや おだてブタ」

「つまい！ 座布団一枚！」

男「一人じや駄目だ。

やつぱりドロ ジョがいないと。
しかし酢豚か。 酢豚といえば。

「マイホームでも購入するか」

「その心は」

「三回のブタ」

「うまい！ 座布団一枚！」

やつぱり家は藁でも木でもなくレンガの家だな。
けど最近ならコンクリートもありかも。
しかし酢豚か。酢豚といえば。

「マラカスを振りたいな」

「その心は」

「救いのマラカス。いどよブリブリざえもん。クラスはセイヴァー
……………ブタだけに」

「つまい！ 座布団一枚！」

「ブタがブッダってか」

それにしてもブッダか。
酢ブッダを奢ってくれる……………までよ。酢ブッダ?
そもそも仏陀とは一体誰だ?
インド人? HOTOKU?
つまり酢ブッダというのは仏にお酢をかける行為であり……………。

「俺は何を意味のわからない事を考へているんだ?」

「どうした?」

「なんでもない」

軽い自己嫌悪に陥る。

どうやら中国人のパンチのせいで脳味噌が混乱してこらしー。

「それで酢豚か……」

「何か分かったのか?」

「いやいやヒントが足りない。しかし何故酢豚なんだ? 確かに彼女は中国人だが、それと何か関係があるのか……」

「ああ、あいつの家つて中華料理屋だったんだよ。それで何度も食べに行つたつけな」

「！」

「そうか。」

「そういう事だつたのか。」

「謎は全て解けた」

一度言つてみたかつたセリフを言つ。
氣分はさながら江戸川コ ンくんだ。
蝶ネクタイと麻酔銃がないのが悔しい。

「毛利君。犯人は誰なのかね?」

「流石は一夏。」

「よく分かつてる。いや違う。」

「今の一夏は織斑一夏であつて織斑一夏ではない。」

「彼は……目暮警部だ! ちなみに本名は目 十三。」

「警部殿、実はそもそも間違いは最初からだつたのです」

「最初からあ？」

「そ、そ、そ、凰鈴音にショックを受けさせ、そして間接的にこの私の顔面を陥没させた犯人は。

貴方だ！」 田暮警部…………じゃなくて織斑一夏

「！」

「な、なんだつて…？」

「いいですか、ヒントは三つシ…」

「いやそれ口 ンじやなくて探偵 園〇だろ」

「細かい事を気にするな……………兎に角！ 問題となるのは三つ」

『幼馴染』

『中華料理屋の娘』

『常連客』

「これ等を一つ一つ整理していくば、皿並と正解は導き出せり」

「おおお…」

「一つ目のヒントである幼馴染。

これ自体に特に謎はない。

”織斑一夏は凰鈴音と幼馴染である” これは赤で宣言もれでこる

「今度はつみ こかよ…」

妙な事を口走る一夏を置いて話を進める。

ちなみに、あのラストはないと思つ。更に余談だが、” ”が赤で『 』が青だ。

分からない人はWIKIPIEDIAで。うねこのなく頃について検索すれば出てくるから。

「『織斑一夏の証言に嘘がある可能性がある』」

「な、何の証拠があつて……。

大体、そんな事を嘘ついてどうするんだよ

「そう返してきたか。 ”人間は物事を忘れる生き物” !
だから『一夏が凰鈴音との約束を正確に記憶していない』 という事
態が十分考えられる !

復唱要求 ! 【織斑一夏の記憶は正確であり、過去の約束を一言一句完全な形で記録している】

「くつ……復唱を拒否する……自分の記憶に自信がもてない」

「認めたな。つまり”織斑一夏の証言した約束は正確ではない”。
故に”織斑一夏と凰鈴音との間で約束の齟齬が発生している” !
『凰鈴音がその齟齬が原因で怒った可能性が高い』」

「そうか、それで !」

「驚くのはまだ早いぞ。

次は一つのヒント。

即ち”凰鈴音は中華料理屋の娘”と”一夏は常連客”
その一つを解き明かす。

では復唱要求 ! 「凰鈴音は一人娘である」

「そうだ。』『鈴は一人娘だ』
他に兄妹はない。俺の知る限りじゃ』

「それが聞きたかった。

先程の復唱要求そしてヘンペルのカラスにより、

『鳳鈴音を中華料理屋の店長後継者と仮定する』！

その仮定により『鳳鈴音が次期店長として厳しい特訓を受けていた』
という推理が成り立つ。

しかし”料理には味見する人間が必要だ”

店長や料理関係者は勿論だがお客様の生の感想、これも必要だ。

恐らく鳳鈴音は『織斑一夏に味見をさせるつもりだった』！

何故ならば”幼馴染”だから！

しかし”鳳鈴音は中学一年生の頃に転校してしまい会えなくなってしまった”！

だけど彼女は努力を続け『一年後の今日、遂に自他共に認める至高の酢豚を誕生させることに成功し、実際に店頭に並ぶレヴェルに達する』！

「まさか！」

「気付いたようだな。

ヒントは三つ。そして真実は一つ。

つまり鳳鈴音は……『一夏にお前の酢豚は無料が精々だ』と言わ
たと感じたんだ』

「奢るつていう事は無料だからな。^{タダ}

美味さが高さに比例する、なんて言つつもりはないけど……そうだ

つたのか

「直ぐに謝つて来い」

「ああ。お前の酢豚は”千円出す価値がある”って言えば許してくれるよな」

一夏は良い笑顔で部屋から出て行った。
これで全て解決だ。

「全然違つわよつー」

その推理が完全なる間違いだったと知つたのは、
クラス対抗戦が終わつた後だった。

次回はや シャルル陛下とラカニアを.....

男が妻に対して不実をおこなつたら、女は同情のまとになる。女が不貞を犯したら、男は嘲笑のまとになるだけだ。

俺の父は、俗に言う女つたらしだつた。愛人を自宅に連れ込むなんて朝飯前。しかも自分の息子の前で平然とラブシーンをするものだから始末に終えない。

本当に、父親としては最悪の男だった。

クラス対抗戦から数日。

なんだかんだで一夏も胸のない中国人と仲直りしたらしく、今ではちよくちよく自分と一夏の部屋に来るようになった。

その際に自分の格好（上半身裸にGパンだけの姿）を見て激怒されたりもしたが、まあそれはどうでもいい。

何故か中国人だけじゃなく筹やハルマキにまで文句を言われたが直す気はない。

その際に常識がどうのこうの、モラルがどうのこうと、と言つていたが失敬である。これでも世間一般でいう常識くらいは理解している。

自室という自らのテリトリーなら兎も角、廊下では上着をしつかり着る。

ジャパンの旅館というのは旅館内ならテリトリーらしく浴衣とか
いう動き難い服を着ているが、西洋のホテルは自室だけがテリトリー
なのだ。当然上半身裸や寝巻きでは歩き回らない。

それに寝る時は上半身裸にGパンか全裸！

これはこの十七年間の人生で身に着いた習慣である。

インド人がカレー食べるのと同じ、巨人ファンが阪神が優勝して
不機嫌になるのと同じ習慣だ。

これを変える事など絶対に出来ない。

さてIDS学園は今日も平和である。

遅刻した女生徒が織斑先生に怒られて何故か悶えている事や、一
夏が美少女一人とハルマキに囲まれたりしているが、概ね世界は平
和だ。

「れすてん、これで、もう逃げられないよ～」

「なんどつー！」

戦力差は絶望的だつた。

のほほんと笑うのほほんさん。

そして退路を全て封じられ逃げることが出来なくなつた状態。

全面には無数の兵士。背後には龍。

これは…………もう、無理だ。

「負けました」

「おお～、勝つたー」

「はあ～。まさかのほほんさんに負けるなんて……」

将棋盤を片付ける。

そろそろSHRが始まる時間だ。

リベンジは次の休み時間でいいだろう。

自分の席に戻り着席する。

もしSHRが始まっていても着席していなかつたならば、担任教師からの厳しい罰が待つてるのでこのクラスの生徒達は基本的に規則を守る。一部のM属性以外は。

山田先生が入ってきてSHRが始まる。

多少生徒にからかわれながらも織斑先生の援護射撃もあつて無難に進行していく。

そういう時も変わらない日常。それは、これからも続いていく。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも一一名です！」

「ほへ？」

失敬。普段の日常は今日崩れ去つたようだ。

しかし日常を有難がつてゐる時に新たな事件が訪れるとは。ここまでくると奇妙な意志を感じる。

だけど問題はそれだけじゃない。

何故なら転校生のうち一人が『男』だつたのだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから來ました。

「この国では不慣れな事も多いかと思いますが、監さん宜しくお願ひします」

「こやかに転校生の一人、シャルルが告げた。

しかし何故だらうか。シャルルという名前に聞き覚えがあるような気がする。いや歴史上の人物に『シャルル』という人物なんて腐るほどいるのだから当然といえば当然だが、もつと宇宙意志という根源というか、そういう根本的な意味で近い場所に『シャルル』という人物がいるような気がするのだが……。

（何故だ。シャルルと聞くと……チクワを、思い出す）

シャルルと名乗った少年を見る。

チクワはない。髪は濃い金髪。中世的な顔立ちで『おボク』の主人公を張れるくらいの逸材だ。美少女にも見間違えるその雰囲気は、嘗ての自分の部下を思い起こさせた。

そういうえば現在自分が隊長を勤めていた『ナイト小隊』はロンが隊長代理を務めているらしい。まあなんにせよ頑張れだ。

「きや……」

一人の女生徒がそうもうす。

レナルドはこれから起つる出来事を予測し、両手で耳をふさいだ。

『きやあああああああああああああああああつーー。』

爆音。

或いは台風とでもいづべきか。女子の歓声は瞬く間にクラス中に伝播する。

「男子！ 三人目の中の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守つてあげたくなる系の！」

騒がしい。

どうやら男だらけだらうと女だらけだらうと、性別が一緒の者が大勢集まれば騒がしくなるという鉄則に違ひはないようだ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生の鶴の一聲で騒がしかつた教室が静まつていいく。流石、としかいいようがない。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わつてませんから」

そこでクラス中の意識が、もう一人の転校生へと向けられる。男であるシャルル程ではないが、もう一人の転入生である彼女も一際人の目を引くような異端であった。

蛍光灯のヒカリに反射され輝くような銀髪のロングヘア。綺麗ではあつたが整えられている様子はなく、ただ切らなかつたら何時の間にか伸びていた、というようなイメージ。

極め付きは左目の眼帯。それもB級アクション映画に登場する大佐がしてそうな黒いソレだ。

成る程、彼女には自分と同種の職業、即ち軍人の臭いがする。

「…………」

当の本人は相変わらず口を開かない。

ただ腕を組んで、まるで見下すように生徒達を見るだけだ。

「…………挨拶をしり、ラウラ」

「はい、教官」

ラウラといいうらしい少女が、確かに尊敬の色を乗せて返答した。どうやら彼女も少なからず織斑千冬という伝説に憧れを抱いているらしい。

（まさか生糸のM属性、つていうようなオチは止めてくれよ）

レナルド・レストランクールは数年の軍隊生活のせいか、基本的に他人の性癖に関しては寛容だ。

友人の一人にはゲイの奴もいるし、熟女好きの奴もいるし、レズの女もいる。

だがさすがの彼も「お姉様、もつと罵つて～」とか蕩けた目で懇願する女生徒のことは理解し難かつた。といつか出来れば関わりたくない。

ゲイやレズはまあ理解出来る。彼等はただ自分と同性の者を愛してしまうというだけで、自分達と何の違いもない人間だと確信しているからだ。無論、自分は女が好きだが。

（けど幾らなんでもM属性つていうのはな……）

はつきり言つてひく。

理解出来ないし、理解したいとも思わない。

けれどレナルドは別段他人の性癖に口出しするほど野暮な男でもないので、結局は放置という方向に落ち着くのだが。

(もし「こつも回じタイプ」だったら、最悪だな)

最悪というよりは悪夢だ。

あの生真面目そうな顔で「私を奴隸にして下せー」だなんて千冬に言い出したならば、もう色んな意味で悪夢だ。即刻この小説はノクターンしなければならなくなるだろう。

だけど幸か不幸か、ラウラという少女にはその趣味はなかつたようだ。

「こーではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、こーではお前も一般生徒だ。

私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

もう一度注意深く聞くが、その声色に『尊敬』はあっても『情欲』はない。

つまりラウラという少女は、少なくとも織斑千冬に恋心は抱いていないという事。

取り敢えずは一安心だ。

ラウラという少女は伸ばした手を体の真横につけ、足を踵で合わせて背筋を伸ばしている。

やはり軍人だ。間違いない。

「ラウラ・ボーテヴィッヒだ」

「.....」

沈黙。クラスメイトは続く答えを気にしているが、ラウラが次を

言つ気配はない。

それにしても『ラウラ・ボー・テ・ヴィッヒ』。

どこかで聞いた事がある。確かあれは軍事関係の雑誌で……。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が悲しそうな顔になる。しかし当のラウラは気にした様子もなく、つかつかと歩いていく。目指しているのは一夏の席。

「貴様が　　」

レナルドは見た。

少女の手の平が一夏に迫るのを。そして、パシンッ、そんな音。織斑一夏はラウラ・ボー・テ・ヴィッヒに殴られたのだ。

「いきなり何しやがるー。」

必然。一夏が怒つて立ち上がる。

それはそうだ。幾ら相手が美少女だろうとオカマだろうと突然殴られて怒らない人間なんて、それこそ属性の変態くらいだろう。

「ふん……」

対するラウラは一夏の言葉を意に返さうともせず、すたすたと去っていく。

その様は実に冷たい水のようだ……まで。冷たい水？

「そうだ、思い出した！」

黒ウサギ隊のラウラ・ボーデヴィイッヒ少佐だ！」
ショヴァルツェア・ハーゼ

何故こんな事を忘れていたのだろう。

ラウラ・ボーデヴィイッヒといえば、ドイツにある十機のF19のうち三機を保有している独軍最強部隊の隊長の名前だ。顔こそ知らないが、その名前は雑誌で何度も見た事がある。

と、気付けばクラス中の視線が自分に集中していた。

それもそうか。なにせ突然大声でラウラという転人生の情報を喋ったのだ。注目を浴びるなというほうが無理がある。

そして当のラウラは何故か驚愕したような顔つきでこちらに歩み寄ってきて、レナルドの前に来るとピタリと止まった。

「すまない。貴官はレナルド・レストランクール大尉で相違ないか？」

「あ、ああ。今は少佐だけだ」

「どうしてそれを？」

その言葉はラウラが次にとつた行動で吹っ飛んだ。

「サインを、くれ」

「はい？」

どうやら自分の学園ライフは平穏を失つたようだ。
思えばこの時からだらう。

レナルド・レストランクールが部外者から当事者へと変化していくのは。

だけどまだ彼は、まだそんな変化に気付きもしていなかつた。

今田のNGシーン

「ええとですね、今田はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「ほへ？」

失敬。普段の日常は今日崩れ去ったようだ。
しかし日常を有難がつてゐる時に新たな事件が訪れるとは。
ここまでくると奇妙な意志を感じる。

だけど問題はそれだけじゃない。

何故なら轉機生の二ノガ
是が力のかかり

妙なBGMが流れてくる。

これは……国歌？

山田先生を押しのけた『男』は威風堂々と、あの織斑千冬すら霞んでしまうような、世界を支配するが如き威厳をもって教壇に立つた。

「わしが神聖ブリタニア帝国第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアである！」

『…………』

言葉が、出ない。

というより色々と無茶苦茶だ。

確かに名前は『シャルル』だろうが、色々と出る作品を間違っている。

「学生は！ 平等ではない……。

生まれつき成績の悪い者、スポーツ万能な者、オタクな者、変態性欲を持つ者、

点数も性癖も才能も、学生は皆、違つておるのだ。

そう、学生は、差別されるためにある！

だからこそ学生は争い、競い合い、そこに新たなリア充うが生まれる。

リア充は！ 悪ではない……。リア充の定義を決め付けることこそが悪なのだ！

萌えを平等にしたEJはどうだ。全員がメイドインヘンをしておるう。

彼女を重視した中華連邦は……。高校生のお母さんばかりい。

だが、我がブリタニアはそうではない。争い競い、常に学級崩壊を続けておるう。

ブリタニアだけが前へ！ 破滅へと進んでいるのだ。

我が息子シュナナイゼルの非行も、ブリタニアが学級崩壊を、続けているという証。

闘うのだ！ 競い奪い獲得し支配する。その果てに、新たなリア充がある！！

オール・ハイル・ハイスクール！！！！

そしてもう一人の転校生は……。

さて、これは夢だ。

寝よ、寝るしかなし。

目の前にいるチクワ皇帝とナチス軍人はなにかの幻覚だ。
そうだ。そつ思ひしかなー。

「オール・ハイル・ハイスクールツ！」

もう嫌だ。

早く退学届けを提出しよう。

FLIGHT 10 転人生 二人（後書き）

えー、なんかラストに皇帝が御入来されましたが……本編とは関係ないです。たぶん。

FLIGHT11 無自覚な対応

老人に忠告するのは、死人に投薬するようなものだ。よく年寄りは頭が固く考えを変えないというが、それは違うと考えている。

老人は考えを変えないのではない。変える事が出来ないのだ。六十年、七十年、八十年と生きてきた老人にとつて自分の考えというのは一つのアイデンティティだ。それを変えるというのは、今までの自分の人生を否定する事に他ならない。

今日何度もになるか分からぬ沈黙。

そう今クラスは静まっていた。

恐らく、転校生の全く以て予想外な言葉に。

「失敬。サインって…………何で？」

少なくとも自分はTV画面の向こう側で活躍する芸能人ではない。なので赤の他人、それもドイツ人にサインを強請られる様な事をした覚えはないが。

「貴官の高名は聞き及んでいます！」

若干十六歳でありながら21機の戦闘機を撃墜したエース、とお会いできて光栄です、少佐！」

(そういういえば会長が意外と有名みたいな事を言つてたつけな。
成る程、民間人じゃなくて軍事関係者にはちょっと知られている訳
か)

「まあ、どうも」

取り合えず礼を言つておく。

それにこりやつて誉められて悪い気分はしない。

特に最近、女には戦闘機なんて過去の兵器と見られてエースつて
いう看板も下に見られていたから尚い。しかもこの女性はただの
女性ではなく世界屈指のエリートであるIIS学園の生徒だ。そんな
スーパー・エリートに尊敬されているだなんて空軍のパイロットとし
て鼻が高い。

「けどサインって何処に書くんだ?」

「あつ……色紙を入手して出直してきます」

「そこまで畏まるなよ。IISでは同級生だし、階級だつて同じ少佐
だつたらつ」

「しかし……」

「ですよね、織斑先生?」

「レストランクールの言つ通りだな。

外では兎も角、このIIS学園では代表候補生だつと落第生だつ
と等しく生徒である事に変わりがない。敬語は不要だ」

「了解しました、教官。

そしてレストランクールしょ…………いや、レナルド。これからも宜しく頼む。サインのことも」

「分かつてゐるよ」

そう言つてラウラは、一度こちらに敬礼した後に着席する。

本当に素晴らしい対応だ。どこぞのハルマキとは大違いである。決めた。自分が将来アイスランド軍の重鎮やら政治家になつた暁には、ドイツ軍と同盟を結ぼう。

それがいい。そしてイギリスを火の海にしてやる。紅茶なんて廃止だ。この世から消し去ってくれる。

「紅茶と言つ存在が間違つてゐる。

珈琲こそが至上にして最高峰。最強にして無敵。

そうこの世全ての原典とは珈琲也。

故に全てのルーツ、いや宇宙意識の根源こそ珈琲という一大文化を基礎として生誕したといつても不思議ではなく「コーヒー即ちテスティ二ー。

珈琲とは脳を活性化されることにより、人という哺乳類に新たな新境地を到来させることも不可能ではない。つまり珈琲の珈琲による珈琲のための社会。神聖珈琲帝国を建国し、その首都をアイスランドのレイキヤビクに制定。そして全世界を珈琲へとして、更なる珈琲の超化学及び超能力の発現。いやいや珈琲の魔術。学園都市ならぬ珈琲都市。レベル5。一方通行……コーヒー変換、ビリビリ、帝督、ダース・ベイダー、青髪ピアス、幻想殺し、オール・ハイル・麦のん。麦のんこそ至上。麦のんとコーヒー。つまりはヤンデレ。ツンデレ、クーデレ、ヤンデレ。そして最終的な目標は最強を超えた無敵の珈琲。レベル6。未知なる根源。全世界、いやプロトカルチャーの遺産。珈琲・おぼえていますか…………

「織斑先生えー。なんかレナルドくんが根源の渦に到達しちゃつてます」

「気にするな。おい織斑とデュノア。コイツを男子更衣室に連れて行け」

「それにしても、一夏。

お前とこうして離れ離れになる時が来るとはな……」

「それ、聞く人が聞けば物凄い勘違いされそうだぞ」

今レナルドは一通りの荷物を纏め終わり、寮の自室から出て行こうとしていた。

無論、家出といつ訳でも一夏と喧嘩をした訳でもない。

「ごめんね。僕のせいで……」

そう理由は転入生であるシャルル・デュノアだ。

寮の部屋は丁度偶数。即ちピッタリ。二人部屋を一人で使用している生徒はいない。

だから通常ならば一人の転入生がいた場合、100%の確率で二人は同室となるのだが、今回は通常とは違う。なにせシャルル・デュノアは男。

つまり本来ならば一夏やレナルドと同室なのが望ましいのであるが、生憎と三人部屋なんていうのは寮にはない。故に都合一人が女子 即ちもう一人の転校生であるラウラ と相部屋 という事態が発生してしまうのだ。

となると問題となつてくるのは、誰をラウラ・ボーデヴィッヒと同室にするかだ。

一夏は論外。転入早々からラウラといやいじれを起こしている時点で不味い。あの敵意と彼女が軍人という事から、最悪の場合として一夏が再起不能になる可能性もある。

シャルルは、一夏よりはマシであるが彼は比較的大人しい性格であるし、常時臨戦態勢のラウラと同室になつたら……。と主にクラスの女生徒達が叫んでた。

そして最後に残つたのがレナルド。

レナルドは一夏と違ひ敵意を抱かれておらず、寧ろ好感をもたれており、しかも国こそ違つが同じ軍人同士だ。なにかと適任だらうという織斑千冬直々の「ご指名」で。

「一夏なつたわけか」

「どうしたの？」

「なんでもないさ」

それにしてこの部屋とも今日でお別れか。
いや直ぐに別の部屋が用意されるとは思ひけど。
流石に男子と女子相部屋なんて一時的なものだらう。

「さて一夏、餞別だ。

これを俺だと思って大切にしてくれ。ミミミ」

「おひ…………つてこれエロ本じゃないかっ！」

「思春期の男子にとつて掛け替えのないパートナーだ。あ、ちなみにお前の好みに合わせて教師物と姉弟物の二つを用意した」

「知るかよ！ 大体この口本をどうやってお前と思つんだよ！」

「えと、もしかして趣味が合わなかつたか。
仕方ない。じゃあこの『緊縛調教 墜ちた美人教師』というDVDを」

「お前の目から見て俺は一体どんな人間なんだ？」

「ええと……シスコン？」

「その情報は知りたくは無かつた」

「じゃあこのストロ物で……」

「ハードになり過ぎだ！ お前はこの小説をノクターン送りにしたいのかつ！」

「いいじゃないか。ノクターン。

ノクターンにして二人でIIS学園を制覇しようぜ。性的な意味で」

「一人でやつてる！」

「三人寄れば文殊の知恵というだろうに。

なあシャルル。お前も男として一緒にノクターンしようぜ」

「…………」

レナルドが問いかける。

しかしシャルルは何故か石の様に固まっている。

一体どうしたのだろうか。

「おーい、シャルル。生きてるか。欲求不満なのか?」

「はつ！ ち、違うよ！」

「まあまあ思春期万歳。ほらお前には俺が極秘裏に入手してきた秘蔵流出物を……」

「要らないよ、そんなの！」

「大体、そういうのは…………その…………十八歳になつてからで…………」

「生真面目だなシャルル。

お前のような奴を見ると…………ダークサイドに墮としたくなる

「ひーー！」

「おいレナルド。シャルルが困つてゐるじゃないか」

「一夏。まさかお前…………。

「どうか。大丈夫、俺の友達にもお前と同じ性癖の奴はいた。ゲイは病気なんかじゃない。一つの、個性だもんな」

「知るかア

「！」

何故か猛烈な勢いで一夏に部屋から追い出された。しかしシャルルか。あれが男の娘というのだろう。

創作の世界にしかいないと思ったが、実在していたとは。

「ええと、新しい部屋は……」「いか

扉を開く。

内装は殆ど元の部屋と変わらなかつた。
しかし当然ながら。

「ラウラ。なんで服を着てないんだ?」

「私は寝る時は何時もこいつだが?」

「…………… そつか

ならば仕方ない。

習慣とは人其々だ。その習慣を否定するといつ事は、その人物を否定してしまう事でもある。

なにより眼福であるし、問題ないだろう。

「寝るか

その日の夜。

何故かチクワ皇帝と黒髪のモヤシが喧嘩している夢を見た。

ええと、レナルドがシャルにセクハラしたりラウラの裸を黙認したりした今回。

なんだか『』に到達していたような気もしますが、まあ大丈夫でしょう。

禁書いいですよね禁書、超電磁砲も。

とある騎士の肉体言語、なんて小説も面白いかもw

能力者や魔術師を、純粹たる肉体言語のみで擊破していくというハートフルストーリー。

さてそんな馬鹿話は置いといて、次回もまた見て下さい。では！

アイデアの秘訣は執念である。

嘗て人々から無謀だ、馬鹿だと後ろ指を指された発明家達がいた。彼等は等しく不屈の執念でアイデアを生み出していき、やがて人は空へ羽ばたけるまでになった。

しかし彼らに”執念”がなかつたのならば、人は何時まで経つても地面を這い蹲つていただろう。

思い起こせば、今までの人生の中で、あの時ほど惨めで真つ暗だった事はないだろう。

遺伝子強化試験体として、生まれる前から戦いを義務付けられた私は、自画自賛ではなく、一つの事実として”優秀”だった。

体力、ゲリラ戦、戦術、戦略、戦車、戦闘機、狙撃。

ありとあらゆる成績において最高の成績を叩き出していた頃の私は、深い満足感に浸っていた。

私にとって戦う事は全てだ。生きる理由といつてもいい。このまま私は最高の軍人として、最高の戦士として生きていくのだ。

そう、何の迷いも無く思っていた。

それが変わったのが、あの時。

白騎士事件。

初めて大々的にインフィニット・ストラトス、通称ISが大々的に脚光を浴びた事件。

その日から世界は変わった。

一つの例外を除いて、各地の戦乱は一先ず矛を收め、次々にISの研究に乗り出していったのである。

それも当然か。

私はただ戦う事だけではなく、戦術や戦略についても叩き込まれている。

だからこそISという兵器が如何に凄まじいかが良く分かった。

女性にしか扱えない、という唯一の欠点を除けばISは無敵の兵器だ。

現存する他の兵器を圧倒する機動力、防御力、火力、そして戦う場所を選ばない汎用性。

それだけじゃない。なによりISは小回りが利く。

恐ろしい事だが非常にデリケートで膨大な計画と時間を必要とする作戦でも、IS一つあれば簡単にそれが可能となるのである。

強さだけじゃない。

確固たる理屈があつて、ISは最強の兵器だつた。

だから、幸い女性であつた私にも、ISの技能を磨くよびに指令がくるのは当然といった。

それが私の転機。

今まで最高の成績を叩き出していた私は、ISとの適合性向上のために行われたヴォーダン・オージェが何故か不適合で片目が金色

に変色。ISが上手く扱えず、軍からは欠陥品の烙印を押されるようになつた。絶望。当時の私には絶望しかなかつた。

私は戦うために生まれた！ なのに戦えなくなれば、私はどうやって生きればいい。

だけど、そんな精神状態だつたからだろうか。

ある日見つけた雑誌は、私を酷く複雑な感情にした。

『アイスランド空軍の若きエース。レナルド・レステンクール中尉』

雑誌では金髪碧眼の、まだ少年といつていよい年頃のパイロットが敬礼をしていた。

そう、ISの登場で世界中の戦争はストップしたが、一国だけ戦争を続けていた国家があつたのだ。それがアイスランド。

レナルド・レステンクールという男はなんと十五歳。私と一つしか変わらなかつた。

素直に尊敬した。私とそう変わらない年頃でありながら、立派に戦士として、エースとして活躍する彼に。同時に嫉妬する。ISではなく戦闘機や戦車が戦力の主であるアイスランドの戦争そのものに。そこでなら私は優秀な戦士でいられたのに、と。

ただ今となつてはそんな嫉妬はない。

その後に私にISの技術を叩き込んでくれた織斑教官に出会つた事もあるし、再び部隊内でトップの実力になつたこともある。

今の私にあるのは敬意だ。先駆者としての尊敬。

彼と同じクラスでよかつた。

私の配属されたクラスときたら、どいつもこいつも腑抜けばかり。

認められるのは教官と、同じ軍人であるレストランクール少佐……
ではなくレナルドだけだ。

そして織斑一夏。

奴だけは許せない。

弱く愚かで、教官の栄光に泥を塗つた愚弟。

第一回モンド・グロッソ。誰もが教官の一連霸を信じて疑わなかつた決勝戦。

あの男が誘拐などされなければ、教官は絶対に一連霸という偉業を成し遂げていたのだ。

だから教官がなんと云うと、必ず奴を、この手で

。

暗い。

驚いた。世界と言つのは、こんなにも絶対零度だったのか。

一寸先、いや一キロ先もまた闇なのではないだろうか。だとしたらこの永遠の暗闇から、どう抜け出せばいい良いのだろう。

必死になつて、歩いた。

一步。

一步。

三歩。

四歩。

五歩。

六歩。

七歩。

八歩。
九歩。
十歩。

どれだけ歩いただろつか。
先が見えない。

嫌だ。もうこんな場所は…………嫌なんだ。

走った。ひたすら前へ走った。
此処にいやいけない。いたら呑まれる。
だから走る。全身が悲鳴をあげても走った。無心に。

光。

あそこに光がある！
もう直ぐそこ。手を伸ばす。
掴んだ。溢れ出す光は祝福のよう。
やがて視界が開け。

「んつ…………朝か」

知っている天井……じゃなくて天井だ。
がばっと起き上がる。起きたばかりだといつのに妙にスッキリし
ている。

時刻を見ると朝の七時。

「しまった。これじゃ朝練は無理だな」

仕方ないのでジャージに着替えた。

朝練が出来なくともランニングくらいする時間はある。

未だにスヤスヤと寝て居るリウラを起しきなこよつて廊下に出る。

「あれ、レナルド。早いね、どうしたの？」

「この声はシャルルか。

「ああ、ちょっとランニングに。
どうだ、お前も、一緒に……」「…」

そこにはいたのはシャルルではなかった。
それどころか高校生ですらなかった。
男だ。それもチクワのような髪のおっさん。

「な、なな……」

「ランニング？ それは結構。

弱者に用はない。それが、我がクラスメイトといつものだ。
励むのだ。奪い獲得し支配する。その果てに授業があるッ！
オール・ハイル・ブリタニアアアアアアアアア…！」

「

言葉が出ない。

一体何がどうなっている。

さつきまでは確かにシャルルの声だった。

なのに今の声はあるで……まるでホル・ースのようである。

(あれ……シャルルって元からこういつ奴だったっけ？)

記憶が激しく混乱している。

思い起にせば、転入して来た時もこいつだつたよ^{うな}……。

「」と朝つぱらから何をやつてこる。朝から騒いでは迷惑だろ^うつ

「ああ、簾。実はシャルル、…………うがアー?」

そこにいたのは、黒髪を束ねた如何にも大和撫子な美少女である簾ノ之簾ではなかつた。

淡い紫色の着物。そして全身に巻かれた包帯。両田の有る所から僅かに見える素肌は焼けどで爛れでいる。

「ああー、どうした? 人斬りでも見たよ^{うな}顔をして。
だとしたら…………まあ正解だけどな」

いや、何でよりによつて志雄? もはや声優どころか刀を使う所しか共通してないだろ、といつかお前は男じやなくて女だろ^う、
といつ突つ込みしたいのは山々なのだが、この男の雰囲気が突つ込みを許してくれなかつた。

「あのー、貴方は……誰?」

「簾ノ之簾だ」

(嘘付け!-!)

しかしこの包帯男に嘘をついた様子は微塵もない。
それに、なんだか前から簾はこんな奴だつたようが気が^うつ。

「」んな所で何をしているんだ、シャルル?」

ハルマキの声が聞こえてきた。

ああ、今度こそ間違いない。」の声は絶対に。

「え！」

「なんだ、そんな死んだ魚のような目をして。通行の邪魔だ。どけ」

声は……同じだ。

しかし顔が違う。緑髪に黄色い目をした少女。額には不死鳥が羽ばたくようなマーク。

「W y o a r e y o u?」

つい日本語を使う事すら忘れてしまう。だが相手は一応英国人？ 英語が分からぬ訳はなかつたようだ。

「突然なんだ。私の名はC . C .

もういいな。私は一刻も早くピッタを食すという崇高にして絶対の天命があるんだ。

お前に使つている時間などない」

何が一体、どうなつて……。

確かにIS学園の男子は三人だけだつた筈じゃ。

気付けば廊下には人が溢れていた。しかも、誰も彼もが何処かで見たような人物ばかり。

しかも全員が…………危険度Sの極悪人揃い。

「諸君 私は戦争が好きだ

諸君 私は戦争が好きだ

諸君 私は戦争が大好きだ
殲滅戦が好きだ

電撃戦が好きだ
打撃戦が好きだ
防衛戦が好きだ
包囲戦が好きだ
突破戦が好きだ
退却戦が好きだ
掃討戦が好きだ
撤退戦が好きだ

平原で 街道で
塹壕で 草原で
凍土で 砂漠で
海上で 空中で
泥中で 濡原で

この地上で行われるありとあらゆる戦争行動が大好きだ

戦列をならべた砲兵の一斉発射が轟音と共に敵陣を吹き飛ばすのが好きだ

空中高く放り上げられた敵兵が効力射でばらばらになつた時など心がおどる

戦車兵の操るティーゲルの88mmが敵戦車を撃破するのが好きだ
悲鳴を上げて燃えさかる戦車から飛び出してきた敵兵をMGでなぎ倒した時など胸がすくよつな気持ちだった

銃剣先をそろえた歩兵の横隊が敵の戦列を蹂躪するのが好きだ
恐慌状態の新兵が既に息絶えた敵兵を何度も何度も刺突している様

など感動すら覚える

敗北主義の逃亡兵達を街灯上に吊るし上げていく様などはもうたまらない

泣き叫ぶ捕虜達が私の振り下ろした手の平とともに金切り声を上げるシコマイザーにばたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

哀れな抵抗者達が雑多な小火器で健気にも立ち上がってきたのを80cm列車砲の4.8t榴爆弾が都市区画(?)と木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

露助の機甲師団に滅茶苦茶にされるのが好きだ
必死に守るはずだった村々が蹂躪され女子供が犯され殺されていく様はとてもとても悲しいものだ

英米の物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ
英米攻撃機に追いまわされ害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君 私は戦争を地獄の様な戦争を望んでいる

諸君 私に付き従う大隊戦友諸君

君達は一体何を望んでいる?

更なる戦争を望むか?

情け容赦のない糞の様な戦争を望むか?

鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す嵐の様な闘争を望むか

?

「撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ!」

「てめえのものさしで語るんじゃねよ。

所詮この世は弱肉強食。強ければ生き弱ければ死ぬ

「ひひ、そのチヒリー食べないのか？ガツつくようだがぼくの好物なんだ…くれないか？レロレロレロ」

「花京院。空氣読め」

「またつまらぬ物を斬つてしまつた」

「弱者に用はない。それが高校生といつものだ」

「あ～やだやだ、文化を知らない奴は」

「超時空シンデレラ！ ランカちゃんです！」

「ザ・ワールド！ 時は止まる…」

「バイツア・ダスト！ 時は元通りになる…」

「キング・クリムゾン！ 時は消し飛ぶ！」

「メイド・イン・ヘヴン！ 時は加速する…」

「まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す……時間ツ…」

「どうなつてる？」

「これは一体、カオスだ。カオスの権化だ。世界は、IS学園は何処に行つた。

筈は？ ハルマキは？ 胸無中国人は？ 一夏は？ シャルルは

ラウラは？

俺の、俺の世界は何処に行つた！

跳ね上がる。

知つてゐる天井……じゃなくて天井だ。

此処は引っ越ししたばかりの、自室。

よかつた。夢だったのか……。

「どうしたんだ？」

ラウラの声が聞こえてきた。

振り向こうとして、躊躇する。

今話しかけてきたのは本当にラウラなのか。
もしかしたら、ナチス軍人かも……。

有り得そうで、恐い。

ゆっくりと振り向く。すると、そこには

。

「どうした？ 私の顔になにか着いているか？」

良かつた。

ラウラはラウラのままだった。

嗚呼、俺は満足だ。

「まことに軍人冥利に助かる夢だった……。

やれやれ、最悪な夢過ぎて一度寝の端にありながら語るべき言葉がない

FLIGHT 12 悪夢 ナイトメア（後編）

「こんな学校にだけは転校したくありませんねー。」

さて漸く次回からはシリアスになつていけるかなあ、と渺々と今日この頃。

我々の人生の前半は親によつて、後半は子供によつて台無しにされる。

時々考える事がある。もし親がいなかつたならば、どうなつていたか。

幾ら嫌つていようと親は親。そして子供といつのは”親”から色々な事を学ぶものだ。

ではその”親”がいなければ…………今とは全く別の人間になつていたのかもしぬ。

IS学園での授業が、比較的穏やかなものになつたのはつい最近の事であつた。

当初こそ予備知識ゼロの状態で放り込まれたせいもあつて、授業に全く着いて行けず、いつ先生に指名されないかビクビクしていたが、山田先生の放課後補習や麗しの生徒会長からの訓示もあり、座学はそこそこ着いていけるようになつてきている。ISもそれなりに扱えるようになつてきているので、順調といつことだ。

さて、学業が順調だとそろそろ少しだけ”余裕”が出来てくる。訓練や勉強が大嫌い、と言つ程ではないが自分で休みたい時やブラブラしたい時もある。

折角だから誰かを誘つて外出でもしようか。そう思つて休み時間、

シャルルに声を掛けてみた。

「おい、シャルル」

「な、なに？」

そういうえば前の引越しの一件以来、何故かシャルルに避けられる
いるような気がする。

気のせいだといいのだが。

どうせなら三人しかいない男子。仲良くしたいと思うのが人情だ
う。

「今日、外に遊びに行かないか？ ほら一夏も誘つて」

「い、一夏も！？」

「おい、何故そこで満面の笑みを浮かべる。
まさかお前…………ゲイか？」

「違つよー。大体僕はお」

「お？」

「お……おお……御徒町は……上野の隣です……」

「確かに山手線で御徒町は上野の次の駅だけど……それが、どうか
したのか？」

「え、ええと、いいもんだね、山手線つて。あははははははは

「そりが、シャルルはゲイじゃなくて鉄オタなのか」

「て、鉄オタ！？」

「ああ悪い。生糞のフランス人には分かり難かつたか。
鉄道が好きってことだよ」

「ま、まあ嫌いじゃないけど、別に特別好きっていう訳じゃ」

「なら如何して突然、御徒町がどうたらこうたらって言い出したんだよ」

「え、えと……………そう上野じゃない。秋葉原だよ！　僕は秋葉原に行きたいんだ！」

「あ、秋葉原って……確かに秋葉原も御徒町の隣だけど。何の用があるんだ？」

「だつて秋葉原って有名な

「

「ポルノ街だろ」

「そりそり、ポル……じゃなくて電気街だよ…」

「そりそり？　俺も日本に来るのは久し振りだから詳しくは知らないけど、なんだかジャパニーズアニメーションのヌードグラビアやら、何故かメイド服の売春婦が大量にいるって聞いた事があるけど」

「…………僕は良く知らないけど、それ絶対に間違ってると思つよ」

「そうなのか？」

「で、それでその秋葉原に何の用があるんだ？」

「やつぱり、売春？」

「違うよ… ただ、ちょっと電化製品を見たいかなーって」

「ふうん。けど今から秋葉原は遠いから、また今度にしようぜ。ほら次の休みにでも」

「そ、そうだね！ それじゃあ僕はこれで！」

「そう言いつとシャルルはそそくさと退散していった。
一体何を慌てていたのだろ？」

「やべ。放課後遊びに誘つたの忘れてた」

まあ次の休み時間に誘えればいいだろ？

そう思いなおして、再び授業を受け、次の休み時間。
結局それは不可能になつた。何故ならそれは。

「「」の距離だけは慣れないな」

「同感。」の学園内に男が使えるトイレが三箇所しかないと、いう現状はなんとかして欲しい」

一夏とレナルドの一人は走っていた。

「何故か？」

決まつていてる。男なら、いや女であろうと哺乳類ならば絶対に避けられない行為。

即ち排泄だ。小便ともいう。

二人は即座に用を足し、そして帰りの全力疾走の途中であった。

「何故こんな所で教師など！」

「やれやれ……」

ふと、足を止める。

「のーーつの声。両方とも聞き覚えがある。

「一夏」

「ああ」

ただならぬ予感を感じてか二人は声の方向へ歩み寄る。すると、そこには。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「」のよつな極東の地で何の役目があるといつのですか！

やはり声の主は織斑先生とラウラだった。

どうやら、ラウラのほうが食つて掛かつている様子である。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。

ここでは貴女の能力は半分も生かされません」

「まう

ドイツといえば、一昔前に初代ブリュンヒルデである織斑千冬が

「ISの教官として一時期赴任していたという噂があつたが……」
「人の口調からして、噂は真実だつたらしい。」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではあります
ん」

「何故だ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッショナにかと勘違
いしている。」

そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど

」

「……そこまでにしておけよ、小娘」

「つ……！」

底冷えするような声。

殺意や敵意こそ含まれていないうが、相対する者を問答無用に黙ら
せる霸気が籠つたその言葉。

流石のラウラも黙り込む。

「少し見ない間に偉くなつたな。」

十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

分かる。ラウラは震えている。

圧倒的な力に対する恐怖と、尊敬した者に拒絶されるかもしれない
いという恐れ。

「さて、授業が始まるな。さつと教室に戻れよ」

「…………」

早足で去つていぐラウラ。

数秒ほど如何しようか考えて。

「仕方ない。一夏、後は任せた」

「お、おい！」

ラウラを追う。

幸いレナルドは軍人の中でも足が速い部類に入る。ラウラのほうもそれほどスピードは出していなかつたので直ぐに追いついた。

「ラウラ…」

「レナルド…見ていたのか？」

「偶然だよ。それにしても如何してあんな事を言つたんだ」

疑問を問う。するとラウラは答えた。

織斑千冬が何故ドイツに教官として赴任したのか。何故転校初日に一夏を叩いたのか。

「成る程。つまり千冬さ……織斑先生がモンド・グロッソの一連霸を為しえなかつたのは、一夏が誘拐されたから。だから一夏が許せないのか」

「そりだ。あの男さえ、あんな弱い男の為に、教官は……。」

(さて、どうしたものか……)

思わず頭を抱えたくなるのを堪える。

推測するにラウラの感情は恐らく”嫉妬”。

ラウラの織斑千冬に対する感情は尊敬と憧れ。恋慕こそ抱いていないようだが、妙な独占欲なものだろう。これは全人類に言える事だが、好きなモノを自分だけのモノにしたい、というのは誰でも抱くような感情だ。ラウラも同じだろう。

(この二つの悩みが一番難しい)

レナルドとて若いながらも隊長として部下の相談にはよく乗つていた。

恋愛、飛行技術、故郷に残した恋人の事、戦死した友人。

だけどこのような感情の問題というのは、レナルドにとつて答えににくい事だった。

これがもつと大人のパイロットならば上手く相談にのつてやれるのだろうが、生憎とレナルドはまだ未成年。それなりの戦いを潜り抜けてきたとはいえ、人の感情のような明確な答えがない相談は、余りされたくない。

けれど、このまま放置しておいてもラウラが暴走する危険性もある。

最悪、一夏に闇討ちをかけないとも限らない。

流石に突然奇襲をかけるなんて事はしないだろうが、挑発して決闘に持ち込む事くらいは……たぶん、するだろう。

それで万が一決闘がエスカレートして死合にまで発展したら、国際問題になりかねない。

更に言えば、レナルドとこの少年はイギリスは嫌いだがドイツは好きだった。

ラウラ・ボーデヴィッヒとこの少女にそれなりに好感も覚えている。

少なくともあのハルマキよつ遙か。

(「いつ時は……そうだー。）

自分では明確な答えが出せない。
ならばどうするか？

決まっている。問題を…………先送りにするのだ。

「…………ラウラ。今日の放課後なんだけど

「

FLIGHT 13 問題 未解決（後書き）

ええ、次の次辺りにISバトルに入れそうです。

遂に束お手製、レナルド専用ISがそのベールを脱ぐ時が！

「時」は全ての怒りを癒す妙薬である。

時は怒りだけじゃない。哀しみや嘆きも癒してくれる、最も残酷な妙薬だ。

誰もが嘆き悲しみ、そして時間という妙薬がその苦しみと、そして感情を消していく。

人は忘れていく生き物だ。記録として思い出として残つたとしても、感情の伴つた記憶はそう長くはどぎめられない。やがてどんな感情も色あせ消えていく運命。

しかしそれでも尚色褪せない記憶があるのならば、それを永遠と定義するのだろう。

「ほう、これが日本の街か」

放課後、ラウラを伴い繁華街を歩く。

当然ながら一夏やシャルルはいない。一人がいたら

特に一夏が ラウラとの間で一悶着が起こるのは目に見えるている。といつより一夏がいたらラウラのほうは来ないだろう。

「そうだよ。流石に秋葉原やら原宿には劣るけど、それなりの街だ。なにせ天下のIIS学園のお膝元だからな。一通りの物は揃う

「では装備を揃えたいのだが。私の愛銃が最近壊れてな」

「それなら個人的に伝手のあるアイスランドの武器商人を紹介しよう。

あいつは俺に借りがあるからな。大抵の無理は聞く

「信用できるのか？」

「ああ。狡賢い奴でゲイだが最低限の信義は守るタイプだ。今日頼めば一週間中には日本に密輸…………じゃない！ 何で繁華街来て装備を揃えようなんて発想に到るんだ、お前は！」

「駄目か？」

「駄目だ！」

「…………帰つたらその武器商人を紹介してくれ。ナイフ以外の武装は殆ど持ち込めなかつたのだ」

「日本は銃が持ち歩けないらしいからな。

あれは参つた。第一俺は手元に銃がないと落ち着いて眠れない」

「同感だ。ISGがあるとはいえ、やはり銃が手元に欲しい

二人して意氣投合する。

立場は多少違えど同じ軍人同士だけあつて何か通じるものがあるのだ。

そのまま一人は物騒な会話を続けながら街を散策する。

「ところでレナルド」

「なんだ」

「教官を、再びドイツで指導して貰つことは、ビのよつて說得した
ら良いと思つ?」

「つー」

こきなりその質問をするか。

どうやら遊びまわらせて忘れさせる作戦は失敗のようだ。
けれど、どういづつ対応をしたものか。

レナルドは千冬とそれなりに親交がある。実の弟である一夏ほど
ではないが、その性格も知つていて、弟である一夏を
深く愛しているのも、なんとなく分かる。

ただでさえブリュンヒルデ織斑千冬の弟であり、しかも世界で三
人しかいないIISを操縦できる男だ。そんな弟をあの織斑千冬が放
置するだらうか。いや、絶対にない。

ドイツへの恩も一度教官として赴任したことで返しているだらう
し、今になつて織斑千冬がわざわざ遠いドイツで教鞭をとるなど特
にメリットがないのだ。というより彼女とて日本人。外国でしかな
いドイツよりかは日本のほうが大事だらう。

レナルドとアイスランドとドイツのどちらが大切かと問われれば、やはり祖国であるアイスランドのほうを選ぶ。

（なんだか厄介事ばかり巻き込まれていてる気がするな）

思えば最初からそうだった。

若干十六歳で小隊長、IIS学園への入学、専用機、そして今回。
安息の地は何処に。

「何で、そんなに織斑先生に固執するんだ。

大体別にドイツじゃなくたって、学園でいればお前の事だつて面倒見てくれるじゃないか」

「それでは駄目だ。こんな能天気な場所では、教官の実力は全く発揮出来ない。

だからもっと最高の場所で。教官のような強い人がこんな所にいては、完璧でいられないではないか！」

「ああ、ラウラは織斑先生に憧れているのか？」

「……………そうだ。

誰よりも強く、そして気高い。私の理想だ」

漸くラウラ・ボーデヴィッヒという少女に親近感を覚えた。

尊敬や敬意、嫉妬などが複雑に絡み合つた問題は、自分では良く分からぬ。

けどその感情ならば良く分かる。そう、憧れならば。

「なあラウラ。お前、なにしたいんだ？」

「なに、とは？」

「何でもいい。織斑先生をドイツに連れ帰るとかいうのじゃない。もつと根本的に、ラウラ・ボーデヴィッヒは何を目指しているんだ？」

「私は……」

ソラウラが目を瞑る。

やがて、強い意志を秘めた瞳で言った。

「私は到りたい。あの人の強さに。あの気高い姿に。
嗚呼、そうだ。あの諸人には到達出来ない強さへと到達したい。
それが私の生きる目的であり、存在理由」

「そうか。なら飛べばいいじゃないか」

「飛ぶ？」

「憧れたんだらう？ なら迷わず飛べばいい。
俺もそうだ。ソラに憧れたから軍隊に志願してパイロットになつて
飛んだ。」

何時かは空を越えて宇宙を飛びたい。

それが俺の生きる目的であり、存在理由」

「ソラに？」

「そうだよ。だからお前も迷つたりする必要なんてないんじゃない
か。」

織斑千冬という人に憧れたんだつたら、何にも考えず飛べばいい。
成果や過程なんて後からついてくるもんだよ。少なくとも俺はそう
だった」

（まあそのせいで小隊長やらH.I.Yやらを押し付けられたんだけどな

口に出さず心の中で愚痴つておく。

「成果や過程なんて後からついてくる、か。

感謝する。胸のつつかえが少し取れたような気がする

「どういたしまして、と。

それじゃ……ッ！」

ピタリと足が止まる。

レナルドの両眼が驚愕で見開かれた。

「どうしたんだ、突然止まつたり、なんか、して……なつ、貴方は！」

そこには軍関係者ならば絶対に知っている、一人の男がいた。目が覚めるような金髪の美青年。一見隙だらけのように見えるが、その実一分の隙もない佇まい。なによりも全てを見透かすかのような蒼い瞳。

「久し振りだな、レナルド。

お前がIFS学園に旅立つて以来か」

透き通るような声。

慌ててラウラが敬礼した。

「お初お目にかかります、”レストランクール”総帥。私はドイツ軍少佐、ラウラ・ボーデヴィッヒであります！」

ラウラの言葉に含まれる感情は、恐怖。

当然だ。この男は五年の歳月に渡る戦乱を僅か二ヶ月で治め、尚且つその後國を急速に復興させた怪物なのだから。

「お久し振りです、総帥」

「今はプライベートだよ、レナルド」

「さうかよ、この糞親父」

そうこの男。

アイスランドの戦乱を鎮めた英雄こそ、レナルド・レステンクールの実父であった。

ラウラは特に驚いた様子もない。当然だろう。レナルド・レステンクールが雑誌によく掲載される理由の一つが、ソレ”なのだから。

「しかし、もしかして逢引か？」

だとしたら悪かった。

私も息子とはいえ、他人の恋路に口出しをする気も邪魔をする気もない」

「他人、ね」

昔からこの父はそうだった。

世間一般で言うところの親としての自覚がない、とでもいうのだろうか。

今もそれは変わっていない。

「それより一応あんたみたいな人でもVIPなんだろ。いいのか、こんな場所をSPも着けずに一人で歩き回つて」

「護衛対象より脆弱なSPなど邪魔なだけだろ。

自分の身くらい自分で守るさ。第一SPなんて無粋な連中を連れていては、この国の魅力的な美女とお近づきになれないじゃないか」

「四十代のおっさんが良く囁く」

「知らないのか？ 天才は年をとらないんだ」

「…………」

確かに認めたくはないが、この父は四十代でありながら二十代、いや三十歳と言われても信じられる程の若々しさを保つている。

「それより、知っているか？」

「なにを」

「今度IJS学園で開かれる学年別トーナメントは、一人組みでの参加らしい」

「な、に

「

学年別トーナメントについては文字通り、学年全員がトーナメントを勝ち抜き優勝を目指すものだ。特に最高学年である三年生のトーナメントには、各国の重鎮や技術者などが見物

ーというよりは見定めに来る程だ。

成る程、この父が此処にいるのもその辺りが理由ということだろう。

「期待しているぞ、レナルド。」

よもや初戦敗退なんていう醜態を見せるなよ。

お前は仮にもアイスランドの代表候補生なのだ。お前の敗北は即ちアイスランドの敗北でもある。

そして私は、弱者に用はない

「一軍人に随分なご期待で」

「それが国の威信を背負うということだ、覚えておけよ。国の威信というのは、存外重い」

そう言つて父は、レストランクール総帥は去つていった。相変わらずの様子で。

「ラウラ。ペア、組もうぜ」

「それはいいが、本当に事実なのか？」

今度の学年別トーナメントがタッグマッチなどと

「あの糞親父は親としては最低の部類だけど、総帥としては最高だ。情報は確かだろ？ セ」

「…………レナルド」

「帰るぞ。そしてトーナメントに備える。ラウラ、お前はどうする？」

「私も帰ろう。トーナメントの情報が真実だろ？ と嘘だろ？ と、私は倒すべき相手がいる」

一夏のことだろう。

ならいい。闇討ちや私闘ではなく試合で決着をつけるのならば健全だ。

危なくなつても審判が止めに入る。

「参ったな」

呟くように言った。

ラウラ・ボーデヴィッヒ。即席とはいえ自分の相棒となるのならば、

「負けられない理由が一つになった」

彼女の助けもしなければならない。
それが、仲間だ。

漸く、次話でISバトルが……。

というより十五話になつて初です。

ここまで戦わなかつた主人公もある意味珍しいかも。

だからこそ次話では大暴れさせなければなりません。

不可能とは、臆病者の言い訳なり。

嘗て”不可能”を”可能”にする為に戦つた男がいた。

彼の願いは余りにも氣高く崇高で、そして夢物語だった。叶うはずのない絵空事、誰もが彼の願いを否定して、そんなものはないと断じた。

しかし彼は辿り着いたのである。結果的にそれが為されなかつたとしても、”不可能”を”可能”にすることが”可能”となる所にまで到達したのである。

だからこそ、彼の願いは尊い。

何の因果だらうか。

学年別トーナメント、その第一回戦の相手として選ばれたのは【シャルル＆一夏】のペア。

本当に出来すぎている。まるで狙い済ましたかのよつた組み合わせだ。

そして今日。

決戦の時を迎える。

「レナルド」

「

一夏が声を掛けってきた。

だが敢えて無視してアリーナへと歩いていく。一夏はほんの僅かに目を瞑り、そして同じように黙つてアリーナへと歩いていく。レナルド・レストランクールと反対側の地に。

それでいい。幾ら昔馴染みの友人とはいえ、こうやつて対峙している以上的是敵。情けをかけるつもりも掛けられるつもりもない。敵として立ち塞がる以上、女子供であるうと敬意をもつて全力で叩き潰す。

数少ない、父からの忠告で心に留めているものだ。

「ラウラ」

隣にいるラウラへと声を掛けた。

そう誰かに為に、というのならば彼女の為にだ。

自分はあの糞親父の前で無様を晒す気がない。ラウラは一夏を倒したい。

利害は一致している。だからこそ、一人は心技体全てが最高のコンディションだった。

一夏とシャルルと向き合つ。

もはやどちらのペアも何も言わなかつた。言つべき言葉が存在しなかつた。

アリーナにいる四人が一斉にEISを展開する。

シャルルはオレンジ色のラファール・リヴァイヴ・カスタムEIS
ラウラはシユヴァルツェア・レーゲン

一夏は白式。

そして最後の一人、レナルド・レストランクールの為に鬼才発明家

篠ノ之束が用意した専用機。

「FX-02S ホワイト・スコーピオン。漸く初陣だ！」

レナルドの言葉と共にHSが展開される。

ホワイト、ヒビつけられていながらもHSのカラーリングは黒と赤。

何を思つてこのチグハグな名前がつけられたのかは知らない。けれどそんなものは仔細なことである。レナルド自身そんなものに大した興味はない。

「始まりましたね。それにしてもデュノアくんと織斑くんの連携が凄いです。

特に織斑くん。とても初心者には思えません。それに織斑くん達と比べると少し荒いですけどボーデヴィッヒさんとレステンクールくんのペアの連携も中々ですよ」

教師だけが入室を許される観察室で、モニターに映し出された戦闘映像を眺めて、山田真耶が感心したよつて言つた。

「ふん。あれはデュノアが織斑に合わせてているだけだ。誉めるとすれば織斑ではなくデュノアだろ？

ボーデヴィッヒとレステンクールは…………一人とも隊を率いてきた経験があるからな。

尤もレステンクールのほうが素人同然のことと、ボーデヴィッヒが連携という分野においてデュノアに劣ることもあって、織斑達のそれと比べればやや劣るが。

「それにしても、あれがレナルドくんの専用機。

「どんなトンでもないISが出てくるかと想つたか？」

「…………はい」

再びディスプレイに映る戦闘映像を見る。

レナルドの専用機は束お手製だけあって、量産型を超えた性能が伺えるが、特に目立つた装備も出力もない。ごく平均的な第三世代と同等の機動力だ。

白騎士事件で世界を変革したといつてもいい篠ノ之束が作ったISにしては大人しすぎるのではないだろうか。山田真耶がそう考えてしまうのも無理はない。

「どんな優れたISだろうと操縦者が素人ならば単なる鉄屑だ。ISの性能の差が戦力の決定的違いではない」

初代ブリュンヒルデである千冬が言つと奇妙な説得力がある。

しかし千冬の言つ事は正しい。

彼女ほどの操縦者ならば、学生の操るISなど、それこそ生身にISの刃を展開しただけで圧倒してしまうだろう。

右腕がなくなれば左腕を使えばいい。両腕が無ければ足で蹴り殺せばいい。四肢がないなら、敵の喉笛を噛み切ればいい。

どんなコンディションでも一流の結果を出すのがプロフェッショナルなのである。ISの性能を言い訳にするような者はまだまだ一流三流だ。

（しかしラウラ。変わったな。

ドイツで私が指導していた頃は強さを攻撃力と同一と考えていたが

.....。

「この試合、分からなくなつた」

「もらつた！」

一夏が背後から迫つてくる。

事前の情報で白式には近接戦闘用のブレードしかないのは分かつているのだ。故に距離をとつて銃弾の嵐を浴びせてやれば倒せる相手なのだ。

ホワイト・スコーピオンのメイン武装。ビーム兵器と実弾兵器を瞬時に変更することが出来る可変ライフル。白式相手ではビーム兵器は有効打に成り得ない。だからこそ今回の試合においては実弾オノリーで戦っている。

その可変ライフルを一夏へと照準。この距離、そして両者のスピード。

当たる。レナルドはそう確信したが。

「やらせないよ！」

シャルルが尽かさず援護射撃をしてきた。しかもラウラの相手をしながら一瞬の隙を見計らつて。

成る程、代表候補生とは伊達ではないらしい。あのハルマキ婆ならまだしもラウラを相手にしながらも、一夏の援護をするなど並大抵の力量では不可能だ。

（「この距離は…」）

BTシールドを展開し銃弾を受け止める。
だけど、それは。

「貰つたア

1

一夏の接近を許してしまう事となつた。

即座に自己の淵へ埋没しイメージする。想像するのは田式のフレードよりかは短い近接戦闘用武装。嘗て会長と訓練したのが役立つた。懐からナイフを取り出すイメージをもつて、自らの手中にその武装を呼び出す。

金属音。

刃と刃がぶつかり激しい音を鳴らす。

アサルトナイフと雪片三型との間で銃廻り合いはなる

しかし此處で機体の特徴の差が現れた。白式は近接戦闘特化型。対するホワイト・スコーピオンはオールマイティーに戦える汎用型。通常の戦闘ならばホワイト・スコーピオン有利であるが、こと近接戦ならば白式は段違いだ。

やがてアサルトナイフが弾かれ。

ମାତ୍ରାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

発動する白式の单一仕様能力、零落白夜。
これは避けられない。

轟音。雪片式型の直撃を受けた。
きしむエヒ。だが、それでも。

「一太刀浴びせたくらいで、勝ったと思つくなッ！」

アサルトナイフが弾かれてしまつてゐるので、白式の胴体を思いつきり蹴り飛ばす。

「…………くそつ。決まつたと思つたんだけどな」

「残念だつたな。あのウサ耳アホ科学者お手製を舐めてもうりちや困る」

そうは言つレナルドだが、実は内心ではヒヤヒヤしていた。ぶつちやけると、レナルド自身あれば負けた、と思つてしまつていたのだ。

これが通常の機体、いや例え専用機でも既に負けているだらう。しかしレナルドの専用機ホワイト・スコーピオンにはまだまだ余裕がある。

（成る程、このタフさがこのH.I最大のウリといふことか）

地味だが素晴らしい性能だ。

タフさといふのは兵器において重要な要素の一つだ。元々空軍のパイロットだつたレナルドには良く分かる。自分も含め、誰だつて簡単に壊れたり破壊されたりする脆弱な戦闘機になんて乗りたくはない。例えその戦闘機が世界最高のスピードと世界最高の火力を持つていたとしても。

戦場で命を賭けて戦う兵士達にとつて大事なのは性能よりも、搭乗者を最後まで守り通してくれるタフさと安全性なのだ。ならば、このH.Iは実に自分の理想通りといえる。

だけど、それでも。

未だに超えていない壁というものが存在する。

ISという兵器に触れた年数が少ないという絶対的な壁が。

『レナルド！ もつちに行つたぞー。』

「ー。」

銃弾の雨。

一夏に実弾武装が搭載されていないのは分かつてゐる。だから相手側で射撃武器を使つてくるのは必然一人しかいない。

「配役交代だよー。」

「ちいー。」

気付けばラウラを一夏が。

そしてシャルルが自分を、という構図へと入れ替わつていた。

シャルルの専用機。

リヴァイアがミサイルを発射してくる。

迎撃するが数が多い。避けられねばベストなのだが、こちらにはそれをする技量がない。

『レナルドー。』

ラウラからプライベート通信が入る。

『今直ぐにこの男を振り払つてもつちにー。』

鐵斑一夏

『やめろ、それが狙いだ！』

そう、もしラウラが無理にこちらを援護しようとすれば、未熟な一夏でもラウラを抑え易くなる。そして無理に動けば致命的な”隙”^{シャルル}が生まれてしまう。その隙を、この強かな同級生は絶対に見逃す事はないだろう。

「いい判断だね。けど！」

高速切替。

ル。大容量の拡張領域を活かした戦闘と平行して武装を変更するスキ

今シャルルの手に握られているのに、四〇〇の大な鉄口あれを受ければ、流石のホワイト・スコーピオンでも。

一瞬の静寂。

士煙が上がり、アリーナの全容は見えないがホワイト・スコーピオンが今の攻撃の直撃を受けたのは明確であった。

各国から来た技術者は政治家達もそれを疑わない。ある者は篠ノ之束が作り上げたISを破つたシャルルの技量に舌を巻き。

またある者は篠ノ之束の作り上げたISを操縦していくながらも敗北したレナルドを嘲笑した。

そんな中。

一人だけ。アイスランドの総帥でありレナルドの実父でもある男だけは、嘲笑ではない笑みを浮かべてみせた。

（まだだらう、レナルド。）

お前はこの程度では負けはしない

彼は知っていた。

レナルド・レストランクールという男の反骨精神を。
軍隊で揉まれそんな精神は消えたかのように思える。しかし違うのだ。

レナルドの反骨精神はそもそも社会に対するものではなく、この自分唯一人に向けられているのだから。その自分が見ている戦場でレナルド・レストランクールが容易く敗れる訳がないのだ。

それにレナルドはまだ自らの専用機の真価を全く發揮していない。

おおッ！

歓声が上がる。

そう、やはりそうだった。

レナルド・レストランクールは、まだ飛べる。

土煙の中から一つの、いや、一機の機影が飛び出してくる。
それも従来のIJSを遥かに超えるスピードで。

ざわめきが大きくなる。

それはそうだらう。

飛び出してきたのはIJSではなく、多少小型ではあるものの『戦闘機』だったのだから。

【FX-02S ホワイト・スコーピオン】

搭乗者：レナルド・レステンクール

分類：第四世代型IS

製造：篠ノ之束

生産形態：レナルド専用機

＜武装＞

『可変ライフル』

読んで字の如く。FX-02Sの主武装。

瞬時に実弾兵器とビーム兵器を瞬時に交換する事によつてありゆる

戦局に対応可能。

『アサルトナイフ』

MF-02の近接戦闘用武装。

目立つた特長はないがかなりの切れ味を誇る。

『マイクロミサイル』

誘導性のあるミサイル。

このISの生命線ともいえる武装。

『可変バズーカ砲』

大威力のバズーカ。

可変ライフルと同じように実弾兵器とビーム兵器を瞬時に入れ替える事が可能。

＜詳細＞

レナルドの為に篠ノ之束自身が開発した第四世代IS。

搭乗者の好みに合わせたのか束が作ったにしては特殊性のある武装がなく、武装も実弾兵器とBT兵器を有しており如何なる戦局、如何なる相手にも対応できる仕様となつてゐる。

また白式や一般的な第三世代型とは違つて燃費・安全性・汎用性を

第一に設計されており、ある意味においてISという兵器の理想系。
最大の特徴として戦闘機フォルムへの変形機構を有する。

皆大好き可変型です。

え？ 武装が地味すぎる？ 浪漫がない？

いえ違います。ノーマルな武装にこそ… 漢の浪漫が詰まっているのです！

MSだつてビームサーベルとビームライフルさえあれば問題無し！ それ以外の武装なんて余計なだけなのです！ 電子専用やら狙撃用やらは別ですが。

自分を心から愛せるようになると、他人をもつと深く愛せるようになる。自分の欲求を敏感に察知できるようになると、他人にも大らかに優しくなれる。

俺は自分を心から愛せているだろうか。恐らく愛していないだろう。自分が嫌い、と言つほどではないが、かといって愛している訳でもない。

だからなのかも知れない。幾ら誰かと付き合つても長続きしなかつたのは。

戦闘機。

それは既にIISによつて空戦の主役から落とされた兵器だ。理由を挙げるなら多くある。

先ず戦闘機という兵器には小回りが利かない。対するIISはP.I.Cにより空を自由自在に浮遊することが可能だ。戦闘機が旋回するのに一々大回りをしなければならないのに対し、IISは急の方向転換というのも簡単に出来てしまつ。

そして最大の違いは耐久性だ。

例えばであるが、戦闘機がビルや地面に激突したらどうなるだろうか。そんなもの考えるまでもない事であろう。当然ながら戦闘機

は木つ端微塵になり爆散する。

しかしEVSは違う。鉄壁のシールドバリアは通常のミサイルや砲弾だけじゃなく、猛スピードで障害物に激突したとしても機体と操縦者を無傷で守る。

そう現代において”戦闘機”など脇役。

決して主役として脚光を浴びる事のない存在だった。

今日、この日までは

「まじ、かよ」

空に雄大と羽ばたく戦闘機を見て、織斑一夏は呆然と呟いた。

一夏とて男だ。子供の頃からその威容には多少なりとも憧れがあつた。

嘗て現代の戦いにおける主役だったそれは、この日蘇る。

「一夏！」

シャルルだ。

お陰で漸く我に帰る。

そうだ。戦闘機だらうがなんだらうが今はあの戦闘機は敵だ。

「シャルル、レナルドの相手を頼む！俺は！」

あいつを、ラウラ・ボーデヴィイッヒの相手をする。

その間にシャルルがレナルドを倒してくれれば、一対一でラウラと戦う事が出来る。

けど、やはり。

「やつぱり格好良いよな、飛行機つて」

少年織斑一夏は、そう純粋に思った。

「たつぐ、あの「エンジンウサ耳アホ科学者も偶には良い仕事をする。本当に『たまに』だけ」

風を切つて空を飛翔する戦闘機、いやホワイト・スコープオンの内部でレナルドはそう呟いた。

しかしこれは変形というよりは変身に近いかかもしれない。

先程までエジだったそれは完全に戦闘機へと姿を変えていた。

ホワイト・スコープオンはその姿形だけではなく、その大きさまで変わっていた。

通常のエジのサイズが多少小柄な戦闘機へと変化している。当のレナルドは戦闘機のコックピットに普通の戦闘機と同じように座っていた。

操縦方法やその他の機能については、殆ど今まで乗つてきた戦闘機と変わらないらしい。本当に良い仕事をする。やるべき時はやる女、とでもいうのだろうか。

「レナルド！ 悪いけど、やらせて貰つよー。」

「シャルル…………面白いくらいで見てみろ」

そう言い返して、漸く理解した。

最初にこの機体を見た時、どうして自分が不快感を抱いたのか。簡単だ。自分はこれがエジの姿でいることが我慢ならなかつたの

だ。

だけど今は違う。愛機はその姿を変え、黒い翼を羽ばたかせている。

「言われずとも…」

リヴァイヴからミサイルが発射される。
数は二十。

何時も慌てて迎撃するところだが。

「魅せてやる、シャルル。

エースパイロットの名前は伊達じやあない」

右から六、後ろから五、前から七、左から一。
なんだ、この程度か。

この程度でこのレナルド・レステンクールを大地に墜とすなど
片腹痛い。

ホワイト・スコーピオンで接近するミサイルに突進する。そして
直撃する寸前で機体を急上昇させスクロールさせた。
そのまま再びマックスピードで振り払う。後方では爆発したミ
サイル。

「さあてお仕置きタイムだ、シャルル！」

「くつ」

身構えるシャルル。

戦闘機形態なだけあって小回りこそ効かないが、その分スピード
は圧倒的だ。

従来のHSを遥かに超えたスピードが容易く出せる。だからこそ、シャルル・デュノアが身構え、ほんの僅かに隙が出来たのを見逃さずにしてそれを素通りした。

「えつ？ ま、まさか……！」

そのまさかだよ、シャルル。

ホワイト・スコーピオンのコックピットでそう呟いた。レナルド・レストランクールの目的は一つ、それは。

「一夏ア！」

「れ、レナルド！？」

そう何度もわざわざ強敵であるシャルルを相手にする必要などない。そんなギャンブルをするよりも零落白夜を使用してエネルギー残量の少ない白式を倒した後に、ラウラと一緒に一人でシャルルを相手にしたほうが確実だし安全だ。だから。

「FIRE！」

ありつたけのミサイルを白式に浴びせた。避けようとした一夏であるが。

「私を忘れるな、織斑一夏」

「くそつー。」

ラウラによつて阻まれた。

もはや一夏に成す術はない。そのままミサイルの爆煙に呑まれ一

夏は敗北した。

「残りは！」

残った敵。
シャルルを相手しようとしたが、

「この距離なら外さないよ」

「」

驚愕の事

シャルルは既に空にいた。彼かいたのは「スカ」の背後
そしてシャルルは攻撃力だけならば第一世代最強と謳われた装備
があった。

六十九口径のパイルバンカー。通称『グレー・スケール櫛殺し』

アリに響いた。

強力な一撃がモロに叩き込まれる。しかしそれで終わらない。『楯殺し』はリボルバー機能により即座に次弾が装填される。つまり連射が可能な兵器なのだ。

一発、三発。立て続けに叩き込まれ、ラウラの胴体はゆっくつと倒れていった。

「この、野郎！」

ラウラがその顔を苦悶に歪め倒れる。その光景を直視した時、レナルドの中で何かが切れた。

「アキラ君はお風呂に入らなかったみたいだね。」

機体を大空へと飛ひ上がらせる。

戦闘機形態は確かに速い。圧倒的スピードだ。しかしアリーナのような狭い空間ではその性能を半分も発揮出来ない。もっと広い海上などなら兎も角、シャルルのような強かな相手と一対一だと勝てるかどうか。可能性は五分五分どころか良くて10%だろう。

たがりこそレナルトは飛んだ。急上昇した後はひたすら大蛇へ一夏だつたら即座に理解しただろう。現在レナルドのとつた先鋒こそ、嘗て太平洋戦争で多くのパイロット達がその命の炎を燃やしそくす事により可能した悲劇の攻撃。即ち、

「カミカゼ、アタアツクツ！」

シャルルの絶叫が響いた。

それでもレナルドは止まらない。ただ真っ直ぐにシャルルのリヴァイヴをアリーナの藻屑とする為に突進する。特攻。そういえば分かりやすいだろ？。

「だけれど、直線の動きなら避けれ、ば……」

ラウラ!

逃げようとするシャルルの両足を、既に死に体のラウラが掴んだ。慌てて振り払い逃れようとするが、遅い。もう直ぐ底にカミカゼを纏った戦闘機が。

「死ねば諸共だ！ 嘘らえッ！」

「あやつ」

ぶつかる。戦闘機とエリが。

だがそれだけじゃない。レナルドは衝突の寸前、全てのミサイルと弾薬のありつたけを発射していた。しかしアサルトライフルだけではなくミサイルを至近距離で発射するということは。

「爆散！」

その言葉通り爆発した。

至近距離で爆発したミサイルはシャルルとレナルドを両方巻き込み、やがて全ての音を奪い去った。

「…………」

ゆつくつと体を起き上がらせる。

見慣れた天井。どうやらヒューリック学園の保健室のようだ。

「目が覚めたか、この馬鹿者」

「千冬や」

出席簿で殴られた。

「織斑先生だ」

「…………織斑先生、ijiは。それに試合」

そうだ試合はどうなつた。

自分が覚えているのは、確か戦闘機形態のホワイト・スコーピオンで特攻して、それで。

「それなのだがな」

そして聞いた。

勝負は引き分け。シャルルが戦闘不能になつたのは良いが、当のレナルドとラウラまで戦闘不能になつたかららしい。

そしてなんでもトーナメントも中止になつたそうだ。

理由は…………なんというか、最後の特攻で観客席に被害が出てしまつたらしい。それでこれ以上は危険だとかなんとか。

「しかし如何してあんな無茶をした」

「それが…………コックピットに『カミカゼ』というスイッチがありまして、それを押したら……」

事実だ。ホワイト・スコーピオンのコックピットに赤いボタンに白い文字で『カミカゼ』というスイッチがあったのだ。

それを押したら一時的に限界速度を突破だの全弾発射などというのがオートで発動して、後はそのままの勢いで突っ込んだという訳である。

「まったく束のやつは…………漸くまともな機体を作つたと思えば、やはりトンでもない機能を用意してあつたか。

戦闘機形態とはいえたから良かつたものの、通常の戦闘機だったら即死だったぞ

「そうですね。俺も一度と同じ真似はしたくありません

「やうか。だが念の為、あれは一度と使うなよ。

安全面でもそうだし、なにより心臓に悪い」

「了解です」

言われずとも同じようなするつもりはない。

といつより出来ない。レナルドとて戦闘気乗り。特攻は恐いのだ。

「やういえば如何して俺は保健室に。E.Sの絶対防衛は

「簡単な話だ。特攻した後にお前のE.Sの展開が解除されくな。
お前の怪我は、その際に地面に落下して出来たものだ」

「成る程……」

特攻ではなく特攻した後に地面に落下して怪我するとは。
なんともマヌケな話である。

「では私はこれで、仕事が残っているのでな。
ああ、それと……保健室でよからぬ行為を働くなよ」

「よからぬ行為って」

そこで気付いた。

自分の横たわっている保健室のベッドに一人の少女がいた。

どうやら看病をしていてそのまま眠ってしまったらしい。

「ラウラ……」

何時の間にやら織斑先生は何処かへ行ってしまっていた。
即ちこの部屋にいるのは自分とラウラだけ。

「馬鹿か俺は。何考えているんだが……」

溜息をつく。

もしかしたら気付いていないだけで、かなり疲れているのかもし
れない。

「ありがとな、ラウラ。

最後の特攻でお前がシャルルの足を止めてくれなければ、俺はただ
の見つとも無い自爆で終わっていた」

乱れていたラウラの髪に触れる。

そして、何かが割れるような音がした。

「.....」

一夏がいる。

シャルルがいる（何故か女装していた）

笄がいる

ハルマキがいる

酢豚中国人がいる

どうやら、お見舞いに来てくれたらしい。
だけどその四人とハルマキは頬を赤くして。

Γ Γ Γ Γ Γ

.....」

氣まずい沈黙。

やがて意を決したように一夏が

「ごめん。俺空氣読めてなかつた。
それじゃあ……お邪魔しました」

「ええい待て！ 何か思いつきり誤解しているだろつ！」

「こら第！ お前からも何か言つてやれ！ ハルマキ！ なにを軽蔑したような目で見ている！ シャルル！ 何で女装している！ そして誰家へも行かぬで子供が

更に余談だが……。

シャルルが実はシャルロット・デュノアという女だと知ったのは、それから数時間後のことであつた。

ちなみにレナルドの専用機ですが、本編中で述べた通り変形というよりかは変身に近く、ISから通常より一回りくらい小さい戦闘機へと”変身”するような感じです。なのでレナルドが無理な体勢で折れ曲がっている、という訳じゃありません。しっかりと戦闘機の中で操縦しています。ちなみに複座式。

修学旅行。

中学・高校の合わせて二つある一大イベントである。

当然ながら基本的カリキュラムが日本の高校と同一な工学園にも修学旅行”は存在する。

余談だが本作の作者が不幸な巡りあわせで、修学旅行が一連続広島・長崎だったのは激しく余談である。出来れば万里の長城を、見たかった……。

アイスランド首都レイキヤビク。

その中でも武力の中心であるアイスランド軍本部の更に中心。総帥執務室にその男はいた。

「以上がレストランクール少佐と”ホワイト・スコーピオン”の戦闘データです」

「結構だ」

秘書からの報告にレストランクール総帥は満足気に頷いた。そして、ゆっくりと珈琲を口に含む。「の辺りは流石は親子というべきだらうか。

「しかし可変型とは随分と、面白い機体じゃないか。

天才科学者篠ノ乃博士がレナルドにご熱心というのは知っていたが、まさか専用機まで用意してくれるとは思わなかつた。

こういうのを、確かに極東日本では『棚から牡丹餅』といつのだつたかな」

「はい」

「これで結果的に”六機”のIHSが我が国にあるといつ事になつた。上々だよ」

五機ではなく六機。

もしアイスランド軍の事情に少し詳しい者がいたのならば首をかしげただろう。

なにせアイスランドの発表では現在アイスランド軍が保有しているIHSは四機。

レナルドの白蠍を足しても”五機”の筈だ。

これではアイスランドは国際的に嘘をついていふことになつてしまつ。

だがこれには絡繰りがある。

アイスランド軍はIHSをレナルドの白蠍を含めて”五機”しか所有していない。これは事実なのだ。

しかし軍が五機しか所有していなくてもIHSを所有出来るのは軍だけではない。

最後の一機のIHSはこの男。レストランクール総帥個人が所有しているのだ。

「レイキヤビク近くで発見された”騎士”だが……」

「あれは既に地下の秘密ドックにて

「やうか。それで例の計画。男性でも操縦可能なＩＳ・あれの成果はどうなんだ?」

「結果が出ていませんので現状では何とも言ひ難く。ただ『理論上』は可能な筈です」

「『理論上』だけところは別の話で『机上の空論』ピコツのだよ」

「恐れ入ります」

「しかし氣を付けてくれよ。

『実験機や、秘密兵器は強奪される』といふ嫌なジンクスがあるからな」

「警備を強化せます」

「頼む。さて、ヒュ学園は今頃……」

「修学旅行です。レストランクール少佐の報告書にその話が」

「修学旅行、か。私は行つたことがないが………いものなのかな」

「申し訳ありません。私も修学旅行といつものには行つたことがないもので」

「それは残念。しかし何だろうな。

今回の修学旅行。ただでは終わらないよつた氣がする

「なにがアクシデントがあると？」

「さあ、それは神のみぞ知る事だわ！」

レストランクール総帥は不敵に微笑んだ。

心地よい風。

ミンミンと鳴く蝉のオーケストラは夏の訪れを感じさせる。

静かだ。

レナルド・レストランクールは穏やかな気分でコーヒーを口に含む。

「嗚呼、ここが極楽浄土か」

近頃騒がしい事ばかりだつた為だろうか。

こういう静かな平穏が何者にも変え難い宝物だということを再確認した。

思い起こせば四月上旬。

突然の二ンジン襲来事件。

そして転校して直ぐの『珈琲VS紅茶 天下分け目の決選』『すぶたのなく頃に』『カミカゼ特攻アリーナ崩壊事件』など多くの惨事。

短いながらもHJS学園での生活は『平和の大切さ』を刻み付けるには十分すぎた。

「空を飛ぶのもいいけど、偶にまじめにやつて和菓のもいいなあ～」

「やつだな……しかし」の和菓子は美味しい」

隣にはラウラ。

彼女もどこか和んだ様子で和菓子をパクついている。

「明日になれば浜辺でもマラソンとかEVAの訓練やらで忙しくなるから……今日くじこマッタリ過ごすのも良くてみなあ～」

EVA学園の修学旅行が、世間一般の修学旅行と同じ訳がない。初日は自由時間が与えられているが、明日からは学園内では出来ないような訓練や、水上での模擬戦などやる事が盛り沢山なのである。

しかし初日は自由。自由なのだ。

いつもやつてラウラとナルドのよつて旅館の縁側でまつたり珈琲と和菓子をパクつこうと自由なのである。ここには口煩い教育もつづったい父親も、そして騒々しいハルマキと酢豚もいないのだ。

「夏草や兵どもが夢の跡」

なんとなくそんな事を口にした。

「なんだ、それは？」

「俳句だよ、俳句。

松尾芭蕉の俳句」

「まつ。どういう意味なんだ？」

「意味？……………知らない」

「意味は知らないのか？」

「仕方ないだろ。俺日本人じゃなくてアイスランド人だし。前に日本の学校に通つていた頃に、国語の授業で習つた俳句を適当に言つてみただけだよ。」

今は夏だし、俺もお前も兵士だし……………ぴったりだろ」

「そうか。しかし、」

「なんだ？」

「なんとなく穏やかな気分になつた。きつと穏やかで幸せな歌なんだろうな」

「そうだよ、きつと……………」

ちなみに『夏草や兵どもが夢の跡』

これは芭蕉が奥州平泉に立ち寄つたときに詠んだ句で、平泉といえば義経が臣下と共に立てこもつて討伐軍と戦つた地であり。「兵どもが夢」というのはそのことを指している。

嘗て武将達が各自の願いや野望をいだいて戦い、そして慘く散つていった居城も、今となつては夏草が生い茂るばかりだ、というような情景を謳つているのであって、決して幸福でも穏やかでもない。

「なあレナルド」

「……………いや～、珈琲が美味しいなあ～」

「いや珈琲は兎も角、何故かは知らないが、中庭に存在を誇示している巨大な二ンジンがあるが」

「気にするな。あれは幻想だ。

そして軍人が相手するのは幻想じゃなくて現実だ。

幻想なんて幻想殺しに任せてしまえ」

「…………何を言つているか分からぬが、あれは間違いなく現実として存在する二ンジンだぞ」

「ふうむ」

流石に無視する事は出来ないと悟つたのかレナルドは立ち上がる。そしてニンジンにあるものを付けるとラウラのいる場所に戻ってきた。

「さてと、折角だし海にでも行くとしようか」

「それはいいが……あの二ンジンに何をしたのだ？」

「はははは、汚染された野菜はしっかりと焼却処分しないとな。
…………まあそんな事はどうでもいい。海だ海。
青い海…………じゃなくて、対して綺麗でもない緑色の海に行こう
ぜ」

水着を持って旅館を出る。

どこか遠くでプラスチック爆弾の爆発音が聞こえたような気がするが、気にしてはいけない。

もしあのニンジンが自分の想定する中で最悪の人物が入っていた

としても、まあ大丈夫だろう。

旅館に被害が出ないように計算もしてある。
あんな自然の摂理に真っ向から反逆したような巨大二エンジンはこの世から消滅するべきなのだ。

「二エンジンアレルギーじゃなくて本当に良かった」

さあ行こう。

二エンジンは滅んだ。

真っ青……じゃなくて、日本らしい緑色の海が待っている。

「れっくん！ 待つてよお～！」

「ええい、来るな！ 逃げるぞ、ラウラ！

捕まつたら二エンジン帝国に連れてかれるぞ！」

さてこの修学旅行で一つ悟ったことがある。
それは天災からは絶対に逃れられないといつ事だ。

レナルドの専用機、日本語では『白蠍』。
機体の色は黒なのに白蠍。
つまりは……オセロ蠍。

私の人生における成功のすべては、どんな場合でも必ず15分前に到着したおかげである。

時間を守れない人間というのは、大抵の場合において信用できない。時間というものを疎かにすれば、人間社会の歯車というのは容易くズレしていく。

電車を見れば分かり易いだろう。電車が二十分遅れるだけで、一体どれほどの“歯車”は容易くズレていくのだ。

思い起させば、そいつと出会ったのは單なる偶然だった。

他の奴らがサボったせいで女子一人だけでやらされていた掃除を手伝つたせいで、少し遅くなつた俺は早足で下校しようとしていた。なにせその日は籌と道場で約束があつたから。もし時間に遅れるような事があれば、間違いなく籌は怒る。それに男として女を待たせるなんていうのは、あまりしたくはない。

「なにやつてるんだ、あいつら」

「ここで無視していれば歴史は変わつたのかもしれない。もしかしたらその後においても男のI.S操縦者は俺一人だったのかもしれない。い。」

けど現実では俺は見てしまった。そして見てしまったからには未来を見通すことの出来ない俺は無視することなんて出来なかつた。

それは、まるでドラマなんかにありそうな光景。

一人の外国人と思われる白人の児童が、1学年上のガキ大将との取り巻きに校舎の裏に連れて行かれるのを俺は見た。そういえば、一つ上の学年にアイスランドから転校生が来たと言っていたな。

「たつく、あいつら……」

俺も男の子だ。

別に喧嘩を否定する訳じゃない。

けどそれは一対一での場合だ。複数で一人を相手するなんて、それは喧嘩じゃなくて虐めだ。

止めよう。

そう思つた俺はガキ大将を追つて、校舎の裏へ行き、そして絶句する。

そこにあつた光景は予想とは違つていた。

被害者になるであろう外国人の少年によつて、五人の取り巻き達は打倒されていた。残つているのは小学生でありながらも中学生並みの体格を誇るガキ大将。

けどそのガキ大将も外国人の少年によつてあつさりと倒された。確信する。あの外国人の少年は素人じゃない。きっと自分と同じように武術の心得があるのだと。

その時は帰ろうと思つていた。

もう自分が止めるべき虐めはないと、そう思つていたのだ。けれど……

「このイエローモンキーがつ！ ザまあねえなあ！
寄つてたかつて俺一人も倒せねえのかよ！ ああ！」

喧嘩は、終わってなかつた。

外国人の少年はガキ大将達を撃退しただけでは飽き足らず、倒れたガキ大将達を蹴り続けていた。

「ここの三下野郎が、偉そつここの三下以下の雑魚引き連れて糲がつてんじやあねえよー！」

おらあ、なんとか言え、ここの野郎おー！」

「止めろシー！」

無意識に、気づいたら飛び出でいた。

いや意識がしつかりとしていても飛び出していくだらう。何故ならばもうこれは喧嘩じゃなく、ただの虐めになつていたから。

だから止める。やう、俺を守つてくれた千冬姉のよつこ。

「ああ。なんだ、テメエ」

外国人の少年がこひりて向き直る。

青い瞳が俺を射抜く。

「もう止めろよ。勝負はついただうつ

「勝負う？ 馬鹿じやねえのか。

最初から勝負なんてしてねえよ。馬鹿野郎。

ただし生意氣な猿に躰をしてやつてたんだよ。こつこつ風に、なあー！」

「ひでぶつー！」

少年がガキ大将の頭を踏んだ。

「そりかよ！　この馬鹿！」

それが合図となり、俺は駆けた。

対する外国人の少年は面倒臭そうに構える。俺はその対応を『油断』と受け取った！

「舐めるんじゃねえええええええええええええええええええ！」

「ぶ」おー。」

顔面を殴られ吹っ飛ばされる外国人の少年。名札にある名前はレナルド・レストランクール。成程、やっぱり外国人だ。

「テメエ、やつてくれるじゃねえか」

「ああ、やつてやつたよ」

「ちう！　吠えてんじゃねえぞ、こらあ！」

それからの事は良く覚えていない。

ただ後から聞いた話であるがレナルドは軍人である父親から武術を叩き込まれており、俺自身も古武術を嗜んでいたから、あのガキ大将のようにあつさりとやられる事もなく、そして幾ら強くても所詮は小学生。殴られようと蹴られようと、そう簡単に意識がブラックアウトする筈もなく、その『喧嘩』は一時間は続いた。ちなみにガキ大将達は気づけば居なくなっていた。

だけど終わりはあっけないもので、帰りが遅いのを心配して来た千冬姉によつて二人とも喧嘩両成敗ということでお説教されて、それから何だかんだあつて…………氣づいたら友達になつてたんだよなあ。

本当に世の中つてよくわからない。

結局。

追つてきたニンジン星人を装備の70%を代償に撃退してから、あのウサミミは現れなかつた。

「よく普通に海で泳ぎ、酢豚を食べ、珈琲をブレンドし、ナイフを研ぎ、銃を整備し、珈琲を飲み、そしてビーチバレーをして、夕食を食べ、珈琲をブレンドし、一夏にマッサージをして貰い、ハルマキと戦争して、珈琲を飲み、珈琲緑茶帝国と紅茶烏龍茶共和国との間で第一次学園大戦が勃発し、珈琲をブレンドし、ニンジンを爆破し、珈琲を飲み、そして就寝する。

実に平和な1日であつた。

ニンジン星人の襲来さえなければ。

そして合宿2日目。

今日は午前中から夜まで丸1日I-Sの各種装備試験運用データ取りに追われる。

特に自分も含めた専用機もちは、その装備の量が半端じゃないのて大変だ。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたI-Sの装備試験を行つ

よつに。

専用機もちは専用パーティのテストだ。全員、迅速に行え

合宿に参加しているIIS学園生徒一同がきれいに返事をする。それにしても、とあたりを見渡す。ここに搬入されたIISの新型装備のテストが今回の合宿の目的の一つである。当然、生徒は全員IISスース姿だ。

しかし、こうして見ると……。

(ううむ、やっぱリシャルルは女だったのか)

顔立ちが変わった訳ではないが、その胸のふくらみが彼女が彼ではないことを如実に示していた。つまり本当は男なのに女のふりをしているという可能性はないわけだ。

(やつひえは男だと思つてたから色々と”スキンシップ”をとつたな)

具体的には、後ろから小突いたり、服を脱がそうとしたり、ポルノを見せたり、猥談を聞かせたり、女体の神秘を語つたりと。

男なら兎も角、女にやつたのならばセクハラ以外の何物でもない。だけど、

(ま、仕方ないか)

そもそもシャルルが自分を「男」と偽装していたのが悪いのだ。詳しい理由こそ聞いていないが、どちらにせよ嘘は嘘。男とシャルルが名乗つたからこそ自分もまたシャルルを男と思い接したのだ。一夏のように紳士的人間ならば謝罪の一つでもするのだろうが、残念ながらレナルド・レストランクールという男は良い意味でも悪い意

味でも『男女平等』な男であつた。

「ああ、篠ノ乃。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

打鉄の装備を運んでいた筈は、織斑先生に呼ばれてそちらに向かう。

「お前には今日から専用

！」

その声を聴いた時のレナルドはまるで鏡に反射する光のごとく、
実に自然かつ素早い動作でESを展開、そして可変ライフルを呼び
出した。その間、なんと驚きの1秒。自己最短記録を超大幅更新で
ある。そのままライフルを連射した。突撃したウサミミーハジン星
人に。

「お、おニナルド……幾らなんでも、あれは……」

「レストランクール」

「せつ」

対する織斑千冬は。

「残念だつたな。あれはその程度では死なん」

「……………そうですか、残念です」

果たして言葉通りであった。

瓦礫の中から不死鳥のようにな蘇ったウサマの女性は思いつきり飛び上ると、

「うむむむ……出会つて早々の連射。うう、れっくんが反抗期だよ~。

これが俗にいづシンデレだね!」

「安心してください。『デレがありませんから』

「これ以上にない冷たさでレナルドが言つ。普段の様子からは考えられない。

「織斑先生、胃が痛むので休んできていでですか?」

「普段なら却下する所だが……………今日は……」

自分の望んだ答えを得られるとレナルドはそれを退避する。ちなみに胃が痛いというのは本当である。この年でどうもストレスが大変なことになつてゐらしい。

「ちよつと、ちよつと… スト～～～～ップ!」

「ええい、なんですか!?」

「ホワイト・スコーピオン、貸して？」

「何故です」

「ええと、この前の学年別トーナメントで初めて変身したじゃん。だからちょっと整備を兼ねて点検をねえ」

何でE.I.S学園の日程と詳細を知ってるんだ。そういうたいのを堪える。この人に常識が通じないことはよく知つている。

「そうこうことなら、わかりました」

待機状態のホワイト・スコーピオンを渡す。そして最後に束を一警すると、レナルドは早足で去つて行つた。

海岸線を見ながら、レナルドはゆっくりと腰を下ろす。それにしても海は静かだ。あの生きる天災の喧騒もここには届かない。

「はあ……」

白状すればレナルドは束のことが嫌いではない。

子供のこりは良く一緒にラジコンを作つたり、修理してもらつたこともあし、顔立ちだつてレナルドの好みだ。

無論、多かれ少なかれ鬱陶しくは思つてはいるが、それでも本当に嫌つてはいるのならば会話することもなく完全に無視する。

「けど、なあ」

どうにも篠ノ乃束という女性は苦手だ。

束の作り出したI-Sのせいでの戦闘機が戦場の主役ではなくなつたというのもそうであるし、全く昔と変わらないテンションを前にすると、粗暴で乱暴だった子供の頃の記憶が否応にも蘇ってしまう。

「だけど俺を空に帰してくれたのも、あの人なんだよな」

皮肉なことだ。

篠ノ乃束という女の作り出したI-Sのせいでの戦闘機が戦場の主役ではなくなつたようになつた。

一体、あの人は自分になにをさせたいのだろう。
ずっと昔、とても大切な、忘れてはならない約束をしたような気がする。

もし君がその願い事を、大人になつてもずっと持つていられたら……

すきんと胃が痛んだ。

本当に最近は密度の濃い日々が続く。

いつも時は、また嫌な事件が起きそうな予感が

「レナルド！」

「筹？」

「織斑先生が呼んでこる。専用機持ちは全員集合するやうだ」

「な、何?」

「どうやら嫌な予感があつたようだ。

嫌な予感ほど良く当たるといつが、本当だな。

「どうした、レナルド?」

「あ、ああ。直ぐ行く。

けど篳。何でお前もつこてくるんだ?」

篳は専用機持ちはない筈だ。

もしかしたら案内をしてくれるのだろうか。

「実は、私も専用機持になつたんだ」

嬉しそうに篳が言つた。

その顔は嬉しげであり、同時に新兵特有の危つさを感じさせた。

ちょっとだけレナルドの過去話。

実は日本に来たばかりのレナルドは手の付けようのない乱暴者だった、と。

そして束のままだとヒロインは束とリカの一緒に討ちに来つたんですね。

FLIGHT 19 黃餓鬼

シナリオ。

舞台や歌劇、小説や漫画に至るまで『シナリオ』というのが存在する。

シナリオがあるからこそ物語は流れていく。物語は進んでいく。だけど現実にも『シナリオ』はある。

さて、今回の事件。シナリオを決めたのは誰か。

それさえ理解できたのならば、全ての疑問は納得いくであろう。

一夏が撃墜された。

その事実はレナルドを初めとする専用機持ち達。

そして只ならぬ気配を察したのか、現状を知らされていない一般生徒にも影を落としていた。

事の始まりは数時間前。

ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第

三世代の軍用 I.S.

通称『銀の福音』^{シルバリオ・ゴスペル}が制御下から離れて暴走し、監視空域より離脱した。

その後衛星の追跡により、現在 I.S 学園が合宿中の旅館より約 2 K 先を通過することが判明。

学園上層部の決定により合宿中のヒュウガ学園生徒によって、この事件に対処することとなつた。

学園側の現場指揮官である織斑千冬は、自身のクラスの生徒である専用機持ち、織斑一夏と篠ノ乃箒を派遣。一夏の専用機である白式の零落白夜の破壊力と、紅椿のスピードが必要だったからこそその選択であった。

ただしその決定に対してレナルドは反対。自身の作戦への参加を求めた、が却下されてしまう。レナルドの専用機である白蠍の調整が1時間は必要とのことなのが主な理由であった。

かくして一夏と箒の二人は、共同して暴走中の『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルに対して攻撃を仕掛けたのであるが、結果は、失敗。

作戦に参加した内の一人、織斑一夏の撃墜という最悪の結末であった。

もしもEVSの絶対防衛がなかつたのならば、一夏は間違いなく死んでいただろう。

その後『福音』は空域で停止。

現在専用機持ち達は待機を命じられ、織斑千冬はその後の対策に追われている。

「はあ」

溜息をつく。

今自分の手にあるのは先程、篠ノ乃束によつて返還された専用EVS、ホワイト・スコーピオン。

強く握りしめる。

もつと早くこれが戻ってきていれば一夏は。

「慣れないな」

パイロットになつてそれなりに経つが、何時になつても『撃墜』の2文字には慣れることが出来ない。それが例え戦死じやなかつたとしても、やはり駄目だ。

特に自分が戦場に出る事すら出来なかつたとくれば、その無力感は半端ではない。

「レナルド」

「あつ？」

振り返るとラウラが立つっていた。

違う、ラウラだけじゃない。

ハルマキ……いやセシリアが、鈴が、篝が、シャルルが。どこか『覚悟』を秘めた瞳でレナルドを見ている。

(二)の四 何処かで……

見たことがある。

そう漠然と感じた。

「おい。お前等、一つだけ聞いておくぞ。一体全体なにをする気だ？」

そうレナルドを除いた五人が着用しているのは等しくIISスース。今現在待機命令が出ている自分達が着ているのは制服でなければ

可笑しい。

「あり野蛮人は頭脳まで低いので？」

今から『福音』を倒しに行くに決まっているでしょう

「馬鹿な……！ 待機命令が出てるのを忘れたのかつ！」

「それでも私は行く」

答えたのは篝だった。

「なに一人で格好つけてんのよ。さつきまでメソメソしてた癖して」

「う、つるせいぞ！」

「それにね。私じゃなくて『私達』でしょ」

「………… そうだな」

「話にならない。シャルル、ラウラ。

お前たちからも言つてやれ。俺たちは『待機』だ。

『出撃』しきなんて命令は下つてない

しかしレナルドの期待を裏切るかのように、シャルル・デュノアは。

いやシャルロット・デュノアは首を振つた。

「ごめん。けど、僕も行くよ」

「お前まで！ ラウラ！」

最後の期待を込めてラウラに言ひ。

「そうだ。ラウラだけは自分と同じ正規の軍人。命令違反など許容する筈もない。」

「そうだな。確かに『出撃命令』は下つていない。

軍人として、命令違反なんて最もしてはいけない事の一つだ」

「そうな、なら

」

「しかし私は知つた。

軒並みな意見ではあるが、命令を比して尚も重いものを」

「命令より、重い?」

「そうだ」

言つとラウラは、五人は去つていく。

恐らく、福音のもとへと向かうのである。

それをレナルドは、ただ見送る事しか出来なかつた。

五人が去つて幾何かの時間が過ぎた。

負傷した一夏を除き、唯一命令に従い待機しているレナルドは、

途方もない虚脱感に襲われていた。

（何考てるんだ、籌や他の奴ならまだしも、軍人であるお前まで

……）

「そうだ。」

自分は何一つ間違っていない。

軍人は命令を遵守しなければならないのだ。

間違っているのは自分ではなく、命令違反を犯して出撃した五人のほうだ。

そう頭では納得させた。

けれど如何しても……『心』が納得出来ない。

「よお、レナルド」

「一夏、起きたのか

「随分と寝坊しちまつたみたいだけどな」

何故か不思議には思わなかつた。

レナルド・レストランクールにはこの状況で織斑一夏が目覚めるのは、『ぐぐく』自然なことに思える。理由は良くわからないのだが。

「お前も行くのか

「ああ」

「たつぐ、ぞいつも」いつも……。

待機命令が出ている。出撃は認められない

「そつか。じゃあ、命令違反することになるな。

参つた、後で千冬姉のお説教フルコースだよ。反省文三十枚くらい書かせられるかも」

そう一夏は笑つた。

命令違反なんて全く恐れていなかのようだ。

そして気づく。

一夏やラウラ達のしていた瞳は、嘗ての自分自身だつたのだ。まだ若く、パイロットになつたばかりの。ただ純粹な正義感だけで命令を無視できたあの頃の。

それが何時からだらう。命令に背くことが出来なくなつたのは。

「そうだな。俺は怖かつただけだ」

「怖い？」

「そう怖い、命令違反という行為が。

命令違反を犯したら自分や他の皆の命が危機に晒されるかもしれない、なんていう感動的な理由じゃない。ただ命令違反した後、どんな処分が待つてているのか……それが怖かつたんだよ、俺は。

体制に逆らうのが恐ろしかつたんだ。

けど仕方ないだろ。誰だつて大人になつて社会の歯車に組み込まれれば、自分の意思で動くことなんてできない。結局は体制に従つことが要求される

「そうだな。お前の言うとおり、やつぱり命令違反は悪いことだよな。

けど体制に従つて仲間を守れないのが大人だつていうなら、俺は大人になんかならなくたつていい。ずっと餓鬼のままで、仲間を守り続けてやる

「そつか

今一度、自身に問いかける。

レナルド・レストランクールは『餓鬼』か『大人』か。

解答。

レナルド・レステンクールは、

「くつくつくつ、ああそつだよなあ。

今の俺は『軍人』じゃなくて『生徒』だ。

そうだ『生徒』は『大人』じゃねえ。ガキだ。

馬鹿で阿呆で間抜けで、大人の敷いたルールつてやつを平然で無視して馬鹿騒ぎしてん餓鬼だ」

多少口調が子供の時のモノに戻る。

尚もレナルドは続けた。

「そつだ、俺達は『餓鬼』だ。
ルールも命令も糞喰らえッ！」

「お前だけじゃない。俺も一緒だ。

一人で命令違反しようぜ」

「そつと決まれば」

白蠍を天高く放り投げる。

太陽の光に反射され輝く白蠍は、やがて戦闘機へとそのフォルムを変え、大地に降り立つ。

「ホワイト・スコーピオンが複座式で助かつた。

一夏乗れ。白式のエネルギーをつまらない事に使う事もないし、こいつは紅椿よりも速い」

「そつか。ははっ、正直言うと俺戦闘機つて初めて乗るんだよな」

「ならケツに力込めとけ。つと込めすぎて捻り出せなによつてな」
レナルドの中で色々なモノが崩れ落ちていくような音が聞こえた。
だけど良い気分だ。
例えるならば長い刑期を終えて出所したような、とても爽快な気
分だ。

「「あの『福音』をぶつ瀆しに行くべーー」」

FLIGHT19 黄 餓 鬼（後書き）

さて、もう完全に前作主人公とは違う存在になりました。

レナルド大人から子供へ退化。精神的に成長するのではなく精神的に幼くなる主人公。わりと駄目な主人公です。

済んだことは済んだことだ。過去を振り返らず、希望を持つて新しい目標に向かうことだ。

過ぎ去つた過去を変えることは出来ない。

例えどれほど願おうとも、人の身にある限りそれは叶わぬ夢である。ならば、それを為そうとするのならば、人間を止めなければならぬ。

い。

太平洋上。

篠ノ乃束お手製の第四世代IS紅椿を纏う篝は呆然と迫りくる『福音』を見上げていた。

愚かなものだ。

一念発起。

自分を奮い立たせて再度『福音』に挑んだものの結果は変わらなかつた。

ラウラや他の皆が叫ぶが、もう遅い。

無人機であるが故に人の心を持たぬ『福音』に情け容赦という言葉は微塵もない。

篠ノ乃束はここで斃れる。

それは確定された未来に思われた。

味方の援護は間に合わず、援軍は絶望的だ。

元々篝達は命令違反を犯して此処に来ているのだ。

それにあそこに残つてゐる専用機持ちは一人。

レナルドは来ることを拒否し、一夏は前回のダメージのせいで寝込んでいる。

だから篝には田の前の光景が信じられなかつた。

雄大なる空。

そこに一機の風があつた。

「うそ

」

呟いた声は風に呑まれる。

真つ青な空と真つ白な雲を貫く漆黒の白蠍。

ホワイト・スコーピオンが戦闘機の姿をもつて、戦場へと飛翔してきた。

「一夏ア！」

「応！」

ホワイト・スコーピオンのコックピットが開く。
そこから『白』が飛び出してきた。

光を反射し輝く純白の機影、この世界における一人の男性IS操縦者の一人、織斑一夏の為に用意された専用IS。名称は、

「行くぞ白式！」

白式の刃が『福音』を攻撃。

しかし惜しい、寸前のところで『福音』は後退。白式の刃は空を

切る。

けれど、それは、

「俺を、忘れるなア！」

戦闘機形態だったホワイト・スコーピオンが瞬時に通常のエイシへと”変身”する。

右手に構えるのはBT-兵器と寒弾兵器のどちらにも変更可能な可変ライフル。

トリガーを引くと、銃口から一斉にゲームの嵐が『福音』を襲つた。

『

』

声にならない声が『福音』から漏れる。

刃を躲せた福音だが音速で飛ぶ銃弾を躊躇することは不可能であった。直撃を受けた『福音』が後退しようとするが、

「一夏、シャルル、ラウラ、酢豚中華人、そんでもってハルマキ！相手はたつた一機だ、囲んで仕留めろ！」

「分かつた！」

「うん！」

「了解！」

「ちょっと、私って酢豚で固定なのー？」

「誰がハルマキですか！ 誰が！」

いいですこと。IJのセシリア・オルコットの手に掛かれば、HSの五十機や千機」

「セシリア。そんなの如何でもいいから連携をとるが！」

「い、一夏さんが言つなら…………仕方ありませんわね」

「さつさとしろ。それと、HSは467機しかない。千機もあるか馬鹿」

「ちよ、馬鹿とは何ですの。この野蛮人！」

「なにを、この糞婆！」

「ば、ババア！？ わ、私はまだじゅう」

「レナルドもセシリアも喧嘩してないで連携をしろー。」

「…………」「解」

一夏に言われ二人の口喧嘩が終わる。

変わりに一人の顔つきが変わる。それは紛れもなく戦士の貌。

学生であるレナルドとセシリアは既にそこにはおらず、いるのは獰猛な狩人がいるのみであつた。

対して篝はそれを見ていることしか出来ない。

レナルドが、鈴が、セシリアが、シャルロットが、ラウラが、そして一夏が。

皆が必死に戦っているというのに自分は何もできない。

「私も、」

戦いたい。

あそこで、肩を並べて戦いたい。
無心の願いは果たして届いた。

「これは」

溢れ出す光。

紅椿はその現象を四つの文字で示した。

「絢爛舞踏。これが紅椿の

」

第の心は決まった。

福音の波状攻撃に一夏は有効打を掴めないでいた。

白式の零落白夜が決まれば一撃で落とすことも出来るところに、福音は頑として白式に近づこうとはしない。前回の戦いで零落白夜の情報が『福音』に記録されてしまった為だらうか。

「へへ、エネルギーが！」

ここに来るのはレナルドのホワイト・スコーピオンに同乗することで節約出来たが、それでも白式の燃費は非常に悪い。

ホワイト・スコーピオンはもとより、セシリアの『蒼い雲』にも効むほどだ。

そのままではジリ貧だ。そう思つて一時後退しきつとした所で、

「一夏ッ！」

「第！ お前、ダメージは！？」

「大丈夫だ。それよりも、これを受け取れ！」

第の紅椿の手が白式に触れる。
その瞬間、一夏の全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、
一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだ……？ エネルギーが回復！？ 第、これは

一夏の脳裏に『単一仕様能力』という言葉が浮かび上がる。
白式の零落白夜は対消滅の一撃必殺の攻撃だつたが、この回復こそが紅椿の真価なのだろうか。
だとすれば、凄まじい性能だ。流石は篠ノ乃束お手製というべきだろう。

「よし、これで

戦える。

雪片式型に力を籠め疾走。

逃げる『福音』

どうやら機械だつた、白式の攻撃力を恐れているようだ。

「やつぱり、まだまだよなあ

一夏は深く自覚する。

自分はまだまだだ。

チームプレイにおいてシャルに劣らないし、剣道だつて第には負

け続きだし、ビットを動かすなんて到底不可能だし、鈴の反射神経にも及ばないし、ラウラのポテンシャルには到底及ばない。

されど一夏は深く確信する。

敗北、ではない。勝利をだ。
職班一夏女勝利を確言した。

繪 王 一 夏 に 勝 玉 を 確 信 し た

「今だ、親友！」

ପାତ୍ରିକା

遥か高い上空から黒い流星が突進してくる。

ホワイト・スコーピオンはそのフォルムを戦闘機の姿へと変え、紅椿を、いや元々の自機のスピードすら凌駕して『福音』へと突き進む。

「安全性上昇！ カミカゼ、アタアツクツ！」

先日秉の手によつて調整された白歎。

今のが「イト・ス」ヒボンは一度だけ
自滅しないのがミカ
ゼを可能としている。

尤も二度目はないが。

突き刺さつた、福音にホワイト・スコーピオンが。瞬間、白蠍がそのフォルムを通常に戻す。

瞬間、白蠍がそのフォルムを通常に戻す。

対する福音は予定外の大ダメージに動けない。絶好のチャンスである。

発動する零落白夜。

もう外さない。そう、俺は。

「勝つ！」

零落白夜の刃が『福音』を切り裂いた。

そして余りのダメージを受けた『福音』は最後に一度だけ大きく震えると、その機能を停止した。

「これで」

「ああ、終わった」

まあ尤も。

敵を倒しました。はいお終い、と成程世界とは都合が良くない。

『福音』を撃破したレナルドと一夏達を待っていたのは織斑千冬
教官閣下による『反省文』という重い現実と、ほんのちょっとだけの優しさであった。

ただ、なにはともあれ今回の『福音事件』は終結した。

ここから先は生徒の領分ではない。後始末は大人の仕事である。
そして生徒は子供、大人ではない。

星が出ていた。

夜空に爛々と光る星空は、レナルドの心にどうしようもない憧れを思い起こさせる。

「『』苦労様だつたねえ、れつくん

「束さん、か」

レナルドは振り返らなかつた。

礼儀知らず、といえばそうかもしだれないが、篠ノ乃束という女性に普通の礼儀作法を遵守することがどれほど馬鹿馬鹿しいことなのかを、彼はよく知つていた。

第一、篠ノ乃束という女性自体が、そのよつた礼儀をどうでもいいと考える人間であることに疑念はない。

「綺麗だね、一人でソラを見るの？」

星を、とは言わなかつた。

「そうですよ、綺麗なソラでしょ、う」

一夏と一緒に命令違反して、こうしてソラを見上げると、なんとなく自分の原点に戻れた気がする。

退化どか成長とかじやない。

レナルド・レストランクールという人間が、物心ついた時から抱き続けた願望、憧れ、理想。

「ねえ、れつくんは何がしたい？」

それは確認だつた。

篠ノ乃束という一人の女性が、少年レナルド・レストランクールと嘗て交わした約束。

もし仮にであるが、レナルドが在り来たりな解答をしたなら、篠ノ乃束という女性はレナルド・レストランクールを興味対象から外す

かもしだい。

彼女が興味を抱いたのは子供のころの、ただ純粹にある願いを抱いた少年だったのだから。

そして、もしも彼がその願いを大きくなるまで抱き続けることが出来たのならば、その時は。

夕食を食べ終え部屋で涼んでいたラウリはふと意識を覚醒させた。

どうやら柄にもなくぼよーっとしていたらしく。

なんということだらうか。もしにこが戦場であつたならば確實に死んでいた。

どうも最近は弛んでいる。気を引き締めなければ。

ふと、布団の傍におこしてある本が目に入った。

その本の題名は『ヒトラーハビスマルク』というドイツでも中々手に入らなこマニアックなものだ。無論中身もドイツ語である。

「ああそうか。借りたまま、だつたか」

レナルドが読んでいたのを偶々目撃して借りたのだ。

まさか伝説的な本がこんな身近にあるとは思わなかつた。

内容が余りにもアレなために、ネオナチとドイツ政府両方から追われ、今では世界に二十冊もない貴重な本である。

その本を常日頃から一度でもいいから読みたい、と思つていてラウリである。

その日のうちにレナルドに貸してくれと頼み、そしてこの合宿中にいつも読み終えたのだった。

「返そひ」

そう思えば行動が早い。

早速ラウラは着替えを済ませ、クラスメイトからの情報収集によりレナルドが海岸へ行つたといふことを知ると、そこへ早足で向つていつた。

知らず、ラウラの歩調は軽やかだ。

レナルド・レストランクールという友人を思い浮かべると、不思議と嬉しくなる。

その感情を、ラウラ・ボーデヴィッヒは知らない。

本来の歴史であるならば、とある少年のストレートな言葉と織斑千冬が前に言つていた忠告により、その気持ちの正体を自然と理解できたのであるが、今の彼女には切欠というものが致命的になかつた。

それ故に、未だにその気持ちの正体に気づけない。“切欠”ができるまでは

暫く歩いていると、見つけた。

日本では珍しい金の髪。そして長身。

間違ひなく、レナルドだ。思いつきつその彼の名を呼ぼうとして、

「

瞬間、全ての声を忘却した。

何がしたいか。

「

天才篠ノ乃束の出す問いにしては普通すぎるそれ。
けれどレナルド・レストランクールは一切迷いなく、返答した。

「俺は、ソラを飛びたいんだ」

答えなんて決まっていた。

やはりどんなに取り繕つても、その原点だけは変わらない。
レナルド・レストランクールが眞実『レナルド・レストランクール』
である限り、その願いは消えない。理由など当たり忘れた。いや、も
しかしたら最初から理由なんてなかつたのかもしれない。

ただソラがそこにあつた。

だからレナルドはソラを飛びたくなつた。
それだけの、湧き上がる剥き出しの願いだ。

「それじゃあ

「ー」

気づけば篠ノ乃束の顔がレナルドの正面にあつた。
口元に感じる甘い味。この甘みをレナルドは知つていて。

「約束したでしょ」

彼女は、覚えていた。

「私が翼をあげる。どんなソラにでも飛んでいける翼を」

白蠍が光つた気がした。

もつと、束といつ女がもつと深くレナルドを

「

！」

パタン、という音。
それはこの場に似つかわしくない、なにか教科書なんかが落ちる
ような音。

「ラウ、ラ」

レナルドは見た。

月明かりに照らされ、呆然と立ちすくむラウラの姿を。
その瞳には、透明の雲が溢れていた。

修羅場ア――――――ツ！

修羅場です。本当に修羅場です。

メインが『悲恋』と『騎士道物語』だった前作と違つて、かなりの修羅場です。

これぞ三角関係。

好きなことを仕事にすれば、一生働くなくてすむ。
働くといつのは娯楽ではない。

しかし仕事が好きなことならば、仕事が娯楽となる。
つまり働くといつことが遊ぶことと同義となるのだ。
これほど馬鹿馬鹿しく、つまらないものもない

HS学園。

数ある高校の中でも日本一、いや世界一といつて過言のない難易度と倍率を誇るHS学園においても夏休みといつのはある。

といひで……。

ここHS学園においても一握りのヒート。即ち代表候補性と呼ばれる生徒たちがいる。

彼女達は其々が一つの国家の代表であり、総じてトップクラスの実力を持つている。

そしてフランスの代表候補性であるシャルロット・デュノアには一つの悩みがあった。

(うへへへんつ)

訂正、一つではなく結構悩みがあつた。

ただ主なものを一つあげるとするのならば、思春期の女子高生にはありがちな『恋愛』と『友人関係』の一いつに分類されるだろう。尤も彼女の場合、これに『実家の問題』が加わるのだがそれは置いておく。

先ず一つ目。

恋愛のことであるが……熱心なE.S.ファン、いや余り熱心でないE.S.ファンにも分かると思うだろうが、織斑一夏のことである。はつきり言って一夏は朴念仁だ。イケメン、黒一点とくればお約束であるが、とんでもない朴念仁である。スーパー朴念仁である。しつこいようだが朴念仁である。もう病気なんじゃないかと錯覚するほどに朴念仁だ。

シャルロットの目から見て自分も含め都合四人。

一夏に好意を寄せているが、当の一夏本人は全く気付いていない。まあ、それはいい。最初のころはドギマギもしたが、あんまり一夏が朴念仁だとシャルロットもムキになるのが多少馬鹿らしくなる。

今一番の問題は友人関係だ。

その友人関係の問題というのは一重にレナルド・レストランクールというクラスメイトに集約される。

レナルドが自分のことを未だに『シャルル』と呼び続けていること……これはそれほど気にしていない。本人曰く「もう呼び慣れてしまつたから直せない」らしい。というのも自分が男装なんかしてたのが悪いのだし、多少苦手ではあるがレナルドも友人の一人だ。

そんな事で目くじらを立てるほどシャルロットは大人げなくない。

大問題なのは同居人であるラウラだ。

「…………」

暗い！

まるでお通夜のようにラウカは暗かった。

ガーンという音が今にも聞こえてきそうである。

「ね、ねえラウカ！」

「…………よんだか、

シャルロット

「えと、そのお。レナルドと何かあったのー？」

言つてから「しまつた」と思った。

余りにも直球過ぎる。これではラウカは、

「…………ちょっとな」

（何処が、ちょっとーー？）

思わず心の中で突っ込みを入れる。

しかしどうしたものか。

シャルロットとしても同居人がこんな状態なのは好ましくない。ならばと思い、レナルドのほうに理由を聞いてみたのだが、こちらも「ちょっとな」と返答されてしまった。変な意味で似ている人だ。

（一体全体どうじよつ…………？

そうだ、じついう時の対処法は…………確かレナルドが）

レナルド直伝、悩んでる相手の対象方法。

その一、嫌なことは何か食べさせて忘れさせるべし。

「ねえラウラ。お腹すいてない？」

「すいてない」

失敗だ。

ならば、対処法その二、飲ませて記憶を消失させるを。

「ラウラ、お酒飲まない？」

「駄目だ。アルコールは脳細胞を破壊する」

大失敗。

というより未成年は飲酒禁止だ。

レナルドは飲んでるらしいが。

(やつぱり対処法その二に頼るしかないかな)

その三、即ち兎に角遊ばせまくつて忘れさせる作戦。

といつよつ最初からラウラに通じそつなのがこれしかない。

「ラウラ、僕と遊ばない？」

「」

「！？？」

瞬間、扉が開かれた。

そこに居たのは簫と鈴。

一人ともポカンと口を開けている。シャルロットも気づく。さつきの言い方だと、幾らでも違う方向に解釈可能なことに。しかもシャルロットはお風呂上りで多少色っぽくなっている。ラウラに至つては裸だ。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………お邪魔しました――――」

「ちょ、待つて! 一人とも絶対勘違いしてるよ――――」

「すまない、私達が空気を読めていなかつた」

「所謂K-Yね。」

「めん、アンタたちがそういう関係だなんて。
だけど大丈夫。私ちょっとは……そういうのにも理解あるから――――」

やばい。

このままだと自分の社会的立場が不味い。
慌てて一人を追いかける。

「だから違うって。ただ純粋にラウラを”遊び”に誘おうとしただけだよ――」

「じゅ、純粹な想いなのか!」

「ヤ」まで進展していたなんて……」

「だから違うよ。僕はただ一緒に街や公園でもいかないかなーと」

「街や公園!?

野外プレイだなんて、そんな趣味が」

「シャルロット、流石に野外といつのは…………不埒でないかと私は思つぞ!」

「ああもう! だから本当に全然意味が違うよ…………」

流石のシャルロットもキレた。

そりやもう色々なものが。説得すること數十分。

漸く鈴と篠の誤解を解くことに成功したシャルロットは氣を取り直して問いかける。

「それで、どうかしたの? こきなり部屋を開けて

「それなんだけど、シャルロットって来週空いてる?」

「空いてるけど、なんで?」

「実はね

「

「アイスランドにEIS学園の生徒を!?」

多少時間は遡る。

IS学園から多少離れた場所にある施設。

そこでレナルドは不幸にもIS操縦者となつたせいで、直属の上官になつてしまつた軍総帥である父親と連絡をとつていた。

『その通りだ。レストランクール少佐。
なに別に全員連れてこい、という訳じゃない。
ただ先日の福音事件。それを解決に導いた六人には多少興味がある
んだよ』

戸籍と血縁上は自分の父親である男の言葉にレナルドは反発した。
タメ口ではない。こうみえて、この男は公私混同はしない。ここ
にいるのはレナルド・レストランクールではなく、イスランド軍所
属のレストランクール少佐なのだ。そして相手はアイスランド軍を束
ねる総帥である。故に言葉遣いも変わる。

「ですが彼女達はいずれも専用機持ち、つまりVIPです。
そう安々と招くことは……」

『なにを勘違いしている?

私は一人の父親として、息子の友人を招こうとしているだけだが?』

「…」

つまりは、そういうことか。

専用機持ちとして六人を招こうと思えば色々と厄介なことになる。
しかし、あくまでもレナルド・レストランクールという同級生が、
友人として家に招くのであれば、そう面倒な手続きも省略出来る。
相変わらず強かな男だ。

『詳しい事は添付しておいたファイルを見る。
また読了後、ファイルは削除するよ。以上だ』

ブツン、と画面が消える。

添付されていたファイルを見ると成程、用意周到なことだ。
行きと帰りの飛行機から、食事やその他諸々、全部が用意済みで
ある。

「仕方ない。先ずは一夏に

」

だが本当に六人も来るのだろうか。

特にハルマキが来るとは到底思えないし、レナルド自身、ハルマ
キと一緒に（団体とはいえ）里帰りするなどお断りだ。
そして、もう一つ。

（ラウラ・ボーデヴィイッヒ）

眼帯をした銀髪の少女。

付き合っている訳でも恋人でもない友達。
なのに合宿の時の事を思い出すと、不思議と胸が痛んだ。
彼女は、来るのだろうか。

FLIGHT 21 アイスランドより愛をこめて（後書き）

次回から夏休みを使って『アイスランド編』になります。

嗚呼、懐かしのアイスランド。

嘗てルルーシュが暴れまわったアイスランドです。

弱い人間は素直になれない。

素直、というのは何も抵抗せず受け入れるということだ。人からの教えを受け取るという事だ。

とこどん弱い……特に子供は人を信じられても不確定なものを信用できない。だから社会や法律を信用せず、受け入れられない。認められない。その不条理を信じられない。

ラウラは呆然と飛行機の窓から外を眺めていた。機内には他にも一夏、篠、セシリ亞、鈴、シャルロット、付添として千冬、そしてレナルドがいた。

ちなみに山田先生はお留守番だ。

機内はとてもなく広い。

普通の旅客機だったら八十人分の席が用意できるスペースに、僅かな席しか用意されていない。

これがファーストクラスを超えたプライベートクラスか。余りこういった豪勢なことには免疫のないラウラには新鮮だ。

「ねえラウラ、この珈琲美味しいよ。飲まない?」

「ああ、すまない」

珈琲を口に含む。美味しい。流石はレナルドの搭乗する飛行機といふべきか。珈琲に関しては一級品だ。自動販売機の缶コーヒーとは比べ物にならない美味しさである。

急なアイスランド行きが決定したのが一日前。

当初招かれた専用機持ち達は困惑したが結局、一夏の「海外旅行なんて久しぶりだな」という一言によつて全員の参加が決まった。ついでに織斑先生も。

尤もラウラの場合は最後まで行くのを戸惑つていたが。

「一夏あ、そつちにある本とつてくれ」

「たつぐ、散らかすなよ…………はいよ。

これだろ『ティオバジヨルノ～究極の親子喧嘩～』」

「サンキュー、試に買ってみたけど、さて内容は…………」

レナルドは一夏と和氣藹藹と話してた。

当たり前か。

なにせ二人は数少ない男同士なのだ。ラウラだつて周りが全員男だらけで、一人だけ自分以外の女がいたら交友をもとつとする。

「うつ、DIOのザ・ワールドがレクイエムによつて時を止めたという結果に辿り着けない！」

やつぱり矢の力で先の力へ辿り着いたGERには勝てないのかッ！」

現在の自分の立場は篠やシャルロット達と非常に似ているが、違う。

シャルロット達が焦がれている相手、つまり一夏には特定の女性がない。というより、その鈍感さ故に恋人など出来たことすらな

いだろう。

だからこそ篠、セシリ亞、鈴、シャルロットの複雑な争いが展開されているのだ。

しかしレナルドは違うのだ。一夏とは決定的に。

そもそもレナルド・レステンクールはそれなりに女性関係が豊富だ。これはシャルロットからの情報なので間違いない。なんでも男だつた頃に本人から聞いたそうだ。

レナルドはアイスランド空軍のエースパイロットだつたということもあって女性にはモテたそうだ。それで何人か女性と付き合つていたとも。長続きはしなかつたらしいが。

「ば、馬鹿な！ DIOが矢の力でパワーアップだとオ！？」

ジョルノのレクイエムが無効化されるウ！

凄い！ これは分からなくなつた…………

そしてラウラは確かに見た。

あの合宿でISの第一人者であり発明者たる篠ノ乃束とレナルド

がキスしているところを。

暗くて表情などは見えなかつたが間違いなくキスしていたと思う。いや絶対にしていた。

田を瞑れば、その時の光景がありありと思い出すことが出来る。

「ぬあ！ ジョルノだけじゃなくて……つてポルポルが乱入した！？」

三つ巴の決戦だ！ でもポルポル弱い！ 一瞬でバラバラにされたよ。つてうお。DIOが氣化冷凍法使つた！ 第三部では影も形も出てこなかつた便利能力を使つた！ だけどレクイエムで無効化した……と思つたら時が加速した！ やべえ、DIOがプツチ神父を援軍に呼んだぞ！」

自分は…………どうしたいのだろう?
ラウラ・ボーデヴィッヒは、たぶん、

（好きなのだろうな）

変な話であるが、束とレナルドがキスしている所を目撃して漸く気づいた。

自分の気持ちに。想いに。

皮肉なことだろう。

明確な恋敵が現れたお陰で自分の気持ちを知れるなんて。皮肉としか言いようがないではないか。しかも相手はある篠ノ乃束ときた。ISを発表したことで、実質的に個人で世界を変革してしまった天才中の天才。いや天才中の天才すら超越してしまった常識の通用しない”魔人”である。

「つおおおおおおおおおおおおおつー?

まさかのカーズが宇宙から戻ってきた、だと! しかも矢に貫かれてスタンド能力に目覚めた。

究極生物にスタンド能力つてどんなチートだよ。時間が暴発したアツ!」

本当にレナルドと束は付き合っているのか?

そうでないにしても自分はどうすればいいのか?

ラウラには色々な事がこつた返していて良くわからない。

「やべえカーズが無限ループに嵌つた。レクイエムは鬼畜だな。しかしDIOとジョルノの共闘が見られるなんて夢みたいだ。まあそれだけカーズ様が危険だったということだけど。

あ、DIOがループしてた筈のカーズ様殺した。流石は進化したザ・ワールド。まさか本当に世界操るとは……。究極生物も世界その

ものには勝てなかつたのか……。

死ぬにしても特殊すぎる死に方ばつかしてんなこれ。くそお。普ツチも石に躓いて死んだし……再び親子喧嘩に戻つたな。ジョルノもパワーアップしてるし、これ止められる奴いるのか?」

「早く続々、続々！」

一 焦るな 夏。 素数を数えるんだ」

「あれって実際やつたけど結構落ち着けるよなー」

う。
アイスランド行きに参加したのは、やっぱり期待があつたのだろう。

もしかしたら、今回の旅行を切欠に

（切欠に、なにをするというのだろうな）

血驥ある。あよひと前までの血分なら考えもしなかつたことだ。
試験管ベイビーとして生まれ、ずっと戦士として生きてきたとい
うのよ」

(これでは恋する乙女ではないか)

兎にも角にも確かめよう。

自分の想いではない。それは既に自覚している。
だからこそ、この想いの果てを知らなければならぬ。
結果

「ああ、ジョルノが…………ジョルノが敗北した、だとオ！？」

「そんな……黄金の精神の持ち主が負けるだなんて……」

「正義じゃなくて吐き氣をもよおす『邪惡』が勝つなんて……なんといつ超展開だ。

生まれて初めてだ。ダークヒーローですらない悪役が勝利する展開は「

「これからD-I-Oの世界が始まるんだな……まあ一次創作だけど」

はい、そういう訳で今回は終始ラウラ視点。

今回主人公は出番なし。最初から最後まで本読んでましたw

怒りに対する最上の答えは沈黙。

沈黙は美德……という訳ではないが、それでも怒りに沈黙しそれを続けていれば、やがて怒りという業火は沈下する。

どのような大火事であろうと永久に燃え続ける訳ではない。その火炎が消えるときは必ず訪れるのだ。無論、人という生命の灯にも。

「漸く、ついたか」

アイスランドの空港に到着し迎えの車に揺られる事数時間。レナルド達一向は広大な庭に聳え立つ屋敷についていた。

「…………レナルド、もしかしてお前つて……金持ち？」

一夏が恐る恐る尋ねた。

「まあ糞親父はあれで軍の総帥だからな」

嫌々レナルドが応えた。

はつきり言ってレナルドは実の父親である総帥と仲が悪い。例え家を褒められても「お前は父親の庇護のもとで生きている」と突き

つけられるようで良い気分はしない。

第一自分は既に軍人として自律している。この家にも全く帰つてない。というより一度と踏み込むまいとすら思つていたのだ。それが、

(まさか、こんな形で帰つてくるとはな)

一夏含めた六人と付添兼お田付け役である千冬を連れてこいといふのは、アイスランド軍総帥から直属の部下レナルド・レストランクールへ下された命令である。幾ら『福音事件』の時に仲間の援軍に行くために命令違反をしたといつても、数年間の軍隊生活で叩き込まれた事が消えるわけではない。ただ嫌いというだけで命令違反などする事は出来ない。

屋敷の前に車が止まる。

ぞろぞろと一同が下車した。レナルドもそれに続く。すると一人の男が立っていた。最後に会つたのは学年別トーナメントの時か。

「おかえり、レナルド」

お久しぶりです、

「ほつ

敢えて階級付きで他人行儀に返答した。

馬鹿げているとは思うが、この家に帰つてきたのはレナルド・レストランクールではなく、アイスランド軍所属レストランクール少佐として命令に従つたから、ということを強調したかったのだ。

その意思表示に果たして総帥のほうは大して気にした様子もなく。

「さてミスター・織斑、ミス・篠ノ之、ミス・オルコット、ミス・鳳、ミス・デュノア、ミス・ボーデヴィッヒ。初めまして。

そしてミス・織斑。貴女のご高名はかねがね。初代ブリュンヒルデとこうして出会えたことも、私の息子の担任が貴女であることも、私にとって望外の喜びです」

「こちらこそ。レオナルド・レストランクール総帥。貴方のような方に招かれたのは私としても光榮です。数日間の滞在となりますが、ご子息を含めた生徒達には余り羽目を外すすぎないよう指導しておられますので」

「ははっ、いいのですよ羽目を外しても。学生の時は羽目の一つか二つ外すべきです。

大人になってからでは、常に人目が付き纏つて羽目を外すどころではありませんからね。

貴女も、そして私も」

「ご心中お察しします」

有名人同士で通じるものでもあつたのだろうか。

レオナルド・レストランクールと織斑千冬は固く握手をした。

「さて何時までも立ち話もなんでしょう。どうぞ」

久方ぶりの実家へ足を踏み入れる。

「わあ……」

最初にそう漏らしたのは誰だろうか。

だが成程。確かに屋敷内は整つており、豪邸といつても差し支えないだろつ。

壁には家主の趣味なのか騎士甲冑や鎧、ついでに日本刀や剣まで飾つてあつた。

「凄いわね、あんたの実家つて

「そうだな、あれでも軍総帥の住処だからな。この程度の邸宅は普通なんだろつよ」

「？ ビリしたの、そんなにムシャクシャして

「そ、そつか？」

鈴に言われて氣づく。

どつやら態度に出ていたようだ。いけない、いけない。ここには”命令”だから仕方なく帰つてきているのだ。表情に出す訳にもいかない。

第一これはレナルド個人の事情であつて一夏達は関係ないのだ。レナルド自身、出来ればよい思い出を作つて帰つて欲しい。ハルマキを除いて。

(どうせ一夏曰当で付いてきたんだろうが、くつくつくつハルマキ。覚悟しておけ。

我が家に紅茶”の一文字はないッ！何故なら非常に腹立たしくはあるが糞親父も大の珈琲党だからだ。それでもお前が紅茶を欲するといつのであれば、珈琲を抱いて溺死しろー。)

「おじレストランクール。何をぼさつとしている

「はっ！？ す、すみません」

いけない。どうやら少しだけトリップしていたようだ。
一応は実家だといつものに情けない。

「ああ、そうだ」

レオナルド・レストランクールが振り返り皆に叫びつ。

「夕食まだ時間があります。
どうだろ？ ここを少し行つた所でショッピングでもして来ては
どうかな。
友人や家族への御土産なども必要だろ？」

穏やかな笑みを絶やさずにそんな事を言つた。
皆に断る理由は見当たらなかつた。

「一夏ッ！ あれ珍しいよ、アイスランド名物アースガルズ弁当だ
つて」

「ひ、引っ張るなよシャル」

シャルロットが嘗てない強引で一夏の手を引く。

「くあらあー 待ちなさいよ」

「一夏ー こんな往来で手をつなぐのは、その…………不埒だぞ

「――」

「――夏さん―― あんまり一人で歩くと襲われますわよ――」

そしてシャルロットの抜け駆けを許すまじとばかりに篝達が追つてくる。

あれから一夏達はレナルドの父の提案に従つて、屋敷からやや離れた街に来ていた。首都一の大都會ほどではないにしても総帥のお膝元だけあって結構な規模の街。ちよつとした観光地も兼ねているらしくお土産には事欠かなくて済みそうだ。

「おいシャル。 もうちょっと、ゆっくり歩いちゃ。 レナルドとも合流しなくちゃいけな」

「

「一夏、人の恋路を邪魔するのは馬に蹴られて死ねばいいと思つよ」

「もうだな。 そんな奴は死ぬべきだ」

（（（（鏡見る））））

この瞬間、シャルロット含む四人の気持ちが一つになつた。以心伝心といふのはこのことか。まあ兎も角だ。

「じゃあ、あつちのお店行つてみようか

「え、だからレナルドと合流する為にも……」

「行くよねッ――」

「…………おつ」

余談だがこの時のシャルロットの表情は、激怒した千冬姉にも劣らなかつたと後に一夏は述懐している。シャルロットはそのまま強引に一夏を引っ張りワインデウショップに連れて行く。

そう、シャルロットの一番の目的は一夏とデートすることではない。ラウラとレナルドを自分たちから引き離すことだ。だけどシャルロットが手を貸せるのはここまでだ。後はラウラとレナルドの気持ち次第だろ。

(ラウラ、頑張ってね)

シャルロットは自分のルームメイトであり友達でもある少女に、心中で、されど力強いホールを送つた。友達の想いが成就することを祈つて。

次回は『テートタイム』。

甘酸っぱい青春…………だけで終わる筈もなく、親子対決も勃発しそうですね。

噂をすれば影

日本の諺らしいが、これには自分も大きく頷ける。

噂をすれば影というが、自分の知るとある人物は噂をしなくても家に落下してくるような相手だ。

そういう意味でいなら彼女は影ではない。影なら噂をしなければ現れないが、彼女は噂をしなくても勝手に表れてしまうのだから。厄介事を連れて。

アイスランドの街並み。

シャルロットが嘗てないほどの強引さを發揮したせいで、一夏は連れ去られ、それを追う為に篝達まで走り去ってしまった為、ぽつんとラウラとレナルドだけが残される。

「…………」

氣まずい。

合宿で東とのキスをラウラに叩撃されてからといつもの、びつこも話しくらいなのだ。

けど」「やつて呆然と立ち竦んでいる訳にもいかない。タイム・イズ・マネー。時は金なり。時間の浪費は金の浪費より場合によつては性質が悪い。

「なんだ。なあ、あそこにアースガルズクリームつてあるんだけど、食べるか?」

「そ、そうだな」

どうにか話を切り出す。

小走りで屋台へと行つて一人分のアイスを買つ。

「ほり……」

「すまない、代金は……」

「そのくらべ奢るわ」

「いいのか?」

「俺の財布事情を気にしてるなら問題ない。

こう見えても一応アイスランドの代表候補性つて肩書きだし、それにパイロットだから結構金銭的には余裕があるんだ」

「では、頂こひつ」

どんな素材を使ったのか黒色と赤色に染まつたソフトクリームの一つをラウラに手渡す。

ちなみにレナルド自身、これを食べたことはなかつた。美味しいとは聞いているが、どうにも色がアレ過ぎて抵抗感があつたのだ。

(覚悟を決めるか…………神よー)

先ずは一口目。先っぽの所を食べた。
口の中で広がる甘い味。これは以外にも、

「美味しい」

ラウラが言った。

けどレナルドも同意見だ。

見た目の大不気味さとは違つて味は一級品である。

「なあ、これどんな素材を使つているんだ?」

試に店員に聞いてみる。

「禁則事項です」

まあそうだろう。

秘伝の味は秘伝だからこそ意味があるので。
大衆に伝われば秘伝とはいえない。

しかし立ち食いというのも疲れる。
確かこの辺には……。

「あそこへ座るつぜ」

「分かつた」

ラウラと二人、アイスクリーム屋の近くにある公園のベンチに腰

を下ろす。

つい数年前は戦争で荒れていたこの街も今ではこの通り。

この復興の異常な速さにレナルドは祖国の底力に舌を巻く。ただ一つ、復興に自分の実父が関わっているというのが複雑であつたが。

「実はな

ラウラが口を開いた。

「聞きたいことがあるんだ」

ベンチに座り一呼吸着いたラウラは意を決して尋ねた。

「聞きたいこと……俺に応えられる範囲な」

了承の意。

正直シャルロットがここまで強引に場を作ってくれたことは驚いたが、それでも感謝しなければならない。これを確認しなければ自分は前へ進めないだろうから。

「レナルド、…………お前は、」

いやまた。

別にここで言つ必要はないのではないか？

今の今までそれなりに友好的な関係は続けていたのだ。だつたら、このままで……。

（ええい、何を戸惑つているラウラ・ボーデヴィッヒ！

敵前逃亡は重罪だぞ！）

咄嗟に自分を叱咤する。

この土壇場になつて臆するなどあつてはならぬことだ。

何時から自分はこんなに意氣地なしになつた。ただ工事や兵士としての強さだけではない。もつと精神的な意味での強さでも、あの人に憧れていたのではないか。

ならばこんな事に躊躇してはいけない。兵士としても軍人としても隊長としても、そして一人の女としても。故に。

「お前の嫁は……篠ノ乃博士なのか！？」

「よ、嫁え！？」

「部下に聞いた。

その……深いキスをしている者同士は嫁同士なのだと……」

「嫁同士つて。色々とツツ「ヨミ所はあるが、俺の日本語の知識が正しいならば、それ嫁じゃなくて夫じゃないのか？」

「日本では氣に入った相手の事を嫁という、そう私の部下が言つていた」

「そりながら…………日本で暮らしてたのはそこそこ長いが、そんな文化があつたというのは初めて知つたぞ」

「まあそれはいい。けど…………それでお前と篠ノ乃博士は」

あの時確かにラウラは見た。

海岸で一人がキスをしているのを。

しかも　自分の田が正しければ　あれはティープキ
スといつものだ。

「嫁じや ないよ」

「……？」

「ついでに言えれば付き合つてゐる訳でも恋人同士でも、ましてや将来を誓い合つた訳でもない」

「けど、確かにキスをしていただらうへ。」

「それは、そうだな。

実際あの人のほうが突然してきたとはいえ、避けよつと思えば避けられた。

そうしなかつたのは、多少なりともあの人に好意を持つてゐるからかもしだれない」

「かもしれない？」

曖昧な表現に首をかしげる。

「ああ。俺と一夏が昔馴染みなのは知つてゐるだらうへ。

だからその一夏の幼馴染である篠の姉である束さんとは、それなりに親交があつたんだよ。何回か壊れたラジコンを直してもらつたり、面白いゲームをくれたりしたから。

今はISとかあのテンションもあつて苦手だけど、やつぱり嫌いじゃない。そもそも本当に嫌いだったら幾ら話しかけられようと無視し続けてる。

だからきっと、心の奥底では好きなんだらうな

一人納得したように頷く。

しかしラウラとしては、レナルドが他の女性を好きといつのは余り聞いて嬉しい事じゃない。というより内心では嫌だ。

「やうか。じゃあ、やっぱりお前は…………あのひと、付き合ひのか？」

「どうだううな」

溜息をつきつづレナルドは応えた。

「今まで何人かと付き合ひたことはあるけど、あんまり長くは続かなかつたんだよ。

最長で七か月。最低で一週間。部下からは恋愛ソラを楽しんでいるくらいにしか思われてないけど、結構本気だったのもあつたんだ。けど、やっぱりダメなんだよなあ」

「何故？」

「俺がずっと別の女に惚れていたからさ。

昔からソラっていう最高の美女に片思いしてたからな。一股なんてそう上手くいく筈ないわな、そりや」

あつけからんと笑う。

その瞳は真っ直ぐ大空を見つめている。いやもつと遠く。地球という重力の牢獄から解き放たれた場所にある無限のソラを。

(やうか、こんなに簡単な事だつたんだな)

なんてことはない。

ラウラ・ボーテヴィッシュは、子供のように真っ直ぐ一つの夢を追いかけ続いているレナルド・レストランクールを好きになつたんだ。

「レナルド」

「おお？」

「もしお前がソラへ行くところのならば

「

レストランクール邸での夕食は、かなり上等なものだつた。流石は軍総帥お抱えのシーフの料理。そこのらの高級料理店よりも美味しい。

そして一度自分の部屋に戻り、とこづ時に実父であるレストランクール総帥、いやレオレナルド・レストランクールに呼び止められた。

「レナルド」

「なんだよ？」

夕食後だからか、それともラウラとのあれこれがあつた後だからだらうか。

やや適当にその声に応じた。

「一休みしたら、そこのエレベーターで地下に来てくれ。

無論、ミス・織斑やお前の同級生の皆も一緒にだ」

「地下？ いつそんなんものを……」

「私が総帥になつて直ぐだよ。尤もその頃にはお前も軍の宿舎に入つていたが」

「…………それで、何をするんだ？」

「模擬戦だよ。私とお前の。

ISはしつかりと持つて來い。お前のホワイト・スコーピオンを」

自分の父であるレオナルド・レストランクール総帥はそんな訳のわからない事を言った。

ISの男性操縦者はこの世界に一人だけであるのにも関わらず。

そんなこんなで次回は親子対決。

しかしレナルドは結構長い間日本に住んでいた事もあって書きやすいです。前作の生糀貴族でブリタニア人のレナードとは大違いです。レナードと違つてレナルドは日本語も喋れますし。

P . S .

WIKIPEDIAで「レオナルド」と検索すると.....。

後は「http://encode.syosetu.com/n1537t/」

だけど は厨一病前回なので見るには注意が必要です。けど期待されていった方多かつたので一話だけ。

瓢箪から駒が出る

全く予定外のことが起きる、というのは珍しい。

非常識な人間に囮まれて育つたレナルド・レストランクールは、日常生活が既に常識外であった為、大抵の物事は予定内なのだ。

しかしそれでも、周囲の非常識な人間たちは容易くレナルド・レストランクールの予定を侵害してくる。

模擬戦。

未だに実感が湧かない。いや信じられない。

レナルドには実父であるレオナルド・レストランクールが読み切れなかつた。

ただの模擬戦だというのならば分かる。

しかし父は「ホワイト・スコーピオン」を持つて来いと言つたのだ。模擬戦に不必要なものを持つてこさせる理由はない。

となると模擬戦でISを使う事は確定していると察することが出来る。

(だけど……)

一体全体どうしてISが必要なのか。
その一点だけが理解不能。

父の口ぶりからして模擬戦の相手は父自身。そして世界に男性の IJS 操縦者は自分を含め二人。父に IJS が操縦できる筈がないのだ。

そうやって悶々と考えている間に地下室に到着する。地下室というと弊害があるかもしない。

例えるならば地下闘技場。本当に何時の間に作ったのやら IJS 学園のアリーナと同等程度の広さがある。ここならば IJS で模擬戦しても何ら問題ないだろ？

そして一夏達ゲストは透明のシールドで防護された観客席にいる。生徒は全員どことなく首をかしげているが、ただ一人織斑千冬のみは鋭い眼光で地下闘技場を睨んでいる。

一流の IJS 操縦者としての直感が警告しているかもしない。これから出てくる常識外に。

「待ったか」

果たしてその男はやってきた。

レオナルド・レストランクール・自身の実父にして事実上このアイスランドという国を動かしている人間。ただ来たのは一人ではなかった。隣に自分とそう年の変わらないであろう少女を連れている。

「紹介しよう」

「アンネ・アウアー中尉であります！ レストランクール少佐！」

ピシッと少女は敬礼する。

黒髪に翠色の瞳の西洋人だ。背は低い。見立てではラウラとほぼ同じくらいか。

「………… 総帥、俺の相手は彼女なんですか？」

「何を言つてゐる。やつと言つただらう。」
「この私と模擬戦あと。さて定位置につけ。時間は無限ではないのだ
から」

「しかし、」

「諄いぞ」

「………… 了解」

仕方なしに定位置につく。

対するレオナルドは向かい側の定位置に。アンネ・アウアーと名
乗つた少女も同様だ。

「HSを起動しろ」

「

いい加減に口答えしても無駄だと悟つた。

レナルドは自分の白蠍を展開。一瞬の光がやむとHSを纏つた自
身の姿があつた。

「それでは、俺のHSを展開するとじよづか

「…………」

レオナルドがその一言を言つた瞬間。

レオナルドだけじゃない。場にいるすべての空気が停止した。

「馬鹿な！ ISは男には起動出来ない！
俺と一夏が唯一人だけの例外だ！」

そうだ。それこそISという兵器における絶対にして致命的な欠陥。

ISは男性には起動できない。その原則があるからこそ世界は女尊男卑の社会へなったというのに。

「まさか、アンタもISを起動出来るとでも……」

有り得ない話ではないかもしれない。

一人しかいないIS操縦者の片割れたる一夏は世界最強のIS操縦者たる織斑千冬の弟だ。もしISの素養に血の遺伝が関わっているのならば、或いは自分の父親であるレオナルド・レストランクールにもISを起動させることが可能なかもしれない。しかし、それを否と、レオナルドは否定した。

「それはない。

私も多少の興味があつて試にISに触れてみたが、ウンともスンとも言わなかつた。

どうやら私に似て女好きらしい」

「なら、どうやって……。まさか男でも操縦できるISを作り上げたつていうのか！？」

「それもない。いや無論そちらの研究もせではないたが、ISのロアは完全にブラックボックスになつていて、とてもでないが解析など不可能だ。

第一もしもそんな事が可能なならばとくへに他国がやっているわ」

「なら、どうやって戦つていつんだよ」

「そうだな、とレオナルドは頷く。

しかし悲嘆した様子はない。むしろ悪戯に成功した子供のような

無邪気な笑みを浮かべている。

「確かに起動は出来ない。だが、操縦できないと言つた覚えはないぞ」

「はつ？」

何を言つている、そう呟きかけて気づく。

レオナルドの傍らにいる少女が握っている宝石。あれは待機状態のHS。

「まさかつ！」

荒唐無稽な、しかし理にかなつた解答を察し驚愕する。

その考えが正しいのか否か。問うまでもない。レオナルド・レス・テンクールの表情がただ一つの答えを告げていた。

アンネ・アウアーといつ少女が一言呟くと、二人の体は眩い光に覆われた。

「起動させるのはあくまでも女。
しかし戦車然り戦闘機然り。別に兵器とは一人でしか搭乗出来ない訳ではない。
だからこその役割分担！」

起動を全て同乗者に担当させオペレーターは操縦に専念するツ！

操縦している間は、同乗者を完全な睡眠状態に入らせることにより、一つの意思の混在により操縦の際に起こる可能性のある混乱を防ぐ

光が止むと、そこに”一つ”の人影があつた。

黒一色の胴体。晒された頭部。間違いなくISHだ。

「これが多重運用。デュアル・コントロール

そして世界初の多重運用型ISH、プロト・マイガスだ！」

それは一つの革命だった。

確かに男性一人ではISHを起動させる事は出来ない。

けれど、これは紛れもない希望。自分や一夏のよつたな特例ではなく、どんな男性でも操縦可能なインフィニット・ストラトス。それは世界各国が競つて開発しようとして、遂には断念せざるをえなかつた夢。それが未完成な部分を残しているとはい、確固たる存在としてそこにあるのだ。

「ISHの登場から世界は緩やかに女尊男卑社会へと向かつていつた。それ自体を何もかも否定する訳ではない。俺は平等主義者ではなく寧ろ差別主義者。弱者が強者の食い物にされること大いに結構。しかし今の差別はそうじゃない。例え実力があつたとしても、男だからという理由で軽視する。愚かなものだ。世界の女性は女性でありながら、実力を正当に評価しないという愚を犯そうとしているのだからな」

今よりもずっと昔。

当時は男尊女卑が当たり前だつた。女性は妊娠すると退職を余儀なくされ、どんなに革新的なアイディアを出しても女性だからといふ理由で却下される。しかしその下らない男女差別はなくなつた。男女問わず個人の実力が正当に評価される時代が訪れたのだ。

だが今の時代それは失われつつある。昔とは逆に女性が男性を軽視して、再び個人の実力を評価しない時代が来たのだ。だからこそ、この男は反逆する。国家に対してもない。世界の意思そのものに。

「私は次回のモンド・グロッソに出場し、新たにブリュンヒルデの称号を掴み取る。

そして世界の目を覚してやるのだ。侮蔑されるべきは弱者、性別ではないと。

これが俺の出した、女尊男卑社会に対するたつた一つの絶対的な弱し肉強食だ」

レナルド・レステンクールはこの男の事を見誤っていた。
幾ら父であろうとこの女尊男卑社会の波には勝てない、そう漠然と考えていた。

けど違う。この男はそんなに生易しい器ではない。

この男の実力は、そんな社会という牢獄に縛つた所で抑えられるものではなかつた。

「さて模擬戦を始めようか。
構える、レナルド」

「一。」

「そう緊張するな。

実をいうとこのプロト・メイガス。未だにライフルの一つどころか武装の一切を搭載しておらず、ついでにPパッシュIC・イナーシャル・キャンセラーすらないという出来立てホヤホヤだ。

囁み碎いて言つと、单なるパワードースツのようなものでしかない

それならば、どうにかなるかもしない。

ホワイト・スコーピオンは何でも紅椿と同じく第四世代型らしい。基本スペックだつて第二世代型よりかは上だ。このアリーナでは変形するには不可能そうであるが、これでも『福音事件』などを通して、EISという兵器にも多少は慣れてきた。

相手がどんな分野でも一度も勝てたことのない相手でも、今度ばかりは。

「まあ尤も、それも関係ないかもしれないな」

瞬間、レオナルド・レストランクールが消えた。

「遅い」

「なっ！？」

気づけば目の前にプロト・メイガスがあつた。
一体全体何が起こつた。このEISは何の武装も搭載されていないのではなかつたのか。

「なに武装は何一つ使つてない。無論、单一仕様能力も。これは東洋でいうところの縮地とかいうものだ。どうだ、中々に速いだろ？」

レオナルドがその右腕を構える。

不味いと思つて防御しようとするが、

「力を抜け。さもないと痛いぞ」

腹にプロト・メイガスのパンチが突き刺さる。途方もない衝撃が腹を襲い、吹つ飛ばされた。

「が、は
」

動けない。

シールドエネルギーはまだ全然余裕があるところに、体が動いてくれない。

「どうなつて……ただのパンチで、操縦者にダメージを……」

「なに、ただ衝撃の一部を防御を貫通させて、中身の操縦者にぶつけただけだ。

当然全部ではない。HSのパンチの衝撃を全部通せば、今頃お前の内臓は木端微塵だ」

「」の
「

化け物が。

そう言つ前に、レナルドの意識は闇に沈んでいった。
完敗といつて文字と共に。

目が覚めると血室のベッドの上だった。
どうやら模擬戦で気絶してから運ばれたらしい。

「お、起きてしまったか

「ハハハ」

ゆつくつと体を起す。

「ウチの用にはタオル。毎日やつ今今まで看病してくれていたらしい。

「みんなは？」

「つこやつもまでいたのだが、もう遅いとこいつ事で教官が寝るよつに」と。

「私だけがこない」

「やうか

時刻は既に一時。

これが合宿や修学旅行だつたなりとつくの昔に就寝している時間だ。

「やうか、負けたのか……」

再びその事実が压し掛かってく。

今度こそは一泡吹かせると思っていたのに、今回もあつさつと完敗。

流石に凹む。生まれてから今まで父に何かで勝利したことば一度としてないのだ。

「つていうか、ありがとな。看病してくれていたんだろ？」

「別に大したことじやない。
私がやりたくてやつただけだ」

しかし何の因果だろうか。

じつしてEIS学園の皆と決別した筈のこの家にくるなんて。

父は、レオナルド・レストランクールは世間一般の基準に照らし合わせるに最低の父親だった。

実をいうとレナルド・レストランクールに母親はいない。だがそれは幼いころに母親が死んだというだけではなく、元々レオナルドは未婚なのだ。

自分が生まれる前も好色だったレオナルドは避妊処置こそして、いたものの複数の女性と関係を持つており、それがどこかで間違つて出来てしまつた子供というのがレナルドだ。なぜ自分を生んだ女性が自分という子宝を宿してくれたのか、なぜおろさなかつたのかは知らない。ただ分かるのはレオナルドのほうにその女性と結婚する意志はなく、かなりの額の手切れ金を用意していた段階でその女性が自分を生んでしまつたということだ。出産後に死亡というおまけつきで。

なんでも、その女性は天涯孤独の身だつたらしく、何を思つてか父レオナルドは孤児院や里親に出すのでもなく自分自身の手で育てた。理由は聞かされていない、というよりは聞いても答えてはくれなかつた。ただ薄気味悪く笑つて誤魔化すだけだ。

だがそんな事があつてからも父の好色は治らなかつた。全く老けないその美貌を良いことに、当時まだ幼い自分がいるにも関わらず愛人（未婚なので正確には違うが）を連れ込むなんてショッちゅうだつた。それに反発して何度も喧嘩して、最終的には父方の親戚がいる日本に行つたりもした。

そして空軍に入り、それなりにモテるようになつてから何人か女性と付き合つた事もあるが、やはり上手いかなかつた。どうしようもなく自分がソラばかり考えていたというのもあるが、もしかしたら遺伝なのかもしれない。父のように一股や四十九股こそしなかつたが、他人から見たら女をとつかえひつかえしているように思われただろう。

だけど.....。

そんなのはもう御免だつた。

そうだ。気が付けばそこにあつたのだ。

「ラウラ」

「なに、んつ

！？！」

その唇を自分の唇で塞ぐ。

熱く情熱的に。互いが熱で蕩けるまで。その唇を吸う。目の前にラウラの顔があつた。最初は驚いていたラウラだが、やがて全てを受け入れるかのように目を瞑る。手に伝わるラウラの温もり。

この温もりを失いたくないと思つ。

もしあ前がソラへ行くといつのならば

強く、強く握りしめる。

狂おしいほどに、抱いた女が愛おしい。

私も一緒についていく。どこまでも一緒に。お前は私の嫁なのだからな。

だからこれは契約。

レナルド・レストランクールからラウラ・ボーデヴィッヒへの。切つても切れぬ、永久まで続く絶対遵守の契約だ。

なんていうか…………主人公誰だよ、な回でした。

さて何だか意味深なセリフを言いまくったレナルドパパですが別に第一線で活躍させる訳ではありません。

謂わばるる剣における比古清十郎のよつた立ち位置ですね。

利によりて行え巴、怨み多し。

しかし人は生きているのならば、必ず利によつて行動することが求められる。

企業家ならば会社の利益の為に。軍人ならば祖国の利益の為に。利というのは人を動かす最大の要因の一つであり、切つても切り離せぬものなのだ。

作戦は完璧といって良いほど恙無く成功した。

深夜のレステンクール邸に忍び込んだ男は地下の秘密格納庫から首尾よく待機状態の『プロト・メイガス』を盗み出すとそのまま一階へと戻る。

男の隣にはもう一人仲間がいる。彼女の名は『アンネ・アウナー』レオナルド・レステンクールもまさか彼女が獅子身中の虫とは気づかなかつたらしい。

その男とアンネ・アウナーは嘗ては東軍のエースパイロットであった。東軍、つまり戦争で負け全てを奪われた者の側である。

あの戦争で全民衆の平等を望む共産主義の旗は完膚無きにまでに踏みつぶされたが、それでも希望を失わなかつた一部の者達はこうして反体制主義者

早い話がテロリストとして暗躍して

いるのだ。

実の所アンネ・アウアーがレオナルド・レストランクールによる極秘プロジェクトに関わることになるとは予想外だつた。

アンネはあくまでもスパイ。IS適性検査を受けたのも出来る限り軍の中枢に近付いて情報や内部工作をする為だつたのである。

しかし神の悪戯かアンネには素質があつた。そのお陰でイスランドが抱える、もしかしたら世界を変革してしまうかも知れない実験機を強奪することも出来たのだ。

勿論、あの計算高いレストランクール総帥の邸宅から実験機を盗み出すなんていうのは、幾ら元軍人達で構成されたテロリストとはいえ至難の業だ。

だがそんな彼等に手を差し伸べたのが『亡国企業』と名乗る一団であつた。胡散臭い相手だつたが、資金力と情報力に悩んでいた反体制主義者達には『亡国企業』の援助は渡りに船だつた。

そして一人が再び大地の上に、一階へと戻る。

後はこの近くにあるもう一つの基地から『ある物品』を盗み出したメンバーと合流するだけだ。

「何をしている?」

「「ツ!...」」

階段の上に人影があつた。

輝く銀色のロングヘア。眼帯で覆われた片目のせいでのミステリアスな雰囲気を醸し出す少女。

二人は知つてはいる。少女の名はラウラ・ボーデヴィッヒ。こんな可愛らしい外見をしているが、代表候補性の一人であり、軍人とし

て優秀な能力を持つ怪物である。

「ミス・ボーデヴィッヒ。どうしたのです、こんな夜遅くに？」

アンネ・アウアーがどうにか誤魔化そうとする。

「そ、それはちょっとな。そんな事より、そっちにいるのは？私はこの屋敷で働く人間は一応頭に呪き込んでいるが、その男は見たことがないぞ」

「！」

まったくもって、これだから優秀な人間と言つのは度し難い。その賢さ故に自分から死地に飛び込んでくるのだから。

ラウラ・ボーデヴィッヒが優れた兵士であることは知っている。生身では自分たち二人を同時に相手にしても容易く打倒してしまうということも。

なら簡単だ。

生身で戦わなければいい。自分たちの手には現代戦最強の武器であるE.Sがあるのだから。

ラウラの視線がアンネ・アウアーに集中している間に男が剥離剤を喰らわす。亡国企業から一つだけ渡されたE.Sを装着解除させる兵器である。

「起動しろ『プロト・メイガス』！」

「なつ、お前たち！」

ラウラ・ボーデヴィッヒがISを起動させようとするが無駄だ。先程喰らわしたモノが効いているのだから。その間に男とアンネ・アウナーはISを起動しようとする。

「させるか！」

だが自分たちは舐めていた。ラウラ・ボーデヴィッヒといつ少女を。

ラウラはISが起動出来ないと知るや否やIS起動中のアンネを弾き飛ばす。

「貴様！」

「何を企んでいるかは知らないが、戦場では一瞬の油断が命取りだ。覚えておけ！」

ナイフを構えたラウラ・ボーデヴィッヒが自分に迫る。だが、そこで驚くべき事が起きた。

「なつー！」

起動中だったのが原因なのかもしれない。

プロト・メイガスから溢れ出す光は男とそしてラウラを巻き込み、そして立っていたのは一機のISだけだった。

そう。あらうとかプロト・メイガスはラウラを使って起動したのである。

「なんてことだ……おい、アウナー！」

「…………」

反応がない。

どうやら氣絶してこらえらしき。

「まあいい」

多少状況が変わったが寧ろ好都合だ。
実験機だけじゃなくドイツの第三世代と操縦者が手に入ったのだから。

屋敷から物音が聞こえてくる。

もしかしたら騒動を聞きつけた者がいるのかもしれない。
不味い。こんな場所で暴れるわけにはいかない。レストランクール
総帥は首都レイキヤビクに行つており留守だが、今この屋敷には専
用機持ちが後六人もいるのだ。余りにも分が悪すぎる。

男はアンネ・アウラーを回収する事すら忘れて、屋敷から逃げ出した。

ラウラをE-S内部に収めたままに、仲間との合流場所へ。

「なんですかー！？」

首都レイキヤビクの指令室に呼び出されたレナルドの第一声がそれだつた。

他にも担任であり付添の千冬や一夏達の姿もある。

「あの、本当なんですか？
ラウラが連れ去られたっていうのは？」

興奮したレナルドと違い、やや落ち着いた様子で一夏がレオナルドに問うた。

「そのようだな。

私とした事が多少浮かれていたらしい。まさかアンネ・アウアーが反体制主義者のテロリストで、あまつさえ実験機が強奪されるとはな。

しかも原因は分からぬがプロト・マイガスにはミス・ボーデヴィツヒが同乗しているときた

「それで、追撃は？」

今度問い合わせたのは千冬だ。

彼女には担任教師としてラウラの安全を守る義務がある。その顔は『福音事件』の時と同じく責任感あるものとなっていた。

「勿論、事件の発覚を知るや否や首都レイキヤビクに配備してあつた一機のIJSを出撃させ、これの撃破にあたりました。

ですが厄介なことに

「

「総帥！ あれは我が軍の最重要機密では！？」

一人の側近らしい大男が焦って止めに入る。
階級を見ると大佐だ。

「大佐。これは既に我が国だけの問題ではない。

連れ去られたのはIJS学園の生徒であり、ドイツの代表候補性なんだ

「……はつ。申し訳ありません」

「失敬。で、追撃の件だが…………結果を言えば追撃部隊は全滅。命だけは助かつたものの全員が作戦続行不可能の重傷だ」

「「「「「……」」」」

「夏達は勿論の事」イスランド軍所属であるレナルドも、そして千冬ですら驚愕する。

首都に配備されているEISとなれば性能は最低でも第一世代相当。それが純粹な性能面では第一世代にすら劣るEISを全滅させた? なんの冗談だ。これは。そんな事が出来るのは…………。

「残念だが外れだ。別に敵の操縦者が常識外の技量の持ち主という訳ではない。

実はだ。強奪されたのはミス・ボーデヴィッヒとプロト・マイガスだけじゃがない。

我が軍の発見したとある物品が共に盗まれていてね」

「ある、物品?」

「レストランクール少佐、いや他の皆さんも。ロストテクノロジーという言葉を聞いた事は?」

「ええと、確か失われた技術のこと、でしたっけ」

「」の中で一番漫画などに詳しい一夏が応える。

レオナルドは頷くと、

「間違っていない。失われた技術、伝統工芸などにも当て嵌まるが、今回のは技術的なものでね。」

寧ろオーパーツのほうが近いかもしねない」

「だから、それが今回の事件がどういつ関係が

「発見されたのだよ、そのロストテクノロジーが。オーパーツが。このアイスランドの大地から」

「なつ！」

「それに使用されていた材質、燃料。そして開発用途や兵器としての方向性。

その全てが現代の技術力ではありえないモノだつた。その未知のモノを我々は便宜上ロストテクノロジーとして極秘裏に研究所に持ち込み解析させた」

「ええと、それって兵器なんですか？」

居てもたつてもいられないとばかりにシャルロットが尋ねた。彼女はラウラとも特に仲が良かつたので心配なのだろう。

「そうだ。それも面白い事に戦車や戦闘機といったものではなく……我々の認識するところでいうロボットのようなものだった」

「ふ、ロボットか？」

「事実だ。

当初は未知の燃料が一体全体どのようなモノなのか解析不可能な事もあり、実際に兵器として運営・量産することは諦めていたのだが……それをプロト・メイガスの外装パーツにしようという動き

が生まれてね。面白い案だと思い、私もなんとなく許可を出したのだが

「成功したのですか？」

「それは今回の事が証明しているだろう。

私も最初は半信半疑だつたよ。なにせそのロボットは発見された当初から腕がなかつたりと損傷が激しくてね。ＩＳの外装として改造するどころか、再び動くのかどうかすら疑問に思つていたのだから

「押し黙る。

嘘を言つてゐる様子はないし言う理由もない。

追い打ちとばかり追撃部隊が敗れた際の映像を見せられた。

成程、確かにレオナルドの言つ通りその兵器はロボットといつのが正しいかもしない。

これで中にプロト・メイガスが入つてゐるといつのだから驚きだ。

「まあこれの搭乗者を除いたメンバーは全員捕まえたのだが………」厄介なのはプロト・メイガスのほうでね。あれは今イスランド上空、いや、大気圏外にいる

「そんな大気圏外に出たつていつんですか！？」

ＩＳは昔は宇宙用のものだつたが、兵器としての運用が実用化してからは宇宙進出のほうは二の次になつていていた筈だ。

「そうだ。その後詳細不明だが『プロト・メイガス』はそこで停止。何をするでもなく停止している

「追いましょう。今すぐ！」

「フム。 しかしその機体は果たして大気圏外で

」

『全然ノープロブレムだよおーー!』

「！」

驚いてモニターを見る。

するとそこには、いつもじつこつたタイミングに現れるウサミミの顔が映し出されていた。

「これは篠ノ乃博士。ノープロブレムとは?」

だが流石の総帥というべきか。

レオナルド・レステンクールは見た目上は平然と問い合わせた。

『そんなの簡単だよ。ホワイト・スコーピオンは大気圏外での運用を第一に設計した工Sだもん! 宇宙の果てだらつと海中だらつと全力全開で使えやうよ!』

男は宇宙空間で一人佇む。
亡国企業からこの宙域で待機するように言われたが、未だに連絡がない。

仕方ないので、これの内部をあれこれと見てみる。操作はしない。もし間違つてここから放り出されたら大事だ。アイスランドの大地から発見されたコレス、アイスランドの技術が総力を挙げても詳細

が分からぬほどのオーパーツなのだから。

「ん、なんだこれ」

そんなおり男は見た。

このロストテクノロジー、常識外の技術で作られた兵器の中にあ
る常識的な文字列を。

アルファベットの文字列は恐らく名前だらう。多少煤けているが
読めないことはない。

『Sir Leonardo Enneagram』

嘗てこの機体。

とある世界において『カスタム・グロースター?』と名付けられ
た機体のパイロットの名だった。

恋なき人生は死するに等しい。

では恋多し男は誰よりも生きているのだらうか。

恋をしない男は、死んでいるのだらうか。

恋に気が付かない男は、生きている事に気づかないのだらうか。

世の中と言つのは、いつも無情だ。

アイスランド首都レイキヤビクの基地。

今、一機の戦闘機 否、一機の『I.S』が飛び立つとしている。

レナルド・レストンクール。アイスランド軍に所属する少佐にして唯一の男性の『I.S』操縦者。

「これが……？」

「そう。未さん血漫のホワイト・スコーピオンの隠し機能」

アイスランドで強奪されたオーパーツ、そして実験機『プロト・マイガス』は宇宙に上がつており通常の兵器では手出しができない。

だが白蠍は違つた。

篠ノ乃束曰く、この『I.S』は元々そういう用途で開発したらしく。

「ところで何で『プロト・メイガス』は宇宙で停止してゐるか分かりますか？」

レナルドにはそれが解せない。

プロト・メイガスを強奪した理由は分かる。

不完全とはいへ、世界初のどんな男でも操縦可能なISだ。

盗む理由など、それこそ星の数ほど思い浮かぶ。

だが実験機にしろ何にしろ、盗み出してから一旦逃げてから宇宙に留まる理由が分からぬ。

これを単純な事件に例えるならば、銀行強盗を働いた犯人が警察の手の届きにくい安全地帯だからといって、その存在を誇示し続けるようなものだ。

「うーん、それは天才の束さんにも分からぬかなあ」

「…………」

どうにも掴みにくい。

大体アイスランド軍の関係者でもないのに、こうやつて堂々と基地に入つてゐるのはどういうことなのだろう。

やはり実の父であるレオナルドと良からぬ取引でもしたのか。IS学園入学の時も少なからず接触があつたのは間違いないだろうし、もしかしたら多かれ少なかれ交友があるのかもしれない。束の性格からして、それが健全で友好なものとは考え難いが。

(だけど、ソラか)

不思議な気分だ。

またかこんな奇妙な形で夢が実現するとは。

(千冬さんには止められたけどな)

レナルドは元々アイスランド軍に所属していたが、今ではEIS学園の一生徒という扱いである。

確かに軍籍は残っているし階級もあるが、それでもEIS学園の生徒である以上、レオナルドからの要請を断ろうと思えば突っぱねる事が出来た。

けど、やはりレナルドとてEIS学園の生徒であると同時に軍人。愛国心というのも人並みに持ち合わせているし、プロト・メイガスが今後のアイスランドに必要不可欠なものだというのは分かる。

(まあ、本当はラウラを助けたかっただけ。いや、他にもソラに行くチャンスだつたからか……。

まったく、自分でも呆れるほど我が侭な男だよ、俺も)

助けに行きたかった。
ソラに行きたかった。

理屈ではない。

様々な感情がグルグルと回っている。
もう何が何なのか分からない。

だけど心の底から湧き上がる爆弾のようなエネルギーが、レナルド・レストランクールという男を突き動かしている。

準備が完了したホワイト・スコーピオンに搭乗する。

そして束の顔を真っ直ぐに見た。彼女にも伝えなければならないだろう。

自身の想いを。行動の結果を。

「束さん、ちょっとだけいいですか？」

レオナルド・レストランクールのいる司令室からその様子はよく見えた。

白蠍と名付けられていながら漆黒の胴体を「えられた機体。自分の息子が操り、そして今までに無限に広がるソラへ飛び立とうとする機影。

彼が息子を施設や養子に出さず、自分の息子にしたのは一つの賭けだった。

この禄でもない、多くの真に愛した女性を不幸にしてきた男の遺伝子を継いだ男は、果たして愛した女を幸福にできるのか。それが知りたかった。

だから今日は待ちわびた日。

もしレナルドが帰還した時に一人だったのならば、賭けは己の負けだ。その後は総帥の座を降りようかと思う。今まで請われてこの地位についていたが、もう十分義理は果たしただろう。この国に返すべき恩義はもうない。40代で退職というのも珍しいが、蓄えは十分すぎるほどあるので問題ない。その後の人生はIIS操縦者と息子であるレナルドの教育にも費やすつもりだ。

だがもしレナルドが白蠍の背に愛した女を連れていたのならば、賭けは己の勝ちだ。そしてレナルドは自分を超える。能力的な意味ではなく、一人の人間として。

愛した女を不幸に落としたものと、幸福にしたもの。

軍人としてではなく、人間としてどちらが優れているかなど語る
までもない。

その後は自分は軍人として生きる。人間としての人生で上回れた
としても、軍人としては最上の存在で居続けよう。

そして白蟻が黒でありますながら白と名付けられた理由が分かった。
ぐんぐんと真っ直ぐソラへ向かって飛翔するホワイト・スコーピ
オン。その大気圏外へ飛び立つための機能を発動させたホワイト・
スコーピオンは全身から白い光を放っていた。

「中々、凝った演出だな」

それが白蟻と名付けられた所以。

I Sとして戦う事などホワイト・スコーピオンの本領ではなかっ
た。

戦闘機形態への変身やタフネスさもついでに過ぎない。

ホワイト・スコーピオンは最初からソラに飛び立つ為だけのI S
だつたのだと、レオナルドは知る。

本当はこのまま珈琲でも飲みながら感傷に浸りたいところだが、
生憎とレオナルドは軍人だつた。もし賭けに負けて軍を去るにして
も今は軍人だつた。

だから直ぐに思考を切り替える。
予想だともう暫くか。

「総帥、I S学園のミス・織斑から通信が入っております」

「繋げ」

予想通りだ。

彼女ならこいつあると思つていた。

『レストランクール総帥』

「これはミス・織斑。

申し訳ありません。このような事態に巻き込んでしまい。
ですが」安心を。ミス・ボーデヴィッヒは必ずや救出致します」

『それなのですが

』

織斑千冬の要請は単純だつた。

ようするに、今回の追撃に一夏達を行かせてくれという事だつた。
実のところ、本当はアイスランド軍から正式な要請をすることも
出来たのだが、レオナルドはそれを敢えてせず、レナルドだけを向
かわせたのだ。

理由は様々だが、一つはもしもIIS学園の生徒に出撃を要求し、
万が一戦死してしまえばその責任の一端をアイスランドが負う事に
なるからだ。

既にラウラが渾われている以上、ドイツからの非難は避けられないだろうが、これにフランス、中国、イギリスまで加わるとアイスランドは根本から搖るぎかねない。

それを避けるために、敢えてレナルドだけを行かせた。そうすれば一夏達IIS学園の生徒達が助けに行きたいと言い出すのは分かつていたから。

結果として一夏達が戦死しても非難は免れないだろうが、一ちらから要請した場合よりかは被害は少なくて済む。

宇宙での戦闘は地上での戦いと異なる。

生命線であるIISが解除された後に待つてているのは、宇宙という

生命の存在を許さない冷たいソラだ。危険度にして5ランク。敵はオーパーツで武装した未知の敵。

かなりの難易度のミッションだ。プロであっても決死の覚悟で挑まなければならぬ戦場。

それがレナルドと、それに続こうとしている生徒達の向かう場所だ。

(まあ、恐らくは無問題だらうが)

それでもレオナルドは余裕。

というより一夏達の死は恐くないだらう。

何故ならば一夏という少年の死を、誰よりも篠ノ乃束が許容しない。

レオナルドはレナルドや一夏などから、それとなく篠ノ乃束のことを聞きだし、ある程度の人物像を固めていた。

興味を持った一部の人間以外には驚くべきほど冷たい女性。逆に興味を持った一部の人間には驚くべきほど興味を抱く女性。

それがレオナルドの見出した束像

もしかしたら今回の強奪事件にも一枚噛んでいるのではないかと、レオナルドは考へているほどだ。

彼女ほどの天才だ。

仮に一夏が宇宙空間に放り出されても、どうにかなるだらう。

実際そうだった。ホワイト・スコーピオン程ではないが、通常のISでもそれなりの時間安全に戦える追加装備を彼女は用意しているらしい。

それを使って、一夏達もソラに上がるという事も。

「ああ、そつか。これが目的か

事ここに至り漸くレオナルドは気づいた。

何故プロト・メイガスが宇宙空間で停止しているのか。

何故亡国企業か反体制主義者を唆してプロト・メイガスを強奪させたかに。

ばかな、味わってはならない快樂などあるものか！

世の中には誰にも理解されぬ物事に快樂を抱くモノがいる。

その者達は不幸だ。この世界で生きていく上でその快樂を抑えなければならぬのだから。

だが、レナルド・レステンクールはそのような人間ではない。

普通の人間と同じように泣き、同じように笑う事が出来る。

ならばまだ間に合つ。彼はまだ完璧ではないのだから。

「束。何をしている？」

千冬がアイスランドの基地内で、ただ静かに宇宙を眺めている束に声をかけた。

しかし相変わらずフリーダムな束である。

不法侵入や不法入国くらいの法律違反は束にとつて違反の内に入らないのだろう。

「ううん、ちょっと失恋しちゃつたあ

「は？」

初め千冬は昔馴染みの友人？が何を言つているか理解出来なかつた。

しかし束の瞳に溢れる透明な雫を見て、漸く何時もの突拍子のな

い冗談ではない」と悟る。

「た、束！ 突然抱きつくな！」

「わあああああああああああああああああああああん！！」

おい待て！ アイスランド軍の軍人達が見てる！

泣くのはいいが、
——端離れ

その後、哀れ千冬は十数分の間、束に胸を貸す事になる。援軍として、一夏達がソラへ向かつた五分後のことであつた。

感じる、星の鼓動を。この大地の蒼さを。

レナルドの騎乗しているホワイト・スコーピオンはただ真っ直ぐに、一心不乱にソラを目指して、やがてそこに到達する。

「こゝが、
宇宙か

ほんの一瞬、ラウラとかプロト・メイガスだとかの事が頭から消える。

ただ噛みしめた。今の感動を、漸く自分はここに至つたのだと。もし叶うのであれば祝砲でもあげたいところだつた。

「つと。名残惜しいが、何時までも漂つてゐ訳にはいかないか」

レーダーでターゲットを探す。

流石は束印のHS。素晴らしい性能だ。

ホワイト・スコーピオンは宇宙でも問題なく全力を発揮できる。

（見つけた！）

ターゲットを発見。

全HS中でも恐らく最速であろうホワイト・スコーピオンのMAXスピードで接近していく。

見えてくる影。全長約4m強、漆黒と紅とこつ白蠍と同じペイントの機体。

再び人型に変身しライフルを突きつける

「私はアイスランド軍少佐レナルド・レステンクールである！テロリストに告ぐ！ 武器を捨て……じゃないな、この場合。大人しく武装を手放しアイスランドに帰還しろ！ そもそもなれば、こちらは撃墜を辞さない！」

どうであるか。

レナルドは様子を伺う。

『黙れえ！ 西軍のイヌが！』

ノーモーションでアサルトライフルを連射してきた。
どうやら交渉の余地は皆無らしい。

「やうかい、なら……ンー」

強引にでも機能停止させて拿捕するだけだ。

戦闘機形態へとなり、アサルトライフルの弾丸を避けていく。対するターゲットも巨体に見合わぬ高速で飛翔していった。

「たつく、なんだってんだ！」

オーパーツといつのは半信半疑だったが、こうなると認めるしかない。頭ではなく本能で理解出来た。あれはこの時代のものではない。いや正確には大部分はこの時代のものではない、か。『アとなつているのはエヒ。つまりはこの時代の兵器だ。なら恐れる理由なんて何もない。

『戦闘機に変形とはまた変なものを…』

「変とは何だ！」

ハーケンのようなモノを飛ばしてくるターゲット。この程度避けられない筈がない。だが、

『遅い』

避けた所にそれはやって来た。

ターゲットの機体が今正にホワイト・スコープオンに振り下ろされとじているのは、真紅に染まった刃。

(やられん………)

『死ね』

爆発音。

ホワイト・スコーピオンではない。

驚くべきことに、田の前のターゲットの腕がもげていた。
周りを飛んでいるのは蒼いビット。

「まつたぐ、野蛮人は世話をやけますわね」

「たつぐ、一人で突っ走るなんて一夏みたいな事しないでよ

「お前は……ハルマキッ！ それに酢豚！」

「ちょ、私はハルマキ固定ですの！」

「酢豚って何よー。私には凰鈴音つていう名前があるのよー。」

援軍はそれだけじゃなかつた。

下から正確なる射撃と飛ぶ斬撃がターゲットを襲つ。

「シャルル！ それに篝まで！」

「僕は相変わらず野扱いなんだね…………」

「ふつ。どうやら普通の名で呼ばれているのは私だけのようだな

篝が胸を張つて言つ。

一方シャルロットは多少ぐつたりしていた。

『援軍なんぞでこの機体が…………』

「おじおじ、俺を忘れんなよ」

ターゲットの残った右腕が切り裂かれる。

一夏の白式だ。

「たつく、正に全員集合だな」

「悪い、遅れた」

再びターゲットに向き直る。

しかし一体どうしたというのか。

アイスランドの追つ手を全滅させたにしては、随分と動きが……。

「ああ、そうか。 そうだよな」

気づいた。

確かにあれは追つ手を全滅させられたかもしれない。
だがしかし、別に無傷で全滅させた訳ではないのだ。

ターゲットも相当のダメージを負つてここまで来ている。
その証拠にターゲットの胴体には消えない傷が幾つも。

「さて、と。

おいテロリスト！ 最後通牒だ。

大人しく武装を捨てアイスランドに帰還しろ！ 今ならば、もしか
したら命だけは助けてくれるかもしれないぞ？」

『ぐ、』

ターゲットのスピーカーから何かが漏れる。
それはうめき声だろうか。 それとも……

『ぐかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか

1

思わず後ずさる。

明らかに常軌を逸している。

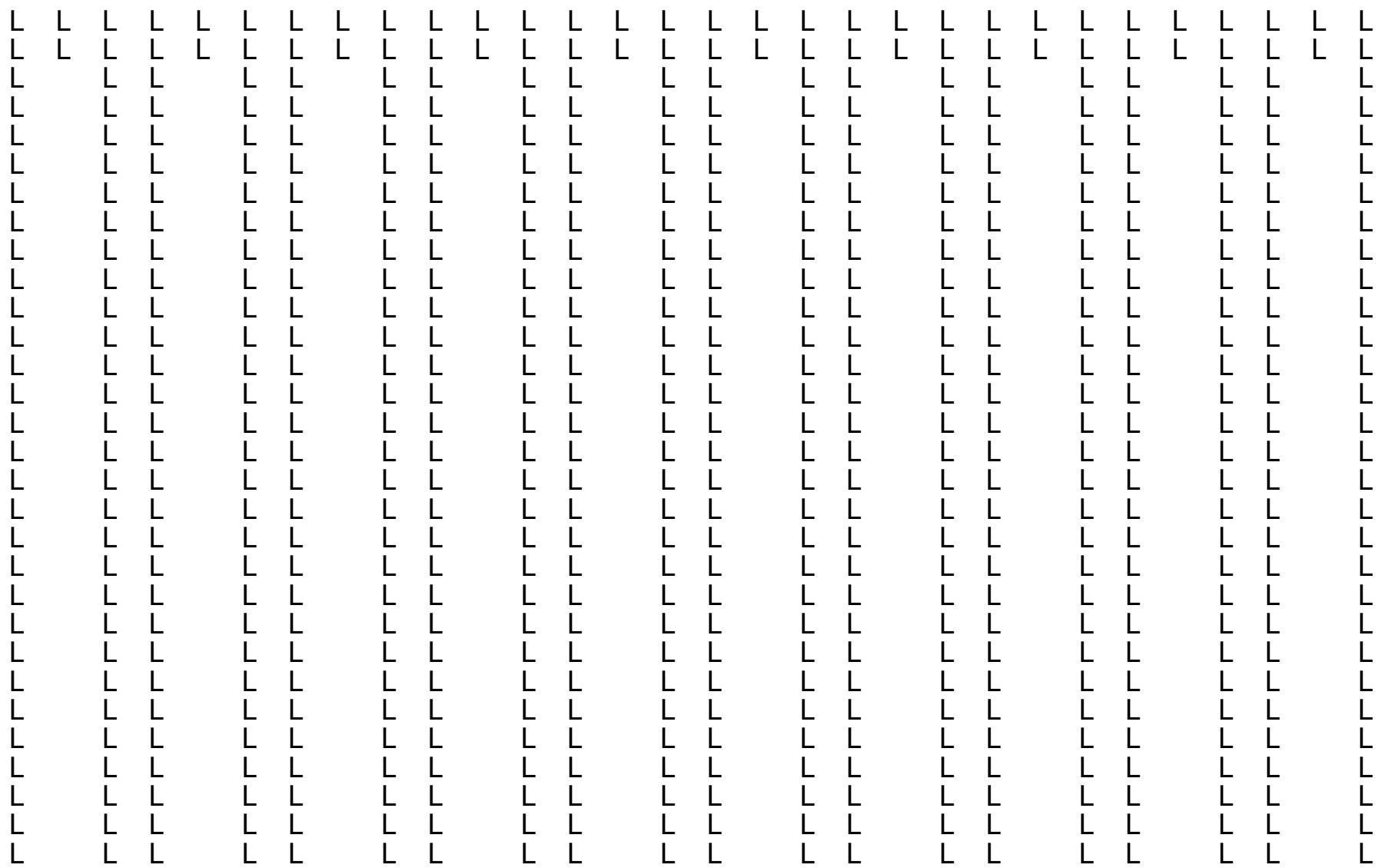
まさか追いつめられて狂ったのか。いや、狂つただけにしては、この心臓を驚撃みにされたような、この途方もない悪寒はなんだ。

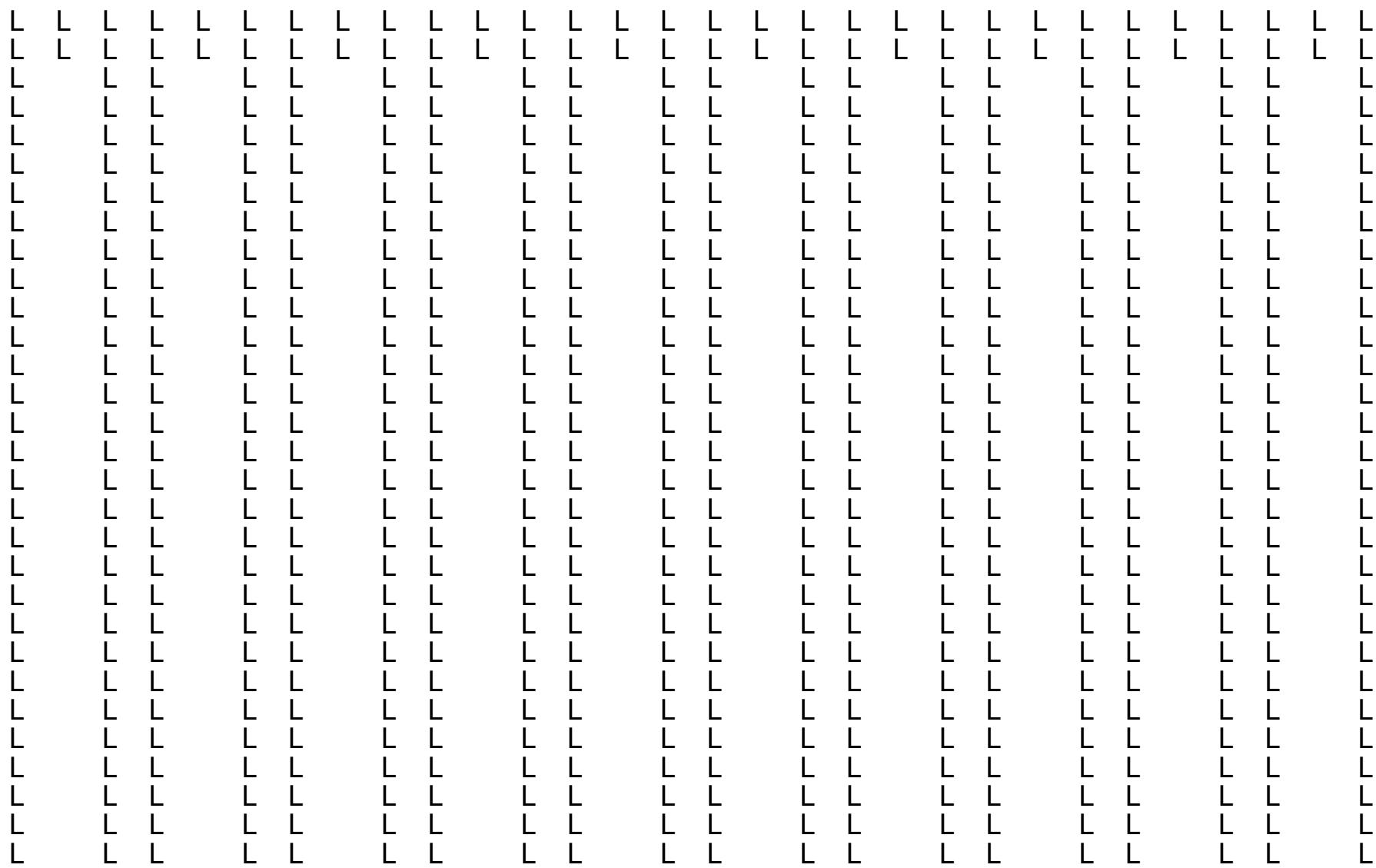
あけんd k j d k d k f か ふ え ふ え h f w j か ん f な f k う え
f か j ふ あ 馬 k n ふ あ n k j 苦 し k s f か n ふ あ k f か j じ や k n
g ふ あ k f ふ あ k 同 f オ ア j f 化 k 同 f 化 j f 化 j 墓 n つ か あ k f か j じ や k n
j 化 j ?~ じ や じ や 化 j 呵 呵 k j j か j k ふ あ j か j k ふ あ
k j か j f か j k f が j か j k w j 同 k w s f j け w s h f j か j じ や
f ん が k 1 な k 1 ふ あ k j f か 1 j f か j か j g か n k が k d
j j k d s k f は j f j か j ぎ お え う い お え h f k n k せ り お あ
i い お あ し え j な ふ お い あ j ふ あ k j f い お あ k d j n f ふ え お え r
h n g f か n g f え わ o f な j ふ え う い h g f え い w h n f ふ あ i h
n f g j え w n f が j k n f か n g n f な え う n k n f か j の え ね
w か n ふ あ h f あ n k j ふ あ j え b f g j や k f が h f が j g ふ あ
k n h じ え w g j や k n j あ ね o n g ね w に え w ん j や k n お え
o j か の が お い げ い お ね w ん ふ あ n f g か え w か ふ い お あ え n k ね

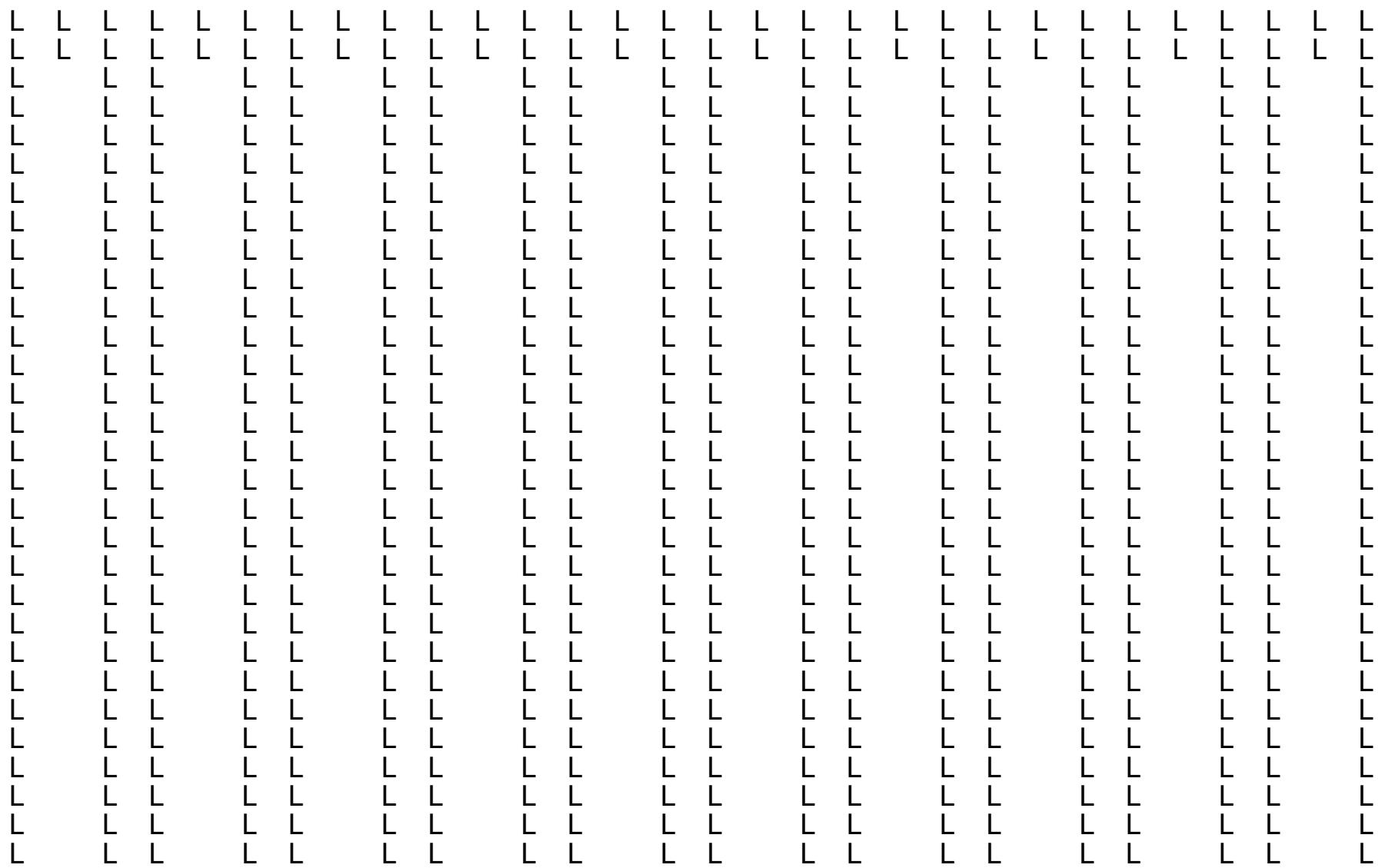
「おい、何を訳の分からない事を言つているー。」

居てもたつてもいられず、叫んだ。

それで何も解決することはない、おぼろげに察しながらも。







そして異常は起きた。

用意してしまった。最高級にケレイジーな存在が

レナルドも一夏達も知らない事だがラウラの機体には『Walk
ルカリ
yrie Trace System』と呼ばれる過去のモンド・
トレイス
グロツソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステ
ムが極秘裏に搭載されている。

そしてラウラの機体は今はあのターゲットの中、ニアニアシットであるプロト・メイガスにある。

本来の歴史では一夏とシャルロッテとのタッグマッチの際に発見されたそれは、運命の悪戯か今日まで影も形もその姿を晒すことなかつた。

たがそのシステムは今日、オーバーツ、カスタム・ゲロースターに残っていた未知の残滓からある一人の男のデータを再現してしまった。

い。それはあの束でさえ予測していなかつた事態。だがそれも仕方な

東はこの世界で最高の頭脳の持ち主だ。だがこの世界に存在しない物質を知ることは、どのような天才にも出来ないのだから。

『Valkyrie Trace System』は不完全なシステムが故に誰にも予測不可能な事態を生んでしまった。

システムが呼び起こしたデータは操縦者の男の脳髄を完膚なきにまで破壊する。本来の機能ではない機能が発揮されているのは、もしかしたらシステムの故障かもしれない。いや誰にも分からぬのだ。明確なる答えなど。だが確かに、フェイクとはいえその男はこの異界に招かれた。

黒い塊となつたター・ゲットから真紅の閃光が飛ぶ。
その突然の出来事に誰も着いていけず、その未知の攻撃をモロに
喰らつてしまつ。

論文一覧

そのまま新たに生まれ変わった黒い胴体は飛んで行つた。
深海のソラ。その更に奥へと。

「くそ！ 無事か！」

「ぐつ、ミスつたわ……」

「なんなんですか、あれは」

うん、無事だよ。なんとか……。問題は

シャルルが一夏と簫を見る。

二人は気絶していた。これは一人の技量もそうだが、二人の機体が燃費の悪い第四世代ということもあるのだろう。

その証拠に最高のタフさを持つホワイト・スコーピオンは無事だ。

「仕方ない。ハルマキ、酢豚、シャルル。

一夏と簫を連れて地球に戻つていろ」

「これは宇宙だ。

」のまま氣絶させていて、HUGが解除されたら……一人はアウトだ。

「だけどレナルドは……！」

「テメエの女くらいにテメエで守れないでじりつする？
安心しろ。戻つてくるわ」

ホワイト・スコーピオンが戦闘機形態へ変身する
そして振り向きやまに、

「ありがとな、セシリ亞に鈴、シャルロット。
一夏と簫にも伝えておいてくれ」

最後に本名を言つと、レナルドは星の海へ消えていった。
ただ逃げ出したターゲットを追つて。

幸いターゲットは呆氣ないほど簡単に見つかった。
ターゲットはその姿形を大きく変化させている。

目につくのは真紅の翼。黒い胴体に真紅のフレーム部分。
なにより悪魔のようなその形相。

『初めまして、だな』

「ツー」

思わず息をのんだ。

その機体から漏れた声は、今まで聞いた事のないものだった。

先程のIIS操縦者でもないし、勿論ラウラでもない。彼女はまだプロト・メイガスの内部で眠っているのだろう。強制的に

「アンタは、一体」

無性にこの声の主が気になつた。
だから思い切つて尋ねてみた。

その男の、真名を。

『レナード・エニアグラム。通りすがりの最強だよ、まあ再現されたデータだけどな』

FLIGHT 28 異常 事態（後書き）

そんな訳で本作主人公VS前作主人公（劣化版）とのバトルです。

ちなみに伏線は、シャル＆一夏戦の時にラウラのバーチシステムが未発動だったことですね。

そして束失恋。まあレナルドって優柔不斷なタイプじゃないので、仕方ないと言えば仕方ないのですが。

自らに勝つことこそ、最も難しい勝利。

己の運命に勝利する、それは簡単に聞こえて、実は最も難しい事だ。悲恋という運命を刻まれた男がいる。その男は生涯愛した女を失い続けた。

反逆という運命を刻まれた男がいる。その男は生涯反逆し続け、この世全ての悪を担つた。

平和という運命を刻まれた男がいる。その男は生ある限り世界平和を求め戦つた。

どちらも才覚や能力においては最高峰であつたが、結局は運命に抗えなかつたのである。

運命に抗う力は、能力や頭脳では得られない。否、卓越した頭脳や能力を持つからこそ運命からは逃れられない。だが、もし抗う事が出来る者がいるとすれば、それは世界の不条理や面倒なルールを無視できる最高峰の『馬鹿』なのではないだろうか。

レオナルド・レストランクールはアイスランドの基地で、自分の足元に倒れた一人の女を見下ろした。その女はアイスランドの軍人でなければ、国内の反体制主義者でもない。

彼女は亡国企業といわれる組織の一員。そしてその目的は、

「実に手の込んだことだ。

プロト・メイガスの強奪すら囮。本来の目的は私の命、か。やれやれ随分と亡国企業には嫌われたようだ。さて、どう思いますかミス・織斑？」

レオナルドは隣にいた織斑千冬に声をかけた。

彼女はつい先程まで着込んでいたスーツ姿ではなく、ベオウルフというアイスランド軍の第一世代型を纏っている。事前に自身の暗殺を察知したレオナルドの依頼を受けた為である。

「今はまだ、なんとも。

それより、宇宙に上がった生徒達は」

「無事ですよ。

どうやら敵IISの攻撃を加えられ、私の息子以外の生徒達は既に地球に降下しているようですがね」

「というと、レストランクールは！」

「ああ。単機で追つていったようだ」

「.....」

千冬が黙り込む。

本来ならレナルドに戻れと命令したい所であるが、今現在レナルドはIIS学園の生徒ではなくアイスランド軍のパイロット・ナイト小隊隊長コールサイン『ナイト1』として動いている。表立つては命令出来ないのでどう。

「なに心配する」とはないだろ？

「信頼しているのですか、お子様の事を？」

「そんなんじゃあない! ただ、昔を思い出してね」

「昔」とは?

「いつ見えて俺はこんな立場になる前は戦争大好きな困った奴でね。よく部下の諫言やらを無視して、前線に出て行つたものだ。だが残念なことに今の私の立場は総帥。おいそれと前線にも出れな
い」

.....

「それではお前のソラだ。思ひのままに飛ぶといい。

責任は全て私がとるう。なあ、レナルド！」

プロト・マイガスを纏つた、その『男』には男なりの正義や理由があつた。

があつた。

一人の軍人として、東側の掲げた自由と平等の為に戦つてきたと
いうのに、東軍は敗北し西軍による不平等が当たり前の政権が始ま
つてしまつた。

弱者は虐げられ、社会主義者というだけで放逐され、男のよくなれば生糞の主義者には生きていいく場所すらなかつたのである。

だから反逆した。

彼の信念と正義に従い行動を起こした。

けれど、そんなモノはもうない。

男の人格という人格は、この世のどこにもない場所にある、死者が行くかもしない所から流れてきた『とある人物』の情報が男の全てを破壊し尽くしてしまった。

そして男の全てを代償にして『とある人物』の3%がここに再現される。

機体はカスタム・グロースターから彼の最期の搭乗機であるマーリン・アンブロジウスへ。無論、性能自体は本物に到底及ばないもの、そこに刻まれたデータとを合わせれば、実に凶悪な存在となっていた。

そんな『彼』のもとにそいつはやって来た。

彼は薄く笑う。再現されたデータといえど記憶はある。人格もある。

だからこそ、彼は冗談交じりに言ひ。

『レナード・エニアグラム。通りすがりの最強だよ、まあ再現されたデータだけだな』

レナルドは思わず声を失つた。

この声はラウラのものでもなければ、さつきまで戦つていた男のものでもない。

ただレナルドの中にある全てが警告を告げていた。目の前の存在

の危険性を。

「レナード・ヒニアグラム……それに再現されたデータだつて？」

『ああそうだ。Walkyrine ヴァルキリ Trace トレース Systemって

知つてるか。俺はそいつで再現された

そのシステムは聞いた事がある。

確か過去のモンド・グロッソ出場選手の動きを再現するとかいうものだつた筈だ。

「だが、どういうことだ？ 如何してそんなシステムが搭載されていたかは知らない。

だけどあのシステムは、動きを再現するだけであつて、人格まではトレースしない筈だ」

『細かい事を気にするんだな、お前は』

「…」

咄嗟に避けた。

機体のすぐ横を通過していく赤黒い光。
もしも動いていなければ、やられていた。

『取り敢えず、だ。俺はお前の敵として再現された。
そして察するにこの機体の中にいる女を取り戻したい。

だったらお前の選択肢は一つだつ。

その愛を悲恋で終わらせたくないければ、さつと俺を打倒することだ小僧』

何故か銃などの武装を全て捨てて、漆黒の魔人が迫る。両手に握られているのは真っ赤な剣。

「武器を捨てた？」

『ハンデだ。精々一生で一番気張れよ。さもないと、殺されるぞ』

レナルドと名乗ったデータの言葉の一つ一つには、真に迫るものがあった。

だから言葉通りに気張る。今の自分が出せる全力を超えた全力で。必死に機体を動かす。

敵機の動きなどから判断するに、性能はこちらのほうが断然上。けれど、恐るべきことに漆黒の魔人は、あらゆるフェイントにも動じず、あらゆる攻撃も容易く対処してしまう。

格上だ。レナルドは悔しいがそう認めるしかなかつた。相手の実力は全てにおいて自分を上回つてゐる。

レナード・エニアグラムという男を、自分は知らない。モンド・グロッソの出場選手にそもそもレナルドなんて名前の人間はいないし、どうして人格まで再現されているのかも全く分からぬ。

だが実力は本物だつた。VTSシステムは未完成といつてはいたが、これほどの力を再現できるのならば十二分に完成といえるのではないか。そう思えてしまつ。

「だけどなあ。俺は負けられねえんだよお！」

一人の少女がいた。

その少女は自分のような人間に惚れてくれた。

はつきり言おう。レナルド・レステンクールはラウラ・ボーデヴィイッヒを愛していると。

そしてあれ「う」とか愛した女は訳の分からぬシステムの中にいるときだ。

なら単純だ。余計な思考を捨てる。プライドなんてどうでもいい。自分は聖人君子でも一夏のようない徹底した善人でもない。寧ろ善人にも悪人にも、大人にもなりきれない半端者だ。だけど、そんな半端者にも譲れないものがある。守りたいものがある。

だからこそ、レナルド・レステンクールは唯一つの事に目的を絞つた。レナルドの中から、アイスランド軍だの試作機だの、余計な目的は全て排除された。

国益でも義務でもない。ただ、己は。

「唯一人の女の為に、命を懸けるッ！」

『ふつ

ISを戦闘機形態へと変形させる。

そしてコックピットの内部にある一つのボタンを押した。

『カミカゼ』。嘗ての大日本帝国の若きパイロットが文字通りカミカゼとなることで、敵航空母艦に打撃を加える捨て身の業。束の改造により一度は耐えられるよう設計されている。だがこの宇宙でカミカゼを使う事は、文字通り命懸けである。それでも決めたのだ。

「カミカゼ、アタッククッ！」

一筋の閃光となつて、ホワイト・スコープオンが魔人へと突つ込む

だがそれには、魔人は対応してきた。

両手に持つた赤い刃。それが白蠍を真つ二つに両断しようとせんと迫り

何故か、その刃が途中で停止した。

『見事だ』

「えつ」

思わず声が出た。

漆黒の魔人は白蠍のアタックを受け、まるでボロ雑巾のように吹き飛ばされた。

その機体をスクラップへと変えていつて。

「何で？」

間違いない。

レナードはさつき間違いなく自分を仕留められた。なのに何故か、その刃を途中で止めたのだ。未完成なシステムの故障だと普通なら思う所であるが、レナルドにはどうしてもそうは思えなかつた。

そう、もしかしたらレナード・エニアグラムは己の意思で刃を止めたのではないか。

『なに簡単な事だ。

俺は正直お前よりあらゆる意味で圧倒していた。

その能力で主君の仇討も完遂したし、祖国を取り戻すことも出来た。けれど、生涯愛した女の為に生きれたことはなかつた。ああ、それだけの有り触れた英雄譚さ』

漆黒の魔人がバラバラに分解される。

その中からプロト・メイガスの機影が現れる。内部で寝かされていたラウラの姿も。それを受け止めようとするが、

「ラウラッ！」

プロト・メイガスが割れしていく。
不味い。このままでは、宇宙空間に放り出されて窒息死してしまう。

慌てて助けようとするが、間に合わない。

『そら、愛した女くらい守れ』

ふとバラバラになつた筈の黒い物体が動きだし、再び元の腕を作り。

そしそれそれがラウラの体を包み込み、優しくホワイト・スコーピオンのコックピットへと誘つた。

「レナー、ド？」

『悪いな。悲恋^{ぞいづつ}は俺だけの特権だ。誰にも譲らない、渡さない。ではなレナルド・レストランクール。ほんの一時の夢幻だが、良い気分だ』

そして今度こそレナード・エニアグラムという男のデータは消えた。

漆黒の魔人と共に。

ふとレナルドは自分が敬礼をしていることに気付いた。
意識してないでしてしまった、無意識下での行動だ。

「んつ……」

「起きたか、寝坊助」

「レナルドッ！ そうだ、プロト・マイガスの搭乗者の一人が、屋敷に忍び込んで……！」

むつ。といより、ここは宇宙…？ 一体どうなつて

説明するのが面倒だつたから、唇を奪つて強引に口を塞ぐ。そのまま、ゆつくりと唇を離し笑う。無性に気分が良かつた。

「なんだ。積もる話はあるがな。

見ろよ。ソラがソラだ」

「…………凄い」

言葉を奪われたのだろう。

そんな在り来たりな事すら、ラウラは言えなこようだつた。

それほどにソラは美しい。無限に広がる漆黒の海。所々にある星の島。

これ程までに美しい場所は、地球にもそうはないだらう。

「さて、と。それじゃじゃサクサク報告しないとな」

「報告？」

「ああ、そうだ」

通信を繋ぐ。

場所はアイスランド軍本部。

レオナルド・レストランクールへ。

繋がつた。

声の主はレオナルド・レストランクール・
自分の父親だ。

レナルドは笑つた。

思つ存分笑いながら、作戦結果と想いを告げる。

「ひちらナイトから本部へ」

』

息をのむ声が聞こえる。
そして朗らかに言つた。

「任務完了。俺の女は、無事に取り戻した」

無限のソラを飛びながら、背に乗せた少女と笑いあう。
もう一度ラウラとキスをして思つ。

たぶん、自分は我が儘だから、愛した女とソラ、二つが欲しかつたのだろう。

自分はもう絶対にこの二つを手放さない。

だから、もうこれで俺の物語は終わりだ。これからも俺は一夏、
篝、セシリ亞、鈴、シャルロット、そしてラウラ。皆と一緒に笑つて泣いて喧嘩して、そして卒業していくのだろう。
いつかまた、入学した時と同じ桜舞い散る季節に。

FIN

『コードギアス 反逆しない軍人』からの読者様はお久しぶりです。

本作品からの読者様は初めてまして。

作者であるRYUZENです。えつ？ 何でRYUZENなんて名前のかつて？ それは『反逆しない軍人』のTURN54をご覧ください。とある人物が全部説明してくれます。

さて毎作品恒例、完結後の後書きです。
まあ今の所一つしか完結してませんが。

何故このタイミングで完結させたかというと、そもそもインフィニット・ストラatosという作品 자체が未完結だったからです。

プロット段階では、ジャンヌ・ダルクが復活して第三次世界大戦勃発やら逆襲のレオナルドなど様々な予定がありました。

主な理由は、原作の作風を壊したくなかったというのが大きいですね。人死にが当然のコードギアスと違つて、インフィニット・ストラatosという作品はあくまで【学園ラブコメ】なので。その領域を超えないように、出来るだけ【学園ラブコメ】を意識しました。上手く出来ているかは微妙ですが。

さてさて、では余り一遍に書くと訳が分からなくなるので、また分割して。

【レオナルド・レストランクールについて】

前作からの皆様はかなり気になるこの男。

主人公の父親という、普通の作品なら余り目立たないポジションにいるのに関わらず無駄に活躍しまくった男です。

レオナルドとはイタリア語、ポルトガル語における男性名で、英語読みにするとレナードになります。

さてそんなこの男と、前作の主人公「レナード・エニアグラム」とどういう関係があるのかといつと、もうぶっちゃけますが、レオナルドはレナードの別の可能性です。 *F a t e / s t a y n i g h t s* とプリズマ イリヤにおける凜のようなものですね。

ようするに平行世界上に同時に存在する同人物であり別の人間とでも考えて下さい。

能力的にはレナードからワイヤードギアスを抜いただけ、という具合でしょうか。

つまりレナード・レストランクールというキャラは、間接的にレナードの息子ともいえるわけです。

【レナード・レストランクールについて】

本作品の主人公。

レナルドは、ぶっちゃけ未熟で子供です。

けれど子供だからこそ、彼はラウラを助けることが出来ました。

前作の主人公であつたレナードはある意味では完璧です。どのような戦場、どのようなコンディションでも最高の戦果を叩き出し、絶対に軍務に私情を交えない。謂わば完璧な戦士といえるでしょう。けれど戦士として完璧なのが、人間として正しいかどうかは別です。もしも前作の主人公であるレナードだったならラウラを助けることは出来なかつたでしょう。

【レナード・エニアグラムについて】

何故、全作品では生身でヴィンセントを撃破する程の最強キャラと化してしまったレナードが、ああもあつさりと敗れたかと言つて、もちろん劣化版というのもあります、一番の理由はレナード自身に勝つ気が皆無だったからです。

これで100%の再現だったのならば、帝国最強騎士の名に懸けて全力を出したでしょうが、本作品の彼はオリジナルより遙かに劣化しています。それに本体ではなくデータに過ぎません。

なによりレナルドは愛した女の為に戦つていました。だからこそ、レナードも「負けてやるか」みたいな気分になつたんですね。ぶつちやけると別にレナルドと戦う理由だってありませんし。

レナードの本心は、消える間際の言葉に全てが詰まっています。

【最後に】

最後に読者の皆様。

今まで本作品【Infinitiate Sky Knight】
【ファイニット・スカイ・ナイト】をじ愛読いただきまことにありがとうございました。私も感無量です。

『反逆しない軍人』からの読者様は、もう色々とありがとうございました！

一応今現在【Fate/not rebellion】反逆しない軍人の聖杯探索】という作品もやつてますので、時間がある方はそちらもご覧になつてくれると嬉しいです。というか是非読んでください。

では本当の本当に最後にもう一度、ありがとうございました！
お別れの前に、次回作予告を一つ、

それは、ちょっとした運命の悪戯から起きた、とても小さな出会い。

けれど一筋の光すら届かない闇の中にいた少年にとつては、とても大きな出会い。

「おなかへつた」

「はあ？」

十万三千冊の魔道所をその脳髄に宿した少女、インテックス禁書目録。

学園都市において第一位に位置する超能力者、ダークマスター未元物質。

一人はベランダで出合つた。

「うん？ 僕達、魔術師だけど」

「そうしなければ、インテックスは死んでしまうからですよ」

「曖昧な可能性なんて、いらない。あの子の記憶を消せば、とりあえず命を助けることが出来る」

「私と一緒に地獄の底まで着いてきてくれる？」

些細な運命の食い違いは、未元物質を魔術と言つ非常識の世界へと導びく。

彼女は絶対記憶能力者。それ故に重い運命を背負っていた。

「一年ごとに記憶を消さないと生きられない体、だつたか。たつくテメエも腐つた星のもとに生まれちまつたようだが」

けれど、第一位の少年は運命に抗う。

「だが一つ個人授業だ。耳の穴かっぽじつて良く聞きやがれ。この未元物質に、その腐つた常識は通用しねえ」

【とある魔術の未元物質～IF・もしもインデックスが出会ったのが帝督だったら～】

2011年春～夏に執筆予定。

そんな訳で次回作は禁書になりそうです。

実の所、当初の予定では一方通行とインデックスが出会うというIFをやる筈だったのですが、もうそのネタがやられていたので没になりました。帝督になりました。正にスペアプランw

だけどそれで良かつたのかもしません。原作では一方通行の黒

翼にあつさりやられ、冷蔵庫になつてしまつた帝督。「変わる」とのできなかつたもう一人の「一方通行」とまで言われる帝督。これは彼にとつての救いの物語でもあります。

ちなみに科学サイドの人間なのに【とある魔術】となつているのは、彼が出会つたのがインテックスだったからです。変な話それがフレンダだつたら【とある科学】になつていたでしょうw

さて。では、皆様。最後まで本作品をじっくり読んだとき誠にありがとうございました！

しつこいようですが、もう一度ありがと「わざ」ました！
RYUJINENの次回作を待つていて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1117s/>

Infinite Sky Knight <インフィニット・スカイ・ナイト>

2011年5月26日00時17分発行